

上田市文化財調査報告書第60集

# 史跡上田城跡

国指定史跡上田城跡本丸内発掘調査報告書

1997.3

上田市教育委員会

上田市文化財調査報告書第60集

# 史跡上田城跡

国指定史跡上田城跡本丸内発掘調査報告書

1997.3

上田市教育委員会

## 序

上田城は、天正11年(1683)に真田昌幸によって築かれ、徳川氏の大軍を相手に二度にわたる合戦を経験しながらも落城せずに守り抜いたという近世城郭としては極めて稀な戦歴を誇る名城です。しかし、真田氏の上田城は関ヶ原合戦後に破却され、私たちが目している上田城は江戸時代に仙石忠政によって築き直された城です。以来360年余の風雪と時代の変動に耐え、上田市と上田市民のシンボルとして受け継がれています。

上田市と上田市教育委員会は、上田城跡を国指定史跡としてふさわしく整備し、より良い姿で後世に継承していくために文化庁・長野県教育委員会の指導と助言のもと『史跡上田城跡整備基本計画』を平成2年度に策定しました。

『史跡上田城跡整備基本計画』では不適切な諸施設の城外移転や、発掘調査の結果と絵図や文献史料などに基づく遺構の復元整備を段階的に進め、城構えと歴史的景観を保存・復元し、上田の歴史を継承し体感できる場として整備していくことを最大の目標として掲げています。

本書は、平成5年度から平成7年度にかけて実施した上田城跡本丸内発掘調査の報告書です。詳細は本文中で述べますが、江戸時代の上田城絵図に見られる隅櫓、土塀、石垣などの遺構が確認され、瓦を中心に多くの遺物が出土しました。この成果は、今後上田城跡本丸の環境整備や遺構の復元を行うための重要な基礎資料となるものです。

本報告書の刊行にあたり、御指導いただきました文化庁文化財保護部記念物課、長野県教育委員会文化財保護課の皆様方と、冬期における厳しい条件下での発掘調査にもかかわらず、熱心に御協力いただきました作業員の皆様方に衷心より御礼を申し上げ、序といたします。

平成9年3月

上田市教育委員会教育長 内 藤 尚

## 例　　言

- 1 本書は、平成5年度から平成8年度にかけて実施した長野県上田市二の丸に所在する国指定史跡上田城跡本丸内の発掘調査報告書である。
- 2 上田城跡本丸内の発掘調査は、国庫補助事業として上田市教育委員会が直営事業として実施し、現場調査及び整理作業の一部を平成5年度から平成7年度にかけて行い、平成8年度に整理作業及び報告書の作成を行った。
- 3 遺構実測図の作成は、塩崎幸夫、池内宣裕が行ったほか、全体空中写真測量・図化を株式会社写真測図研究所（長野県長野市）に委託して実施した。また、トレースは饗場奈那江、石合好江、斎藤かな枝、田村まり子が行った。
- 4 出土遺物の実測、拓本、トレースは塩崎、饗場、石合、斎藤、田村が行った。
- 5 遺構及び遺物の写真は、塩崎が撮影した。
- 6 本書の執筆、編集は塩崎が行った。
- 7 本調査に関わる資料はすべて上田市教育委員会の責任下に保管されている。その際に用いる遺跡の略号は、「UDJ」である。
- 8 本書が上梓されるまでには、多くの方々や諸機関の御指導、御協力を賜った。以下、御芳名を記して深く感謝の意を表したい。

森島稔（故人）・山岸猪久馬・甲田三男・寺島隆史・竹内和好

文化庁文化財保護部記念物課・長野県教育委員会文化財保護課・上田市公園緑地課  
上田市立博物館

（順不同・敬称略）

## 凡　　例

- 1 各遺構の平面位置の表示は、平面直角座標第VII系を座標変換して表示した。
- 2 遺構平面図の方位は国家座標の北を示し、土層図の水系レベルに記した数値は標高（単位：m）を示す。
- 3 土層の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修1988及び1990）に準拠した。
- 4 挿図の縮尺は、以下のとおりである。  
隅拂跡 = 約 1 / 74 配石遺構・石碑跡 = 1 / 60 その他の遺構 = 1 / 100  
軒丸瓦・軒平瓦・棟瓦・菊丸瓦 = 1 / 3 (第34図のみ 1 / 4) 丸瓦・平瓦・輪違  
い瓦 = 1 / 4 鬼瓦 = 1 / 6 (第73図のみ 1 / 3) 石製品 = 1 / 4 土器・土製  
品 = 1 / 3 鉄製品 = 1 / 3 銭貨 = 1 / 1
- 5 遺物写真的縮尺は、以下に記したものを除いては任意である。  
軒丸瓦・軒平瓦・棟瓦・菊丸瓦 = 約 1 / 3 銭貨 = 約 1 / 1
- 6 写真図版中の遺物番号は簡略化した（例第27図18→27-18）。

# 目 次

序

例

言

凡

例

目

次

挿図目次

写真図版目次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の体制	1
第3節 調査日誌(抄)	2
第4節 調査の方法	2
第2章 上田城跡の概要	4
第1節 上田城跡の沿革	4
1 真田氏による築城と慶長の破却	4
2 仙石忠政による復興	4
3 松平氏在城時代	5
4 明治以降の上田城	6
第2節 上田城歴代藩主	7
第3章 発掘調査の結果	10
第1節 調査の概要	10
第2節 遺構	12
1 隅櫓跡	12
(1)第1号(北西)隅櫓跡 (2)第2号(北東)隅櫓跡	
(3)第3号(北東)隅櫓跡・近代建造物跡	
2 土壙跡	13
(1)本丸東辺土壙跡 (2)本丸西辺土壙跡 (3)本丸南辺土壙跡	
(4)本丸北辺土壙跡	
3 石垣跡	14
(1)石垣跡 (2)通路跡	
4 配石遺構	15
5 近代以降の遺構	15
(1)招魂社跡 (2)招魂社社務所跡 (3)石碑跡 (4)弓道場跡	
(5)その他の遺構	
第3節 遺物	38
1 瓦	38
(1)軒丸瓦 (2)軒平瓦 (3)棟瓦 (4)菊丸瓦 (5)丸瓦類	
(6)平瓦類 (7)輪違い瓦 (8)鬼瓦	
2 石製品	42
(1)五輪塔 (2)石臼	
3 土器・土製品	43
(1)土器 (2)土製品	
4 金属製品	43
(1)鉄製品 (2)銭貨	
5 その他の遺物	43

写真図版

報告書抄録

## 挿 図 目 次

第1図 上田城跡位置図	8	第34図 軒平瓦実測図(1)	53
第2図 上田城跡現況及び調査グリッド設定図	9	第35図 軒平瓦実測図(2)	54
第3図 上田城跡本丸内発掘調査範囲図	17	第36図 軒平瓦実測図(3)	55
第4図 第1号(北西)隅櫓跡実測図	18	第37図 軒平瓦実測図(4)	56
第5図 第2号(北東)隅櫓跡実測図	19	第38図 軒平瓦実測図(5)	57
第6図 第3号(北東)隅櫓跡及び 近代建物跡実測図	20	第39図 軒平瓦実測図(6)	58
		第40図 軒平瓦実測図(7)	59
第7図 本丸東辺土塁実測図(1)	21	第41図 棟瓦実測図	59
第8図 本丸東辺土塁実測図(2)	22	第42図 菊丸瓦実測図	59
第9図 本丸東辺土塁実測図(3)	23	第43図 丸瓦実測図(1)	60
第10図 本丸西辺土塁実測図(1)	24	第44図 丸瓦実測図(2)	61
第11図 本丸西辺土塁実測図(2)	25	第45図 丸瓦実測図(3)	62
第12図 本丸南辺土塁実測図(1)	26	第46図 丸瓦実測図(4)	63
第13図 本丸南辺土塁実測図(2)	27	第47図 丸瓦実測図(5)	64
第14図 本丸北辺土塁実測図(1)	28	第48図 丸瓦実測図(6)	65
第15図 本丸北辺土塁実測図(2)	29	第49図 丸瓦実測図(7)	66
第16図 本丸北辺土塁実測図(3)	30	第50図 丸瓦実測図(8)	67
第17図 石垣跡実測図(1)	31	第51図 丸瓦実測図(9)	68
第18図 石垣跡実測図(2)	32	第52図 丸瓦実測図(10)	69
第19図 石垣跡実測図(3)	33	第53図 丸瓦実測図(11)	70
第20図 配石遺構実測図	33	第54図 丸瓦実測図(12)	71
第21図 招魂社跡実測図	34	第55図 丸瓦実測図(13)	72
第22図 招魂社社務所跡実測図	35	第56図 丸瓦実測図(14)	73
第23図 石碑跡実測図	36	第57図 丸瓦実測図(15)	74
第24図 弓道場建物跡実測図	37	第58図 丸瓦実測図(16)	75
第25図 軒丸瓦実測図(1)	44	第59図 丸瓦実測図(17)	76
第26図 軒丸瓦実測図(2)	45	第60図 丸瓦実測図(18)	77
第27図 軒丸瓦実測図(3)	46	第61図 平瓦実測図(1)	78
第28図 軒丸瓦実測図(4)	47	第62図 平瓦実測図(2)	79
第29図 軒丸瓦実測図(5)	48	第63図 輪違い瓦実測図(1)	80
第30図 軒丸瓦実測図(6)	49	第64図 輪違い瓦実測図(2)	81
第31図 軒丸瓦実測図(7)	50	第65図 輪違い瓦実測図(3)	82
第32図 軒丸瓦実測図(8)	51	第66図 輪違い瓦実測図(4)	83
第33図 軒丸瓦実測図(9)	52	第67図 輪違い瓦実測図(5)	84

第68図 輪違い瓦実測図(6)	.....	85	第74図 石製品実測図(1)	.....	90
第69図 輪違い瓦実測図(7)	.....	86	第75図 石製品実測図(2)	.....	91
第70図 輪違い瓦実測図(8)	.....	87	第76図 土師質土器実測図	.....	92
第71図 輪違い瓦実測図(9)	.....	88	第77図 羽口瓦実測図	.....	92
第72図 鬼瓦実測図(1)	.....	89	第78図 鉄製品実測図	.....	93
第73図 鬼瓦実測図(2)	.....	90	第79図 銭貨拓影図	.....	93

## 写 真 図 版 目 次

図版1 史跡上山城跡全景	.....	97	図版20 軒 平 瓦(2)	.....	116
図版2 第1号隅櫓跡	.....	98	図版21 軒 平 瓦(3)	.....	117
図版3 第2号隅櫓跡	.....	99	図版22 軒 平 瓦(4)	.....	118
図版4 第3号隅櫓跡・近代建物跡	.....	100	図版23 軒平瓦(5)・棟瓦・菊丸瓦	.....	119
図版5 本丸東辺土塁跡・本丸東辺土塁跡断面	.....	101	図版24 丸 瓦(1)	.....	120
図版6 本丸西辺・南辺土塁跡	.....	102	図版25 丸 瓦(2)	.....	121
図版7 本丸南辺・北辺土塁跡	.....	103	図版26 丸 瓦(3)	.....	122
図版8 石垣跡・通路跡	.....	104	図版27 丸 瓦(4)	.....	123
図版9 配石遺構	.....	105	図版28 丸 瓦(5)	.....	124
図版10 招魂社跡・石碑跡・招魂社社務所跡	.....	106	図版29 丸 瓦(6)	.....	125
図版11 弓道場跡・弓道場跡東側付近・	.....		図版30 丸 瓦(7)	.....	126
木丸上段部トレンチ	.....	107	図版31 丸 瓦(8)	.....	127
図版12 軒 丸 瓦(1)	.....	108	図版32 丸 瓦(9)	.....	128
図版13 軒 丸 瓦(2)	.....	109	図版33 軒平瓦・平瓦・軒丸瓦接合痕	.....	129
図版14 軒 丸 瓦(3)	.....	110	図版34 輪違い瓦(1)	.....	130
図版15 軒 丸 瓦(4)	.....	111	図版35 輪違い瓦(2)・鬼瓦(1)	.....	131
図版16 軒 丸 瓦(5)	.....	112	図版36 鬼瓦(2)・石製品	.....	132
図版17 軒 丸 瓦(6)	.....	113	図版37 土師質土器・羽口・鉄製品・銭貨	.....	133
図版18 軒 丸 瓦(7)	.....	114	図版38 陶磁器・礎	.....	134
図版19 軒 平 瓦(1)	.....	115			

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査に至る経過

上田市と上田市教育委員会では、国指定史跡上田城跡の保存と整備を図るために、文化庁と長野県教育委員会の指導、助言のもとに各地の専門研究者、地元学識経験者、関係職員からなる「上田城跡公園整備計画研究委員会」を昭和63年度に設置して2年間に及ぶ検討を重ね、その答申に基づいて平成3年3月に『史跡上田城跡整備基本計画』を策定した。

『史跡上田城跡整備基本計画』では、上田城跡の整備を短期、中期、長期の3段階に分けて段階的に実施していくこととし、城跡にふさわしくない施設の城外移転、計画的な発掘調査の実施、発掘結果と正確な史資料に基づく遺構の復元整備、城構えをふまえた史跡範囲の拡大等を基本的な目標として掲げている。

上田城跡整備の短期目標としては、本丸及び二の丸の各虎口と本丸郭内の整備に重点をおき、早期に城郭としての概容を復元・整備していくことが挙げられている。その実現のために上田市教育委員会では平成2年度より上田城跡の発掘調査に着手し、調査結果と絵図等の史資料に基づいて二の丸北虎口の石垣復元、空中電線の地中埋設、本丸堀の浚渫、本丸内店舗兼住宅の移転、本丸西虎口の遺構地上表示、本丸東虎口の建造物及び土橋の復元などの諸整備事業を実施してきた。

本丸内の発掘調査は、短期整備目標のひとつである本丸郭内の環境整備と、中長期整備目標である隅櫓や土塙等の建造物復元を実施するために、地下の遺構の状況を調査し、既存の史料と対比する基礎資料を得る目的で計画された。

発掘調査は、現地での調査を平成5年度から平成7年度にかけて行い、平成8年度に報告書の作成を実施することとし、国及び県の補助を得ながら上田市教育委員会が直営事業として実施した。

## 第2節 調査の体制

史跡上田城跡本丸内の発掘調査に係る調査の体制は以下のとおりである。

調査指導 平井 聖 (東京工業大学名誉教授・昭和女子大学教授)

黒坂周平 (上田市文化財保護審議会会長)

調査員 塩入秀敏 (上田女子短期大学教授)

児玉卓文 (長野県丸子実業高等学校教諭)

川上 元 (上田市立博物館長)

倉沢正幸 (上田市立信濃国分寺資料館学芸員)

中沢徳士 (上田市教育委員会社会教育課主査)

尾見智志 (上田市教育委員会社会教育課主査)

久保田敦子 (上田市教育委員会社会教育課主任)

清水彰 (上田市教育委員会社会教育課主任)

池内宣裕

調査担当者 塩崎幸夫 (上田市教育委員会社会教育課主任)

### 調査及び整理作業員（敬称略・五十音順）

饗場奈那江、安部節子、池田市郎、井沢光子、石合好江、井部定雄、内田収吉、大井美枝子  
川上初枝、神林重喜、小林芳勝、小柳治雄、齊藤かな枝、塙崎 幹、柴崎今朝義、柴崎仁美  
清水間二、滝沢歌子、滝沢儀武、竹内 勇、田村まり子、中村岩男、中村美奈子、西沢志保  
林 正治、東山唯夫、東山恒子、伯耆博子、堀内今朝次、前村 浩、丸田由紀子  
宮之上よし子、村上一男、山本万里、柳沢仁美、渡部ひで子

史跡上田城跡本丸内の発掘調査に係る調査事務は、上田市教育委員会事務局社会教育課文化係が行った。調査事務局の体制は以下のとおりである。

教 育 長	内 藤 尚
教 育 次 長	荒 井 鉄 雄
社会教育課長	松 沢 征太郎
文 化 係 長	岡 田 洋 一
主 査	中 沢 徳 士
	尾 見 智 志
主 任	塙 嶽 幸 夫
	久保田 敦 子
技 術 員	久保田 浩 (平成8年4月1日着任)
主 事	西 沢 和 浩 (平成8年4月1日着任)
	清 水 彰
	小笠原 正 (平成8年4月1日着任)
嘱 託	西 入 元三郎 (平成8年3月31日退任)

### 第3節 調査日誌（抄）

#### 平成5(1993)年度

- 10月25日（月） 平成5年度発掘調査開始。招魂社社務所跡の覆土を重機により除去。  
10月27日（水） 遺構検出作業を開始。  
10月29日（金） 調査グリッド設定。  
12月16日（木） クレーン車による測量用空中写真撮影実施。  
2月24日（木） 重機により近代建物遺構を除去。下面の調査に着手。  
3月17日（木） 上段部の構造と仙石氏以前の遺構を確認するためトレンチを掘削。  
3月25日（木） 埋め戻し作業終了。平成5年度発掘調査終了。

#### 平成6(1994)年度

- 9月12日（木） 平成5年度出土遺物の洗浄作業開始。  
11月24日（木） 平成6年度発掘調査開始。本丸西辺土塁の遺構検出作業に着手。  
12月 7日（水） 土塁北東部で瓦捨場検出。  
12月 8日（木） 第1号（北西）隅櫓跡の調査開始。大引礎石等を検出。  
12月13日（火） 第2号（北東）隅櫓跡の調査開始。L字形に小礎列を検出。

12月17日（土）	北辺土塁にトレンチ掘削。招魂社の石積を検出。
12月18日（日）	平井 聖氏、黒坂周平氏による現地調査指導。
12月26日（月）	招魂社跡付近の表土剥ぎに着手。
1月10日（火）	北辺土塁にトレンチ掘削。弓道場的場を検出。
1月27日（金）	M11-C3区にトレンチ掘削。永楽通宝紋鬼瓦と配石遺構を検出。
3月13日（月）	ラジコンヘリコプターによる測量用空中写真撮影。
3月24日（金）	埋め戻し作業終了。平成6年度発掘調査終了。

#### 平成7(1995)年度

11月15日（水）	平成7年度発掘調査開始。本丸東辺土塁の遺構検出作業に着手。
11月30日（木）	第3号（北東）隅櫓跡の調査に着手。
12月6日（水）	本丸南辺土塁の調査に着手。
12月8日（金）	石垣跡の調査に着手。根石及び裏込石を検出。
12月18日（月）	遺構平面測量を委託。実測作業に着手。
12月22日（金）	平井 聖氏、黒坂周平氏による現地調査指導。
2月26日（月）	一部埋め戻しを開始。
3月6日（水）	富貴跡ほかにトレンチ設定。
3月25日（月）	埋め戻し作業終了。平成7年度発掘調査終了。

この後、平成8年度に遺物整理、報告書作成作業を行い、平成9年3月24日報告書が刊行され調査は終了した。

## 第4節 調査の方法

上田城跡発掘調査に係る平面位置の表示は、平面直角座標第VII系を座標変換した調査座標で示した。座標原点は上田城南西方向のX = +44280.000、Y = -22860.000と定めた。この座標原点を起点に一辺20mの大グリッドを組み、東西方向をアルファベットで、南北方向をアラビア数字で表した(第2図)。この大グリッドを一辺10mの中グリッドに四分割し、南西・南東・北西・北東の順でA～Dと表記し、さらに一辺5mの小グリッドに四分割して中グリッドと同じ順番で1～4のアラビア数字を与えた。遺物の取り上げと注記はこのアルファベットとアラビア数字の組み合わせにより行った。例えば第4図の北西隅櫓跡の真柱礎石付近はJ13-A1と表示される。なお、本書挿図では各遺構の平面位置は各々2か所の座標を表記して示した。

遺物の注記等に用いる遺跡略号は、上田城(UE-DA-JOU)の頭文字をとって『UDJ』とし、調査年度を明らかにするために元号(平成)と年度を『H5～H7』と簡略化して表し、両者を組み合わせて『UDJ-H6』などと表記した。

発掘調査は、前記のグリッドに基づく平面調査を主体にトレンチ調査を併用して実施した。掘削は基本的に上田城跡の整備目標とする江戸後期から幕末期の遺構の検出に主眼を置いて実施し、調査後は砂で被覆して埋め戻した。

## 第2章 上田城跡の概要

### 第1節 上田城の沿革

#### 1 真田氏による築城と慶長の破却

上田城は、天正11年(1583)に真田昌幸によって築城された。真田氏は小県郡真田を本拠とする土豪であったが、昌幸の父幸隆の代に甲斐の武田晴信(信玄)に従い、「信州先方衆」の旗頭として信濃、北上州を転戦した。昌幸は幸隆の三男で、幼い頃より信玄の側近として仕え、武田氏ゆかりの武藤姓を名乗っていたが、天正3年の長篠合戦で兄信綱、昌輝がそろって討死したため、真田家を繼ぐことになった。

天正10年、武田氏は織田信長によって滅ぼされ、その信長もわずか3ヶ月後の本能寺の変で倒れた。この動乱期に昌幸は巧みな外交戦術で生き残りを図りながら小県郡の制圧に乗り出し、交通の要衝である上田盆地の中央部に上田城の築城と城下町の形成を開始したのである。上田城は從来の山城と異なり、領国統治に便利な平城であったが、南は千曲川の分流である尼ヶ淵の断崖に面し、北と西は矢出沢川の流路を変えて外堀の役目を果たさせるなど、天然の要害も兼ね備えていた。

築城から2年後の天正13年、上州沼田領の領有権をめぐる紛争から上田城は徳川氏による攻撃を受けるがこれを撃退し、真田氏と上田城の名は一躍有名になった。昌幸は以後豊臣秀吉に臣従し、領国と城郭の整備に努めた。

慶長5年(1600)に起きた関ヶ原合戦では、真田氏は昌幸と次男信繁(幸村)親子は石田三成方に、長男の信之は徳川家康方にそれぞれ別れて戦うことになり、昌幸は中仙道を西上する徳川秀忠の大軍を相手に築城戦を行った。秀忠は上田に数日間釘付けにされ、関ヶ原合戦に間に合わず家康に厳しく叱責されたのは有名なエピソードである。

しかし、昌幸の健闘もむなしく合戦は徳川方の大勝利に終わり、明け渡された上田城は徳川氏配下の諸将によって徹底的に破壊され、廢城同然となつて信之に引き渡された。信之は徳川氏への遠慮もあって城の修復は行わず、三の丸に屋形を構えて上田領の藩政にあたった。元和8年(1622)、信之は松代(現長野市)へ移封を命じられ上田を離れた。真田氏の上田在城は39年間であった。

真田氏時代の上田城については、絵図などの文献史料が乏しく不明な点が多いが、縄張りについては梯郭式の曲輪構成や、本丸、二の丸の北東部に鬼門除けとみられる切り欠きを設ける点など、基本的な部分は仙石氏以降の上田城にも踏襲されていると推定される。建造物については工事や発掘調査により出土した瓦によって、本丸はもちろん二の丸や小泉曲輪等にも瓦葺きの建造物が建てられていたことが窺われる。特に金箔を押した鰐瓦、鬼瓦、鳥衾瓦や、伏見城、大阪城に起源のある菊花紋軒丸瓦や五七桐紋鬼瓦の出土は、真田氏の上田城が石川数正の松本城、仙石秀久の小諸城などとともに豊臣秀吉配下の城郭として整備されていたことを示している。

#### 2 仙石忠政による復興

仙石氏は美濃の土豪で、秀久の代に織田信長に仕え信長の旗印であった永楽通宝紋を家紋とした。織田家にあっては羽柴秀吉(後の豊臣秀吉)の配下として活躍し、信長没後の天正11年には淡路国洲本城主となり、同13年には讃岐国を領有するに至った。ところが、翌14年の島津氏との合戦に際して

先鋒として出陣していながら秀吉の命に背いて惨敗し、所領を没収されて放逐された。しかし、天正18年的小田原攻めのおり、秀久は旧臣を集めて参戦し、その戦功が認められて先の罪を許され、信濃国佐久郡小諸城主となったのである。秀久は小諸城を現在の姿に整備し、慶長5年の上田城攻撃と破却にも参加している。また、伏見城内において大盗賊石川五右衛門を捕らえたという伝説でも知られており、その賞として秀吉より拝領した名器「千鳥の香炉」は明治5年に皇室に献納された。

元和8年(1622)に小諸より入封した秀久の子の忠政は、廢城同然となっていた上田城の復興を計画し、徳川秀忠の許可を得て寛永3年(1626)より工事に着手した。忠政は築城の奉行を勤めた家臣原五郎右衛門に宛てた直筆の覚書の中で、城普請の細部に至るまで細かく指示を与え全権を委ねている。工事は2年後の寛永5年に忠政が病床に臥すまで続けられ、その後の忠政の病死と重臣間の抗争などの藩内事情から再開されることなく未完成に終わった。

現在見ることのできる上田城はこのときに築かれたもので、本丸は7棟の重層隅櫓と東西2棟の櫓門及び土壠などが完成したものの、二の丸、三の丸は堀、土塁、虎口石垣などの普請（土木工事）が完成しただけで櫓や門を建てる作事（建築工事）は手付かずになってしまった。しかし、最近の発掘調査の結果、二の丸の諸虎口にも櫓門の礎石が据えられていたことが確認され、忠政の計画では二の丸にも建物を建てる予定であったことが窺われる。

仙石氏時代の上田城は寛永18年、貞享3年(1686)、元禄15年(1702)の3回にわたり改修工事が行われ、破損した石垣の修復、二の丸北虎口土橋の木樋から石樋への改修、二の丸南西部への煙硝蔵建設、本丸侍番所の建て直し等が実施された。

仙石氏は忠政以後、政俊、政明と3代84年間にわたって上田を治め、塙田平の溜池の築造、改修などによる農業振興と上田織（紬）などの産業育成に力を注いだ。

### 3 松平氏在城時代

宝永3年(1706)、兵庫県出石へ移封となった仙石氏と交代で松平忠周が上田藩主となった。この松平氏は三河以来の徳川氏の一族で、いわゆる十四松平氏の一つ、藤井松平氏と呼ばれている。藤井松平氏の祖、信一は織田信長の近江国箕作城攻撃に家康の名代として徳川軍を率いて奮戦し、その武勲により織田信長より着用していた革羽織（重要文化財小文地桐紋付韋胸服・上田市立博物館蔵）を拝領した。以後、藤井松平氏はこの胸服に用いられていた五三桐紋を家紋とした。

上田に入封した松平氏は、明治維新に至るまで7代160余年にわたって上田藩を治め、諸代大名として幕府の要職をたびたび務めている。特に6代忠優（忠固）はペリー来航に始まる幕末の動乱期に二度にわたって老中となり、多難な国政にあたった傑物である。松平氏在城時代は、経済の発達や産業の振興にともない、上田独自の文化が育まれ、幾多の人材が輩出したが、宝暦騒動に代表される一揆も多発した時代であった。

上田城については、享保17年(1732)に起きた千曲川の大洪水により崩壊の危機に瀕した尼ヶ淵の崖面に護岸用石垣を築いた以外は、大規模な改修は行われず、仙石氏時代の姿が幕末まで維持された。幕府の許可を仰いだ石垣等の修復工事は享保18～21（元文元）年（1733～36）、寛延3年(1750)、宝暦7年(1757)、天明8年(1788)、天保14年(1843)、弘化5年(1848)、安政3年(1856)、万延元年(1860)の8回であったが、隅櫓に使用されていた瓦の刻印により元文元年(1736)、天明元年(1781)、天明3年(1783)、文政13年(1830)等にも屋根の補修が行われたことが窺われる。

#### 4 明治以降の上田城

明治4年(1871)の廃藩置県にともない、上田城は国(兵部省)に接収され、東京鎮台第二分営が置かれた。第二分営は旧藩邸に本部を置き、上田城には調練場と火薬庫が設けられた。しかし、明治6年には第二分営が廃止され、明治7年に本丸、二の丸の土地、建造物、樹木などの一切が民間に払い下げられることとなった。建造物や石垣はその後明治10年頃にかけて次第に取り壊され、現在の西櫓1棟を除いたすべての建造物と石垣の大部分は解体され、桑畠などに変貌していった。

明治12年、城の面影が失われゆくのを惜しんだ松平家旧家臣や住民有志の間から松平神社創建の動きがあり、その趣旨に賛同した常磐城村(現上田市)在住の丸山平八郎は所有していた本丸下段の地を松平神社用地として寄付し、松平氏の祖靈を祀った松平神社が本丸跡に創建された。丸山氏は後に本丸上段と堀の一部も神社付属の遊園地用地などとして寄付し、唯一残された隅櫓についても旧藩主松平忠礼に献納している。これにより上田城跡の中核部分は市街化などの破壊から免れ、現代に遺されることになった。なお、松平神社は第二次大戦後、真田氏と仙石氏の歴代藩主等を合祀して上田神社、後に真田神社と改称して現在に至っている。

また、二の丸跡は刑務所や伝染病院、桑畠などとして利用されたが、大正時代に公園化の要望が高まり、土地の公有地化、刑務所等の移転、体育、遊戯施設等の建設が行われ、昭和初期に上田城跡公園として市民に開放され、昭和9年12月28日には本丸、二の丸の大部分が国の史跡に指定された。

昭和16年(1941)に市内で遊廓として使われていたかつての隅櫓2棟が東京の料亭に転売され、これを知った市民の間から2櫓を買戻し、城跡へ移築復元しようという保存運動が起こった。当時の市長浅井敬吾を会長として上田城跡保存会が結成され、市民の寄付により2櫓は買戻された。移築復元工事は、太平洋戦争なかの昭和18年より始められ、戦局悪化による中断をはさんで戦後の昭和24年に現在の南櫓、北櫓として完成をみた。この2櫓と寛永期より現存した西櫓は、昭和34年(1959)に長野県宝に指定され、昭和42年と昭和56年から同61年の2回にわたって保存修理工事が行われ、かつての姿を蘇らせた。

大正末期から昭和40年代にかけての上田城跡は、市街地に隣接した中核公園として各種の体育、文化施設や顕彰碑が次々と建設され、催し物や市民の憩いの場として親しまれた。しかし、城地自体が文化財という認識が希薄で、総合的な整備計画がないまま、都市公園としての施設建設や公園整備が進められた結果、城跡の遺構と歴史的景観が損なわれ、史跡としての価値を著しく低下させる結果を招いた。

上田市と上田市教育委員会では、これらの反省を踏まえ、上田城跡を国民共有の文化財として後世に長く継承し、史跡としてふさわしく整備していくために、昭和63年度に「上田城跡公園整備計画研究委員会」を組織し、文化庁と長野県教育委員会の指導、助言のもとに各地の専門研究者らを招聘して検討を重ね、その答申をもとに『史跡上田城跡整備基本計画』を平成2年度に策定した。

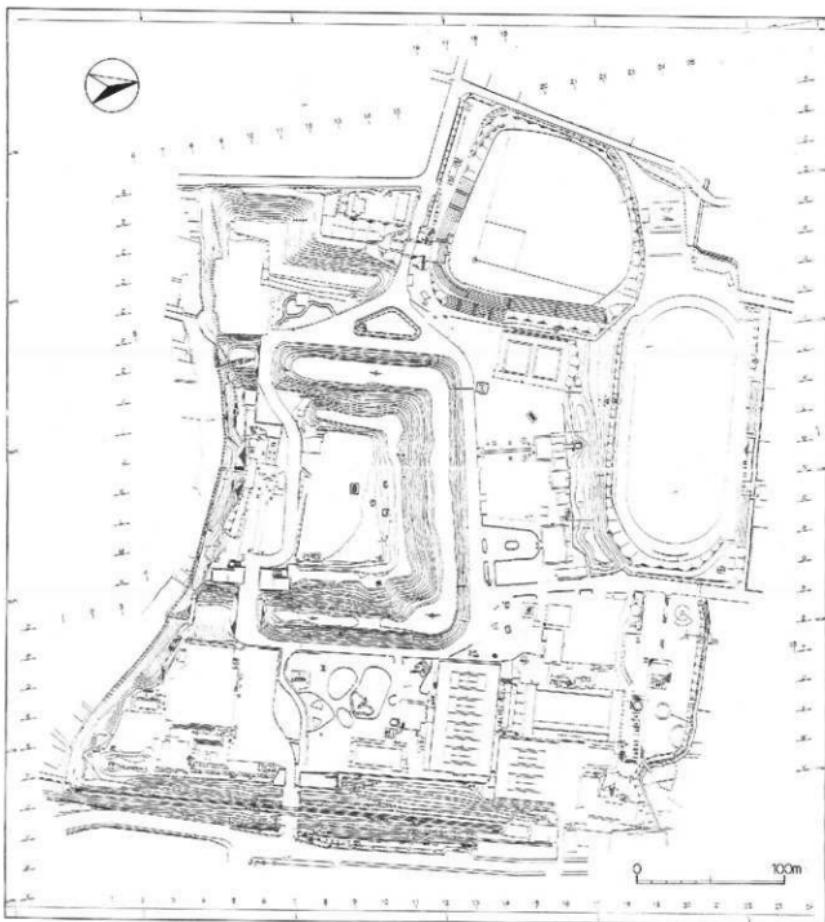
『史跡上田城跡整備基本計画』では、上田城跡の整備を短期、中期、長期の3段階に分けて段階的に実施していくこととし、城跡にふさわしくない施設の城外移転、計画的な発掘調査の実施、発掘結果と正確な史資料に基づく遺構の復元整備、城構えをふまえた史跡範囲の拡大等を基本的な目標として定めている。平成2年度以降、『史跡上田城跡整備基本計画』に沿って、発掘調査と整備事業が実施されており、本丸東虎口や二の丸北虎口は遺構の立体復元により往時の姿を蘇らせつつある。しかし、その他の部分については計画策定以前と大差なく、施設移転などについて行政の一層の努力が求められている。

## 第2節 上田城歴代藩主

城主名	石高	入封・襲封年	移封・没年
真田 昌幸 安房守	9万5,000石	天正11年(1583)築城	慶長5年(1600)改易 (沼田領を含む)
信之 伊豆守	"	慶長5年(1600)入封	元和8年(1622)松代移封
仙石 忠政 兵部大輔	6万石	元和8年(1622)入封	寛永5年(1628)没
政俊 越前守	"	寛永5年(1628)襲封	延宝2年(1674)没
		弟政勝に矢沢 2,000石を分知(寛文9年)	
政明 越前守	5万8,000石	寛文9年(1669)襲封	宝永3年(1706)出石移封
松平 忠周 伊賀守	5万8,000石	宝永3年(1706)入封	享保13年(1728)没
忠愛 伊賀守	"	享保13年(1728)襲封	宝暦8年(1758)没
		弟忠容に塙崎(現長野市) 5,000石を分知(享保15年)	
忠順 伊賀守	5万3,000石	寛延2年(1749)襲封	天明3年(1783)没
忠濟 伊賀守	"	天明3年(1783)襲封	文政11年(1828)没
忠学 伊賀守	"	文化9年(1812)襲封	嘉永4年(1851)没
忠優 伊賀守	"	天保元年(1830)襲封	安政6年(1859)没
忠礼 伊賀守	"	安政6年(1859)襲封	明治2年(1869)版籍奉還



第1図 上田城跡位置図 ( $S = 10,000$ )



第2図 上田城跡現況及び調査グリッド設定図

## 第3章 発掘調査の結果

### 第1節 調査の概要

史跡上田城跡本丸内の発掘調査は、平成5年度から平成7年度にかけて現場調査を実施し、平成8年度に整理作業と報告書の作成及び刊行を行った。

平成5年度の発掘調査は、近年まで市営弓道場や個人店舗があり、樹木の少ない平坦地が広がっている本丸上段部の西側部分について実施した。その結果、近代以降の建造物の遺構が広範囲に検出され、近世の遺構は確認されなかった。また、南北方向に全長約50m、深さ約2mの大規模なトレチを掘削し、上段部の構造と仙石氏による復興以前の生活面の確認を図った。

平成6年度の発掘調査は、本丸西辺と北辺の土壘上に存在していたと推定される隅櫓と土壠の基礎遺構の確認と、本丸郭内北側の地下遺構の調査を実施するとともに、平成5年度出土遺物の洗浄作業を行った。調査の結果、土壘北西隅部と北東隅部で2棟の隅櫓跡を確認し、土壠基礎の一部と推定される石列を検出した。また、郭内北側では招魂社と弓道場的場などの近現代遺構とともに仙石氏時代の水路跡と推定される配石遺構を検出した。

平成7年度発掘調査は、平成6年度に引き続き本丸北東部の隅櫓跡1か所と本丸東辺と南辺の土壠跡、本丸上段と下段の境に存在していた石垣跡等の調査を実施するとともに平成6年度出土遺物の洗浄作業を行った。調査の結果、隅櫓跡の一部、土壠跡、石垣跡、上下段をつなぐ通路跡、近代建物跡などを検出した。

平成8年度は、前年度までに出土した遺物の整理作業と、報告書の作成作業を行い、本報告書を刊行した。

隅櫓跡は、本丸北西部で1基、北東隅部で2基確認された。仙石氏の復興以降の上田城本丸には7棟の二層隅櫓が存在していたことが絵図や文献史料等から知られており、移築復元した2棟を含めて3棟が現存している。現存する3棟の規模はほぼ共通で、妻入り、桁行5間、梁間4間で、1間の長さは1970mmを測り、6尺5寸に相当する。検出された隅櫓の基礎遺構は、建物外周の小礎列、真柱礎石及び根固め、大引礎石等である。建物外周の小礎列は、15cm以下の小礎を幅約1m、深さ40cm以上で固く充填し、隅櫓の土台を直接置いたものと推定される。現存する隅櫓土台は石垣天端上に置かれているが、現北櫓の土壘接続部分に同様の施工がみられる。真柱礎石は、北西部隅櫓跡の礎石が原位置を留めており、北東部2櫓跡の礎石は移動していたものの小礎による根固めは遺存しており、原位置が確認された。礎石上部にはいずれも柱座が掘られており、真柱の規模が推定できる。大引礎石は北西部隅櫓跡に2基遺存しており、梁間大引を2基づつで支えていたことが確認された。いずれの隅櫓跡も、外周基礎の小礎列と真柱礎石の位置関係から、現存隅櫓と同様の規矩を持った建造物であったことが推定できる。

土壠跡は、本丸東辺土壘部分で隅櫓外周と同様の小礎基礎が連続して検出された以外は、あまり良好な遺存状態ではなく、各土壘部分においてその一部が検出されたに止まった。土壠は土壘外法の肩部に設置されていたため、近代以降の改変により損壊した部分が多いものと推定される。また、控柱

の柱穴も明確に確認できた部分はなく、土塀の構造等について今後さらに検討を要するものと思われる。土塁は、近代以降の建造物を建てる際に内法が削平を受け、上段部のほぼ全域で狭められていることが確認され、岩岐などの施設は確認されなかった。内法の旧規は僅かに残る削平を逃れた部分と土層断面から推定可能と考えられる。

本丸上段と下段の境にあたる石垣跡については、根石列と裏込石が現存する石垣に連続して検出され、上段と下段を結ぶ通路跡とともにその範囲が確認された。現存する石垣高は約2mで、絵図とも一致しているが、裏込石の範囲も約2mと石垣高に比して著しく厚く、築城当初はさらに高い石垣を築く計画であった可能性が示唆される。

平成5年度に掘削した大規模なトレンチでは、南側の現存石垣背面において自然堆積と推定される地層を検出し、招魂社社務所跡付近から北側では人工的な盛土であることが確認され、液状化現象の痕と推定される砂の噴出層も検出された。しかし、約2mの最深部でも生活面と推定できる断面は確認できず、最下層より真田氏時代の瓦が一括出土したことなどから、現在の本丸上段部は、仙石氏の復興の際に構築されたもので、真田氏時代の生活面はさらに下層に埋没しているものと推定される。自然堆積層は西辺土塁南端まで連続しており、真田氏時代の縄張りとの関わりについて今後検討をする事項であろう。

平成6年度調査において本丸上段北側で検出された水路状の配石遺構は、仙石氏時代の所産と推定されるが、起点、終点が明らかでなく、その性格については不明な点が多い。

上田城跡本丸上段部は近代以降多くの建造物が建てられたが、発掘調査では招魂社、招魂社社務所、弓道場等の遺構が確認され、その他の近代建造物の跡では建物撤去に伴い基礎部分が掘削され、攪乱を受けていることが確認された。これらの近現代施設については、その建設経緯と変革などについて意外と記録が乏しく不明な点が多い。上田城跡の整備を進めるにあたり、近代以降の記録を早期に収集し、過去の改変経緯を明らかにしておく必要がある。

発掘調査により出土した遺物としては、大量の瓦類の他、土器・陶磁器類、石製品、金属製品、近現代のガラス製品などがある。これらの資料のうちで、近世の上田城に関わる遺物は、瓦類が大半を占め、日常生活に伴う遺物の出土は極めて僅かであった。これは藩政期の上田城が藩主や家臣の日常生活の場ではなく、鬱蒼とした樹木に包まれ、僅かな番人が警固していた場所であったことに起因しているものと思われる。近代以降になると上田城本丸跡にはいくつもの飲食店や施設が建てられ、花見や催し物等で賑いをみせるようになった。出土した陶磁器類の多くは近現代に廃棄されたものである。

瓦類には、丸瓦類、平瓦類、桟瓦、菊丸瓦、輪違い瓦、鬼瓦などがあり、真田氏時代から近現代に至るまでの各時代の資料が出土した。

土器、陶磁器類は、その大部分が飲食業を営んでいた近現代建造物に伴うものであったが、中世から近世初頭の所産と推定される内耳鏡片も出土した。羽口は遺構に伴わないので、城普請に関わる鍛冶遺物と推定される。

石製品は、中世の五輪塔と近世以降の石臼が出土している。上田城跡からは過去にも五輪塔、宝篋印塔等が出土しており、築城以前に中世の墓域が存在していたものと推定される。

金属製品には角釘等の鉄製品と、銭貨がある。

## 第2節 遺構

### 1 隅櫓跡

仙石忠政による復興以降の上田城本丸には、現存する3棟の隅櫓を含めて7棟の二層隅櫓が存在したことが絵図や文献史料等から知られている。現存する3棟の規模はいずれも共通し、妻入りの桁行5間、梁間4間で、1間は1970mm(6尺5寸)である。

今回の発掘調査では、本丸北西部と北東部に存在したと推定される3棟の隅櫓遺構の確認を図った。なお、それぞれの隅櫓の呼称については、現在までのところ確認できる史料は発見されておらず、現存3櫓に付された南櫓・北櫓・西櫓の呼称も、第二次大戦後に新たにつけられた名称に過ぎない。本報告に際しては調査された本丸北西部1棟及び北東部2棟について、便宜的に第1号から第3号の番号を調査順に付して報告することにする。

#### (1) 第1号(北西)隅櫓跡(第4図・図版2)

本丸北西隅部に建てられていた隅櫓である。調査前から中央部の真柱礎石が露出しており、北側と西側は堀に面しているため削平が進んでいるが、おむね平坦な地形を保っている状態であった。

調査の結果、建物外周基礎の小礎列、大引礎石、真柱礎石の根固めなどが検出された。建物外周の基礎と推定される小礎列は、北・東・南の3方において『コ』の字形に検出された。遺存状況はあまり良好ではなく、部分的に断絶し、西側は土壘の削平により消失していた。礎は15cm以下の角礎が主体で、残存する幅は30~70cm、標高は459.28~459.65mを測る。

大引礎石は、中央に位置する真柱礎石の北東部(第4図礎石1)と南西部(同礎石2)の2基が検出され、北西部に相当する位置では礎の集中が看取られた。礎石は直径が25~30cmを測る扁平な安山岩円礎で頂部をほぼ水平に据えており、標高は礎石1が459.57m、礎石2が459.53mである。また、北西部の礎群は標高459.50mを測る。

真柱礎石は、106×90cmの規模を測る灰赤色の安山岩で、上部に直径約50cmの柱座が彫られ、柱座の標高は459.82mを測る。また、周囲の根固めは、10cm前後の小礎が約2mの範囲でほぼ円形に密集しており、真柱礎石が原位置を留めていることが確認された。

以上の所見より、本遺構は大棟の主軸方向をN-11°Eに持つ南北五間×東西四間の隅櫓跡と推定でき、現存3櫓の規矩と正確に一致する。ただし、現存3櫓の大引礎石が3か所で支えているのに対して、本隅櫓では2か所で支えている点が異なる。また、松平氏在城期に描かれた平面形態の解る絵図(写・上田市立図書館蔵)には、東西5間、南北4間と描かれており、建物の方向が発掘調査の結果と異なることが判明した。

#### (2) 第2号(北東)隅櫓跡(第5図・図版3)

後述する第3号隅櫓とともに本丸北東隅部に建てられ、鬼門除けの切り欠きを構成している櫓である。土壘は北側と東側で削平が進み、真柱礎石も現存するが、以前に堀底より引き上げられたもので原位置を失っている。

調査の結果、建物外周の基礎と推定される小礎列が西・南の2方において『L』字形に検出された。遺存状況は比較的良好で、礎は15cm以下の角礎が主体で、残存する幅は70~100cm、標高は459.60~459.71mを測る。建物の主軸方向はN-81°Wである。

真柱礎石の根固めは、僅かながら遺存しており、真柱礎石は原位置より南西に移動していることが確認された。真柱礎石は緑灰色を呈する安山岩で、 $116 \times 71\text{cm}$ の規模を測り、上部に直径約47cmの柱座が彫り込まれている。大引礎石は検出されなかった。

以上、本遺構は北側と東側を失っているものの、東西五間×南北四間の隅櫓跡と推定でき、現存3櫓の規矩と一致するものと推定される。

### (3) 第3号(北東)隅櫓跡・近代建造物跡(第6図・図版4)

第2号隅櫓跡の南東部に位置し、鬼門除けの切り欠きを構成している。明治時代に住宅が建てられ、現在も東屋があり、東側の土塁は大きく削平されている。真柱礎石は現存するが、第2号隅櫓跡と同じく以前に据え直されたものである。

調査の結果、隅櫓跡は近代の建造物と土塁の削平により大部分が破壊され、建物西側基礎の小礎列の一部と、真柱礎石の根固めが辛うじて検出された。明治期の建物跡は、隅櫓基礎の小礎列を転用して構築したものと推定され、外周基礎の小礎列と束柱礎石、便槽と推定される甕などが検出された。

隅櫓外周基礎の小礎列は、近代建造物による改変を受けており、当初のままで検出されたのは西壁北側の4.5mの範囲のみである。しかし、以南の近代建造物西側及び南側の部分についても基本的に隅櫓基礎が踏襲されているものと推定される。小礎列の礎は15cm以下の角礎が主体で、残存する幅は約70cm、標高は459.50~459.55mを測る。建物の主軸方向はN-11°Eである。

真柱礎石は暗青灰色を呈する安山岩で、規模は $102 \times 82\text{cm}$ を測り、上部に直径約47cmの柱座が彫られている。この礎石は近代建造物の建設に伴い移動していたものを、以前に現在の位置へ据え直したものである。原位置の根固め跡は、近代建造物跡の北東隅の小礎基礎が略円形に広がっている部分と推定される。

明治期の建物は、隅櫓跡の南西隅部に建てられ、外周基礎は南側と西側の2方を隅櫓の基礎をそのまま再利用し、北側と東側はその他の部分の隅櫓基礎を掘り出して転用したものと推定される。束柱礎石は3点遺存しており、中央西側の2点は約1.8mの間隔で並んでいる。小礎列の範囲は南北約6m×東西約5mを測り、建物の規模は南北3間×東西2間半と推定される。建物の主軸方向はN-13°Eを測る。また、建物南東方には便槽と推定される陶器の甕が埋設されており、ブリキ製の柄杓等が出土している。

以上、本隅櫓基礎遺構の遺存状況は良好なものではなかったが、西側と南側の外周と真柱礎石根固め跡と推定できる遺構の位置関係により、現存3櫓と同規模の南北5間×東西4間の隅櫓が想定できる。

## 2 土 塙 跡

仙石氏以降の各絵図によると、本丸の周囲は塙で囲まれており、寛永3年に仙石忠政から家臣原五郎右衛門に宛てた覚書により、瓦葺きの土塙であったことが推測されている(『郷土の歴史上田城』上田市立博物館1988)。平成6年度と平成7年度に行われた土塙上の調査は、この土塙基礎の検出を主目的として実施された。

### (1) 本丸東辺土塙跡(第7図~第9図・図版5)

本丸東辺の土塙跡は、現北櫓と第3号隅櫓跡との間の土塁肩部において隅櫓外周基礎と同様の小礎列を良好な状態で検出した。小礎列は10cm前後の礎が主体で、幅は約1m、主軸方向はN-11°Eで

ある。北槽付近の土壘は以前より侵食が激しく、昭和61年度の北槽保存修理工事に合わせて改修され土壘基礎の遺存は良好ではなかった。土壘内法は全域で削平と侵食が進み、N 10区付近にトレーナーを掘削したところ、裾部は削平され近代の所産による安山岩円礫の石積が構築されていた。第2号隅槽跡と第3号隅槽跡の間は、土壘の削平が進み、2か所で小礫の集中が確認されたのみであった。また、O 12-A 1区において直径約1mの瓦の集中箇所が検出された。

#### (2) 本丸西辺土壘跡（第10図～第11図・図版6）

本丸西辺土壘の調査では、北半の土壘肩部において数カ所に小礫の集中箇所が連続的に検出された。これら的小礫群は20cm以上の礫も含むが、ほぼ一直線上に並び土壘基礎の残欠と推定される。主軸方向はN-15°Eである。南半の部分については、土壘外法に通路が設けられるなど改変が進み土壘基礎と推定できる遺構は確認されなかった。

#### (3) 本丸南辺土壘跡（第12図～第13図・図版6～7）

本丸南辺の尼ヶ淵に面した土壘上の調査では、土壘肩部において土壘基礎の一部と推定される小礫列が検出された。遺存状況はあまり良好ではなく、西側では散乱する傾向が看取られるが、残存する幅は約1m、主軸方向は概N-63°Wを示す。東側の部分は明治12～28年の間に演武場が建設され、土壘を削平してしまったため、土壘遺構は検出できなかった。演武場の遺構は攪乱が激しく、全域に建物基礎の小礫と棟瓦片が散在していた。

#### (4) 本丸北辺土壘跡（第14図～第16図・図版7）

本丸北辺土壘は、かつて堀に鉄橋が架かり、左右からの通路が設けられていたため、最も改変を受けており、東・西・南辺土壘跡で検出された小礫を用いた基礎遺構は検出されなかった。しかし、東側から中央部にかけて、20～40cm前後の緑色凝灰岩角礫と安山岩円礫がN-84°Wの同一軸線上に並んで検出され、構造形式は異なるものの、壠状の構築物が存在した可能性が推定できる。また、M 12-C区において黄褐色の堅緻な平坦面が検出され、武者走りの叩き面かと推定される。標高は459.00～459.05mを測る。

### 3 石垣跡

本丸の上段（北側）と下段（南側）を区画する石垣は、現北槽石垣に接続する東端の一部と招魂社社務所跡南側の約20mが現存しており、石垣高は約2mを測る。上田城の各絵図によれば、中央やや東側に上段と下段をつなぐ通路が1か所設けられたほかは石垣が描かれており、明治28年(1895)の本丸跡鳥瞰図（『写真集上田の百年』信濃路1976）では既に現状と同様に大部分が撤去され、土坡となっている。平成7年度の調査においてこの石垣基礎と通路跡の検出を図った。

#### (1) 石垣跡（第17図～第19図・図版8）

石垣跡の調査は、後設されていた安山岩円礫の石積とコンクリート階段を撤去して実施し、緑色凝灰岩の根石列と安山岩小円礫の裏込石を検出した。根石は招魂社社務所跡南側の現存石垣から東に約34mの隅石根石までの区間でほぼ連続して検出され、裏込石も約2mの幅で遺存していた。根石の主軸方向はN-78°Wを測る。東側の料亭富貴跡南側の部分では、根石は遺存していないかったが、裏込石は全域で検出され、絵図と同様の石垣が存在していたことが確認された。

## (2) 通路跡（第17図・図版8）

本丸の上段と下段をつなぐ通路跡は、西側は石垣の隅石根石が遺存しており、東側は裏込石の遺存する範囲により東西幅約10.5mと推定される。因みにこの規模は本丸及び二の丸の各虎口の幅とはほぼ一致する規模である。下段部は近代以降の擾乱が激しく生活面を捉えることは困難であったが、上段部に3本のトレンチを掘削した結果、土層断面において上段へ向かう傾斜面を確認した。

遺物の出土状況は、永楽通宝紋鬼瓦や輪違い瓦、菊丸瓦等を含んだ多量の瓦片が上段部を中心に出土しており、松平氏時代の改修によって廃棄された瓦と推定される。

## 4 配石遺構（第20図・図版9）

本遺構は、平成6年度の調査において本丸上段部北側のL11-D2区からM11-C3区にかけて検出された遺構である。周囲は近代以降の擾乱が激しく、遺存状況は余り良好ではなかったが、底面と東側面にあたる断面L字形に緑色凝灰岩の加工石が配されており、本来は西側面にも立石を配した開渠の水路状遺構であったと推定される。検出された遺構の主軸方向はN-20°Eを示し、残存長は6.3m、幅は約50cmを測る。底面のレベルは北側で455.14m、南側で454.98mで緩やかに南側に傾斜している。

また、本遺構北端では永楽通宝紋大鬼瓦（第72図1）が出土したほか、北側のM12-A1区にかけて永楽通宝紋鬼瓦片、輪違い瓦などを含む大量の瓦片が一括出土しており、松平氏による改修工事により廃棄された仙石氏時代の瓦類と推定される。

本遺構の所産期は、仙石氏時代と推定されるが、仙石氏以降の絵図、文献には本遺構に関する記述はなく、瓦の出土状況から松平氏時代には埋められていたものと推定される。

## 5 近代以降の遺構

### (1) 招魂社跡（第21図・図版10）

上田招魂社は、戊辰戦争に従軍して戦没した上田藩士を祀るために明治3年（1870）に創建された。当初は藩主屋敷前に建立されたが、二の丸東側を経て明治14年（1881）に本丸上段西側に移り、大正12年（1923）に現在の二の丸北側に遷座した。

発掘調査によって検出された遺構は、建物の雨落と土塁を削平して構築した石積などである。建物の雨落と考えられる遺構は、安山岩円礫の一方を欠いて面を造り、面を揃えて並べたもので2か所で検出された。招魂社の拝殿か本殿跡と推定される東側の遺構は、西側と北側の雨落が検出され、建物の南北主軸方向はN-11°Eを測る。西側の遺構は南面する一辺のみが検出され、建物とは特定し難いが主軸方向はN-79°Wを示し、東側建物跡と直交している。石積は招魂社背面の本丸北辺土塁の内法を大きく削平して構築され、安山岩円礫の玉石積みである。裏込石は緑色凝灰岩の角礫で約30cmの厚さで充填されていたが、石積の上半は失われ、裏込石が崩落していた。石積の東西主軸方向はN-11°Eを示し、東側に続いているものと推定される。また、石積に直交するように安山岩切石が3点並んで検出されており、玉垣状の遺構が存在したものと推定される。

遺物は、東側の建物跡から大量の近世瓦片が出土し、北側の石積付近では近代の棧瓦片、陶磁器片、ガラス瓶片等が出土している。建物跡から出土した近世瓦片には真田氏時代から松平氏時代までの各時代の瓦が含まれ、招魂社が移転し埋め戻された際に何らかの理由により建物跡に埋められたものと推定される。

#### (2) 招魂社社務所跡（第22図・図版10）

明治14年の招魂社本丸移転後に社務所として建設された建物で、後に個人の店舗兼住宅となり、平成5年3月に解体撤去された。建物は増改築が繰り返されていたが、中核部に創建時の建物が残されていた。

検出された遺構は、安山岩円礫を用いた雨落と排水施設等である。雨落の規模は東西 7.6m × 南北 7.5m のほぼ方形で、南北の主軸方向は N-13° E を示す。東柱礎石は建物解体の際に移動し、原位置を留めるものはなかった。建物北西部には便槽と推定される陶器製の甕が検出された。排水施設は南側の石垣付近に 2か所検出され、一辺約 2 m の方形の範囲に小礫を充填して排水を土中に浸透させていたもので、比較的近年の遺構と推定される。

建物の周囲からは大量の陶磁器や覗などの近現代遺物が出土したが、多くは飲食店として営業していた際の酒器、碗皿類である。

#### (3) 石碑跡（第23図・図版10）

招魂社社務所跡東方の J10-B2 区において石碑の基壇が検出された。中心に緑色凝灰岩の大石を据え、周囲に径 60cm 程度の塊石を長方形に 2段積みしたものと推定され、コンクリートが使用されていた。推定される規模は東西 5 m × 南北 4.5 m である。大正初期に撮影された写真（『写真集上田いまむかし』郷土出版社 1980）によれば、石碑は高さ 4 m 程度の直方体である。この石碑に関する記録は乏しく、招魂社に関連したものと推定されるが建立年代、碑文等は不明である。

#### (4) 弓道場跡（第24図・図版11）

弓道場は本丸北西部に所在し、昭和54年に撤去された。創立年代は明らかでないが、明治28年の本丸跡鳥瞰図に瓦葺入母屋造りの建物が描かれており、それ以前と考えられる。

発掘調査により検出された弓道場建物遺構は新旧 2期の建物が重複して検出された。

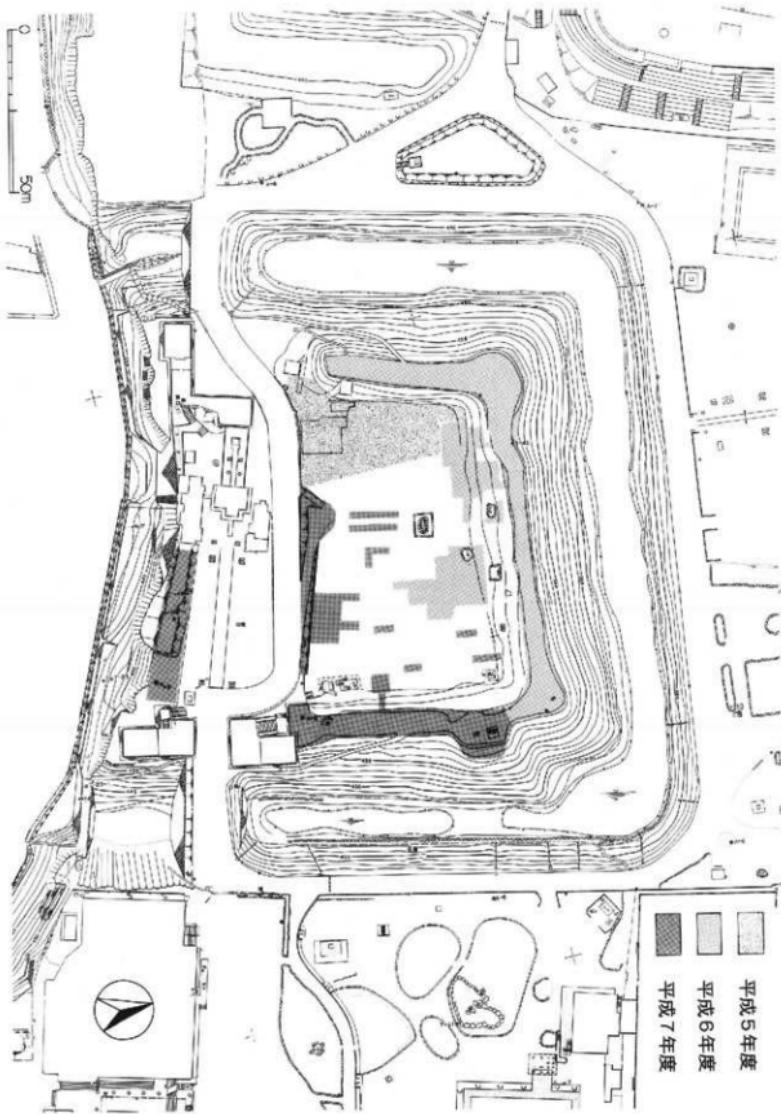
明治期に建設された旧建物は、雨落の安山岩円礫列の一部が西側と北側に遺存し、南西部に便槽とみられる陶器製の甕が埋設されていた。規模は東西約 7 m × 南北約 9 m と推定され、建物北部と中央部付近には小礫が広範囲に検出された。建物の主軸方向は N-13° E と推定される。

第二次大戦後に建て直された弓道場建物は桟瓦葺切妻造りで、建物周囲の基礎は小礫栗石に安山岩切石を据え、東柱礎石は安山岩円礫である。規模は東西 12.1 m × 南北 9.2 m を測り、南東部には玄関が設けられており約 2 m 東に張出している。建物西側は土塁裾部を削って建てられ、コンクリート製の排水路が設けられていた。建物の南北主軸方向は N-16° E である。

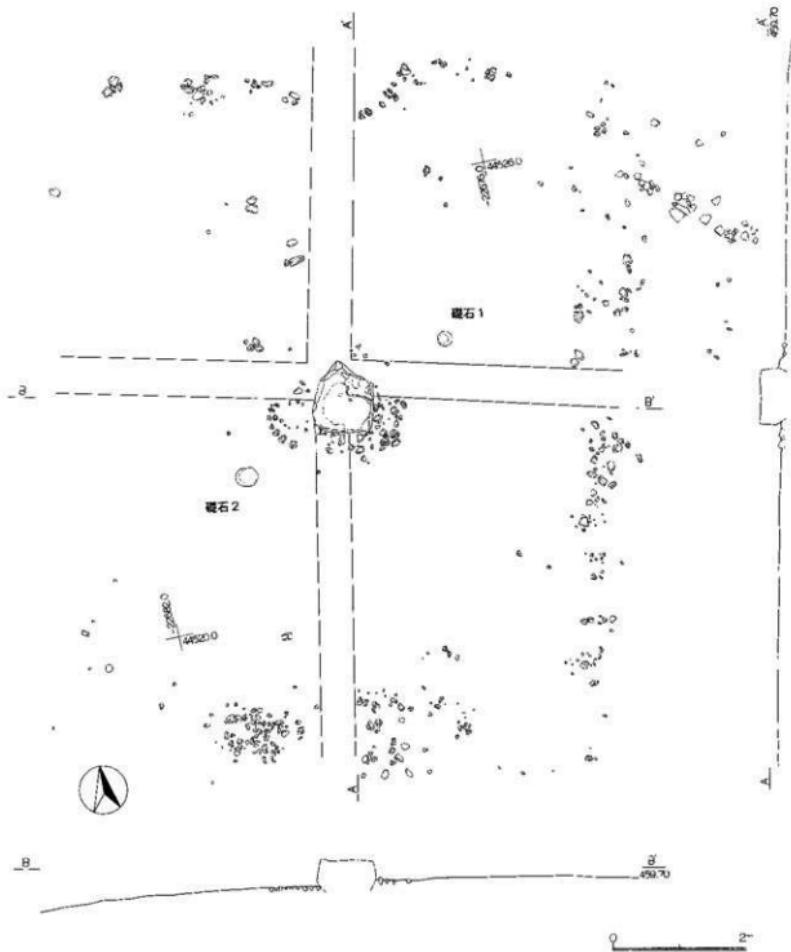
的場は、本丸北辺土塁を削り込んで安山岩円礫の石積で囲み、コンクリートブロックで構築されていた。また、建物と的場の間の西側には安山岩円礫が並んで検出されており、塀が設けられていたものと推定される。

#### (5) その他の遺構

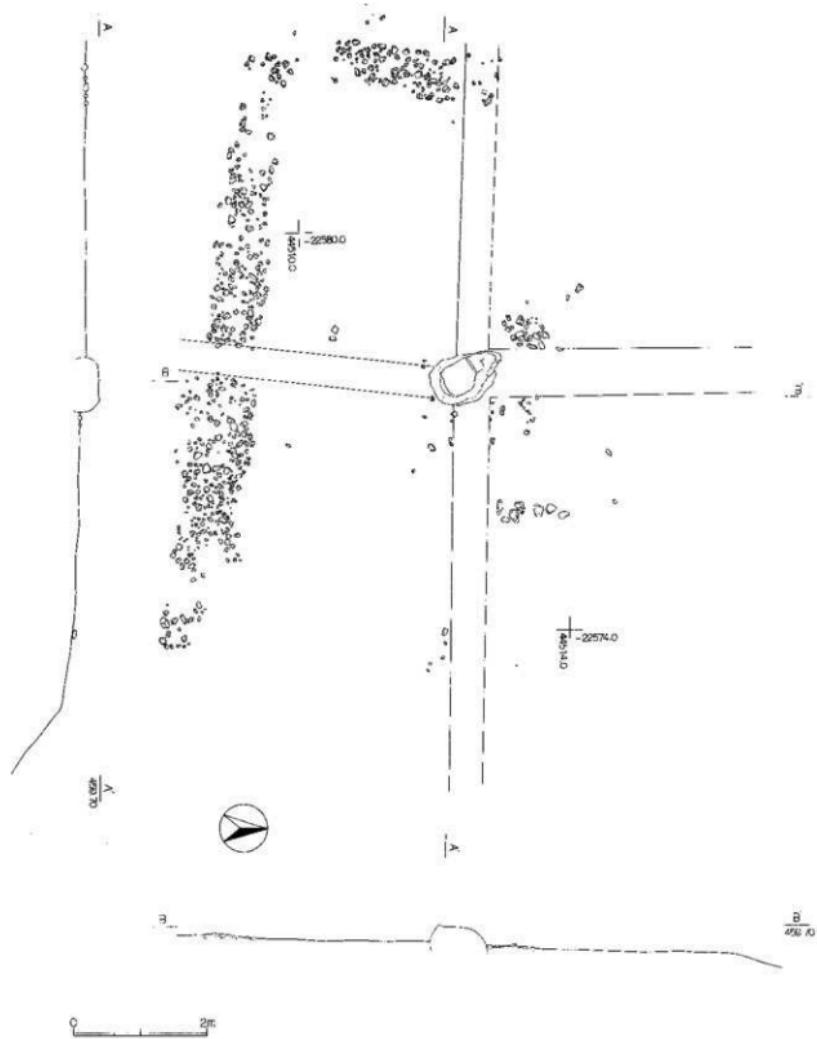
上田城跡本丸内には以上の近代建物の他に、旧上田藩校明倫堂の一部を明治24年に移築し、大正初期より料亭として営業していた建物や、昭和初期に花見用の飲食店として建設された店舗などが建てられていたが、いずれも昭和50年代に撤去された。発掘調査の結果、これらの建物跡は基礎部分を重機で掘削して撤去されており、規模等を推定できる基礎遺構は検出されなかった。



第3図 上田城跡本丸内発掘調査範囲図

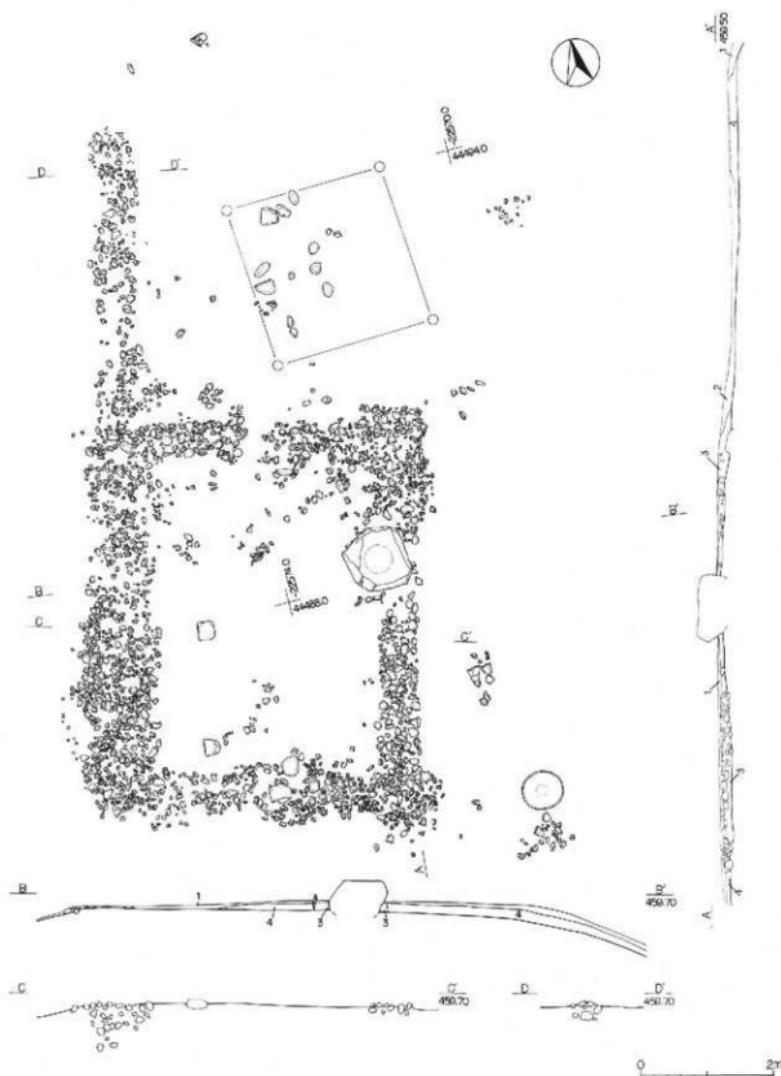


第4図 第1号(北西)隅櫓跡実測図

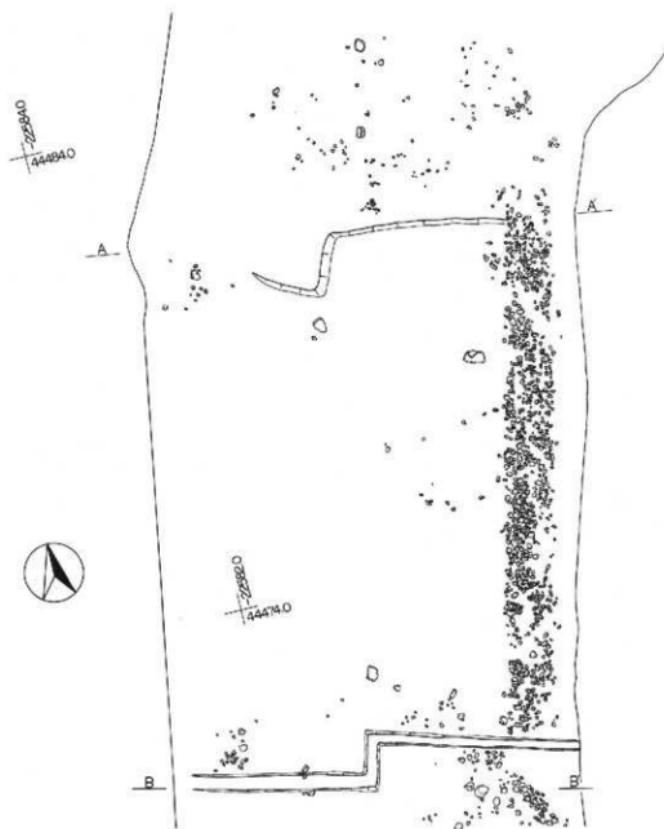


第5図 第2号(北東)隣接跡実測図

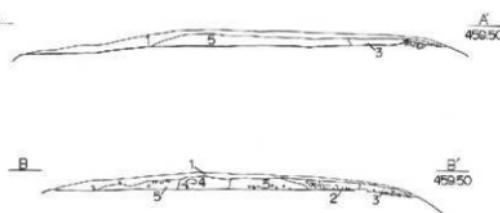
第1層 3950/7 緑赤褐色土、礫を含む。やや縮まりあり。  
 第2層 3950/3 に少し褐色土、礫、砂を含む。粘性・縮まりなし。  
 第3層 3950/1 褐灰色土、小礫を多く含む。やや粘性・縮まりあり。  
 第4層 3950/3 に少し褐色土、礫を含む。縮まりあり。



第6図 第3号（北東）隅櫓跡及び近代建物跡実測図

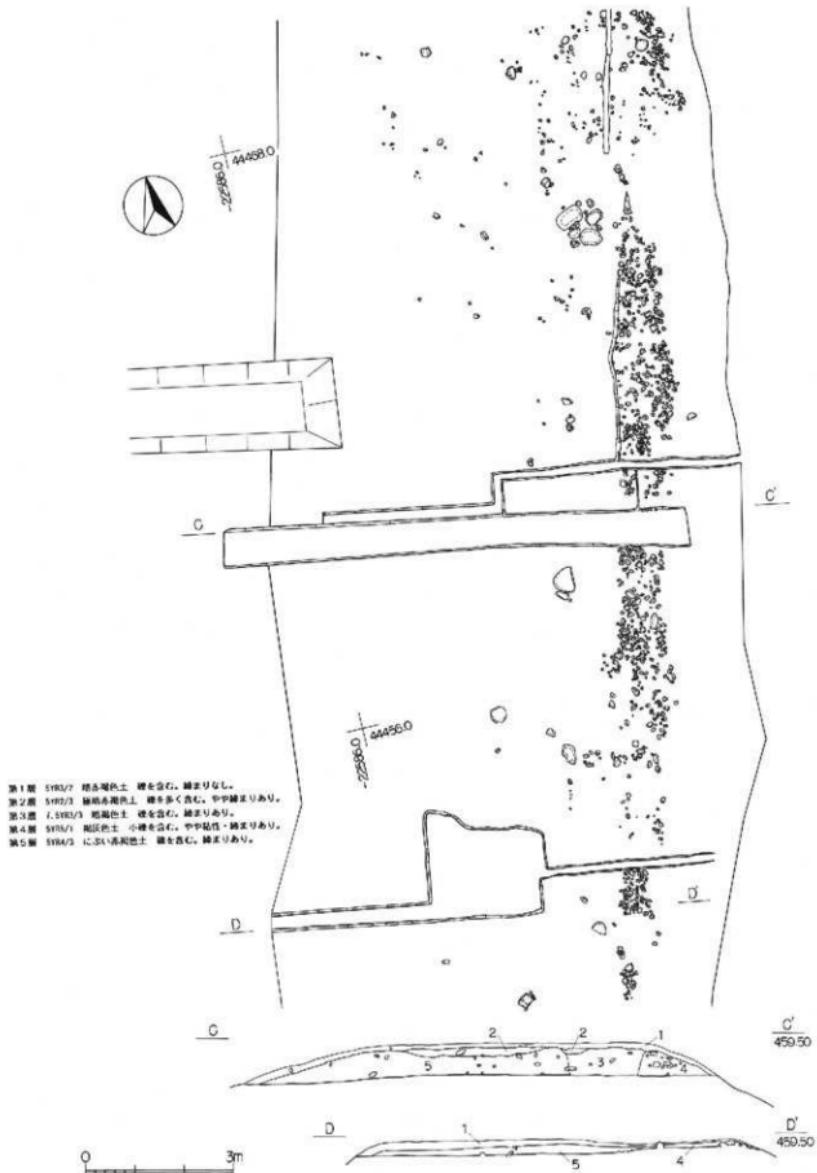


第1層 170/2 塩化鈷色土 砂を含む。縫まりなし。  
第2層 170/2 塩化鈷色土 砂を多く含む。やや粘性・縫まりあり。  
第3層 170/2 塩化鈷色土 小砂を含む。やや粘性・縫まりあり。  
第4層 170/2 塩化鈷色土 砂を含む。やや粘性・縫まりあり。  
第5層 170/2 に付い小黄土 砂を含む。縫まりあり。

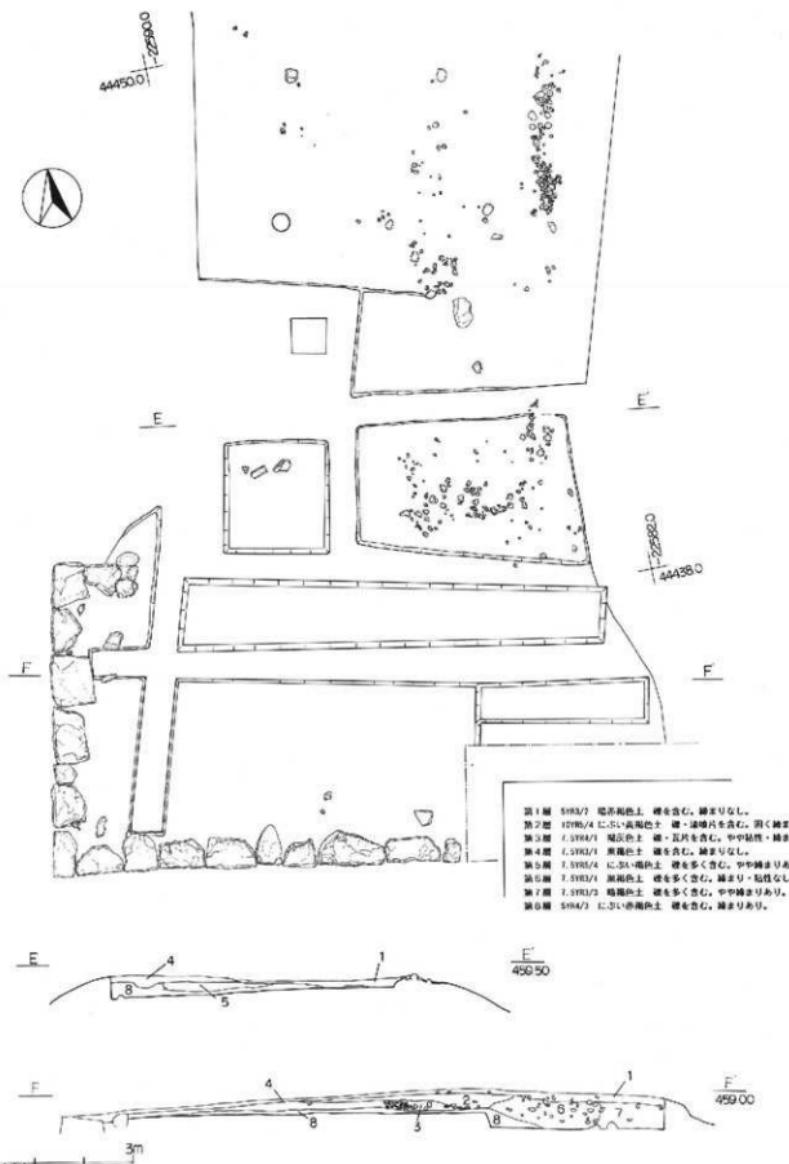


0 3m

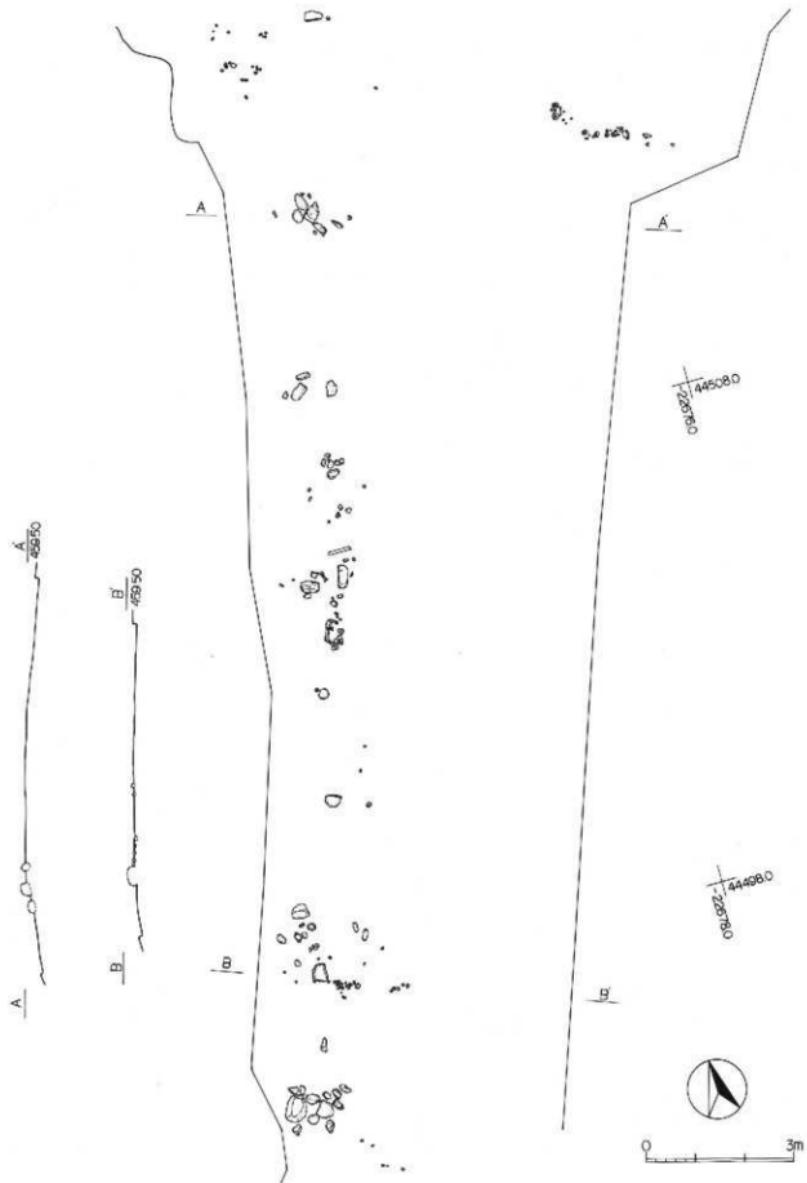
第7図 本丸東辺土壌実測図(1)



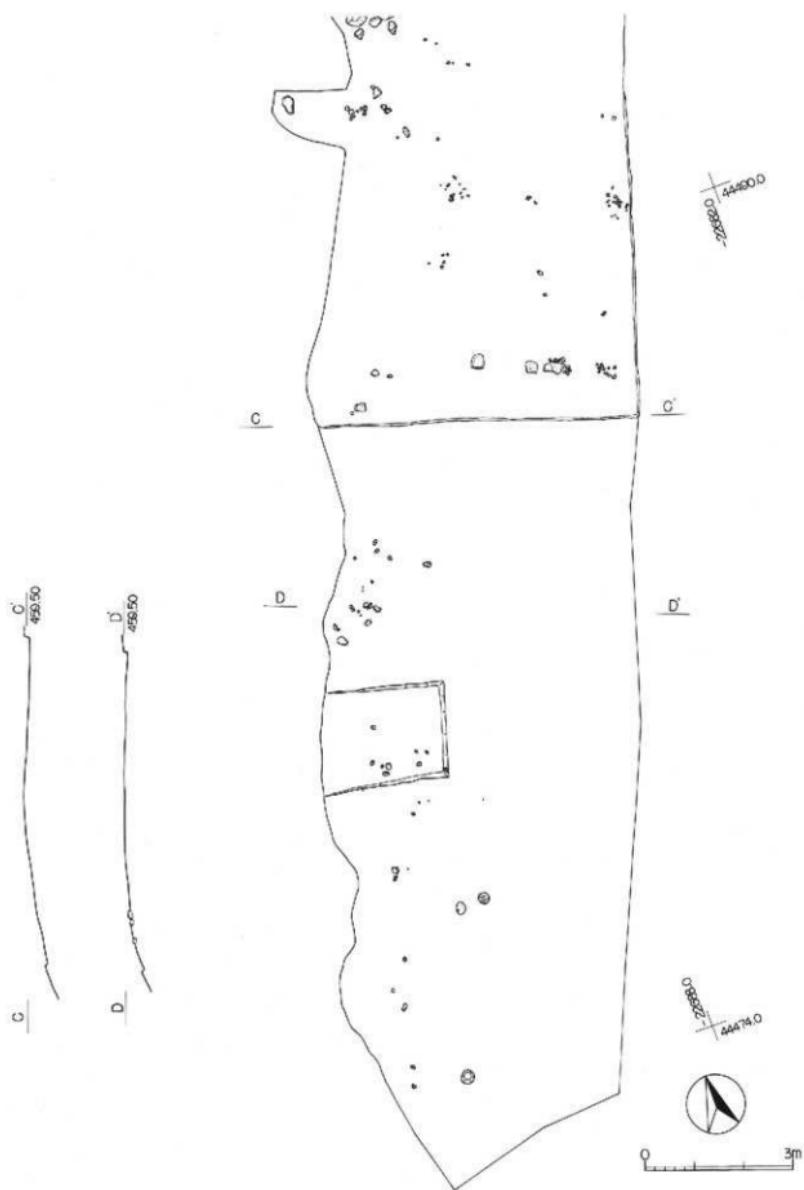
第8図 本丸東辺土塁実測図（2）



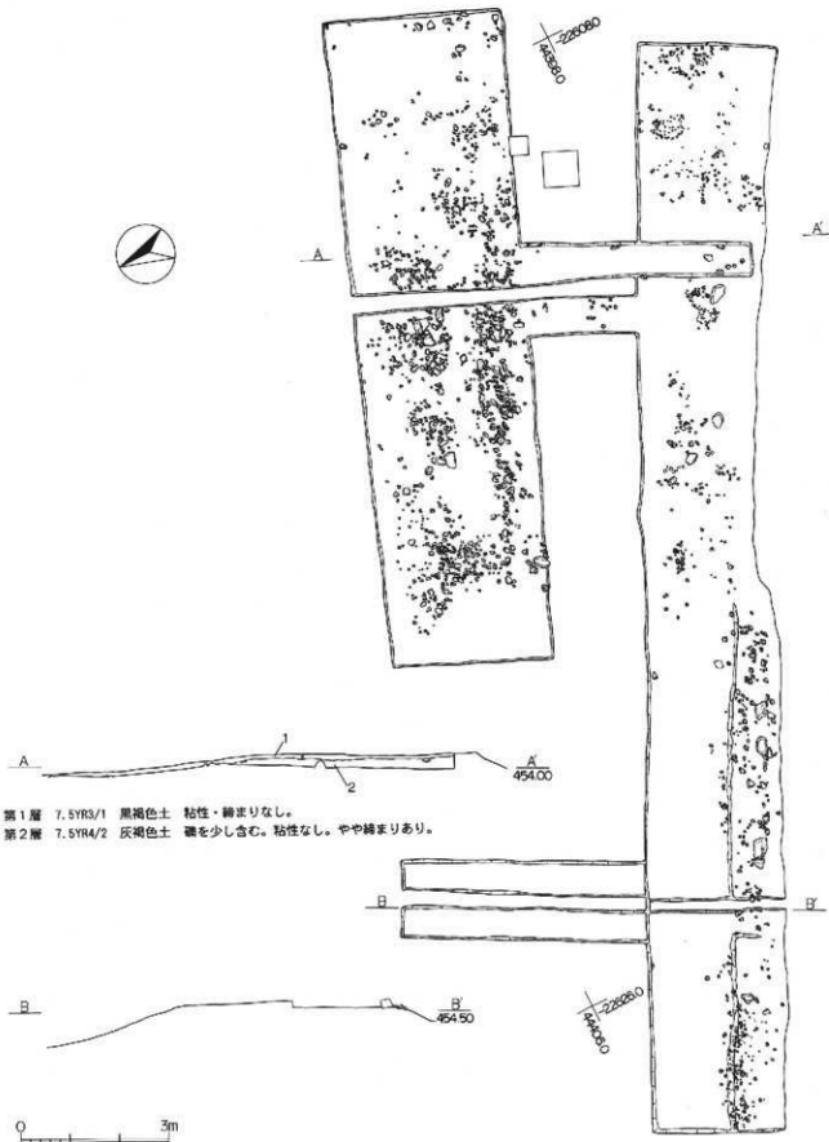
第9図 本丸東辺土塁実測図（3）



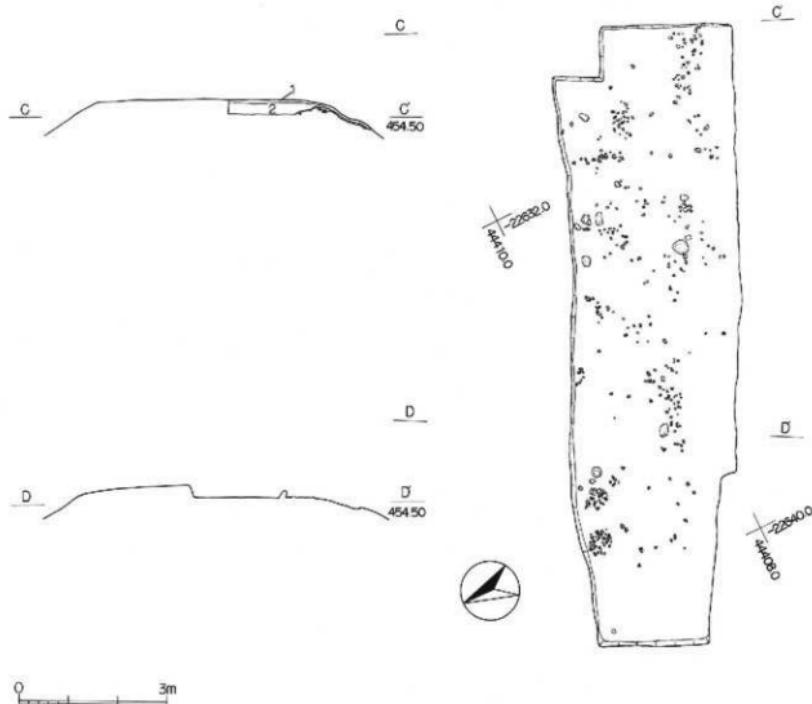
第10図 本丸西辺土堀実測図（1）



第11図 本丸西辺土壠実測図（2）



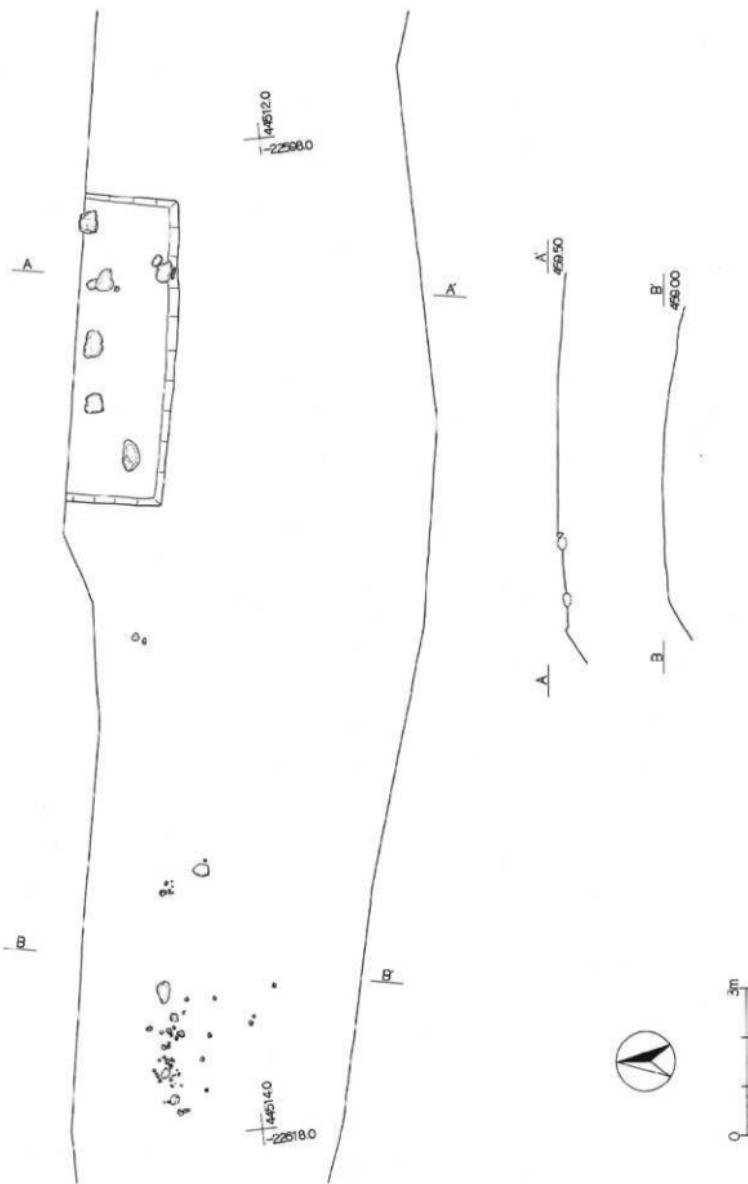
第12図 本丸南辺土壌実測図（1）

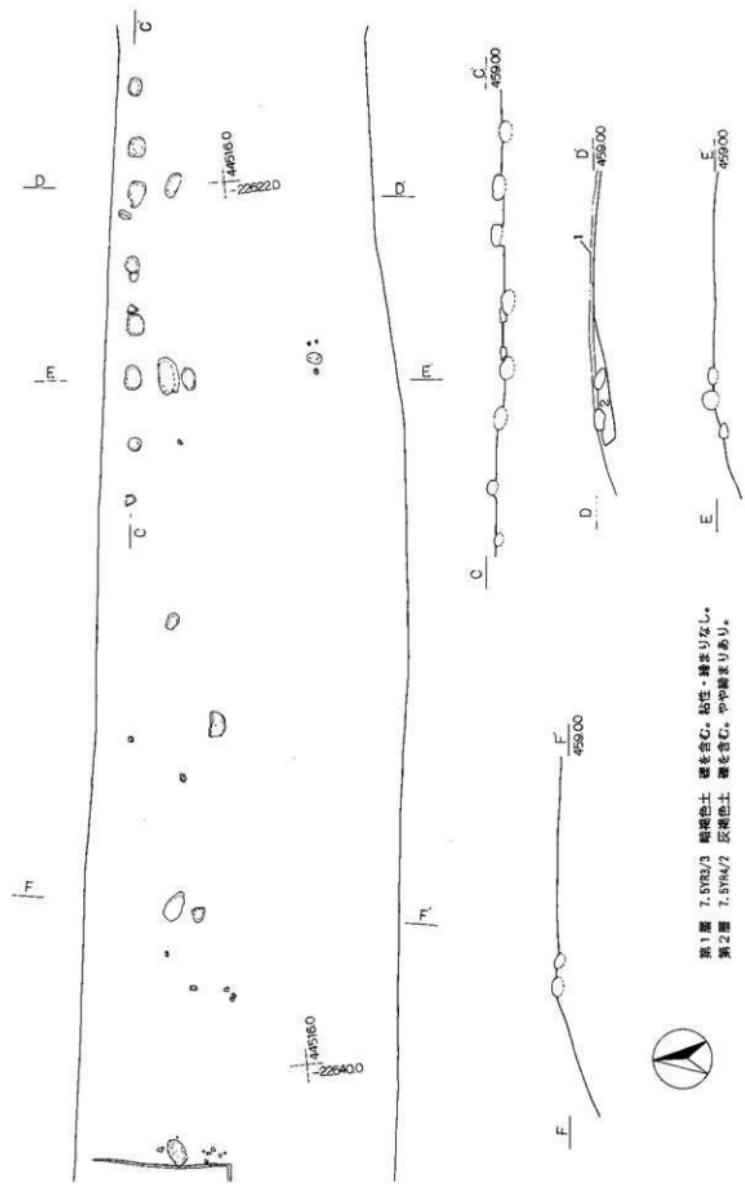


第1層 7.SYR3/1 黒褐色土 粘性・締まりなし。  
第2層 7.SYR4/2 灰褐色土 線を少し含む。粘性なし。やや締まりあり。

第13図 本丸南辺土壌実測図（2）

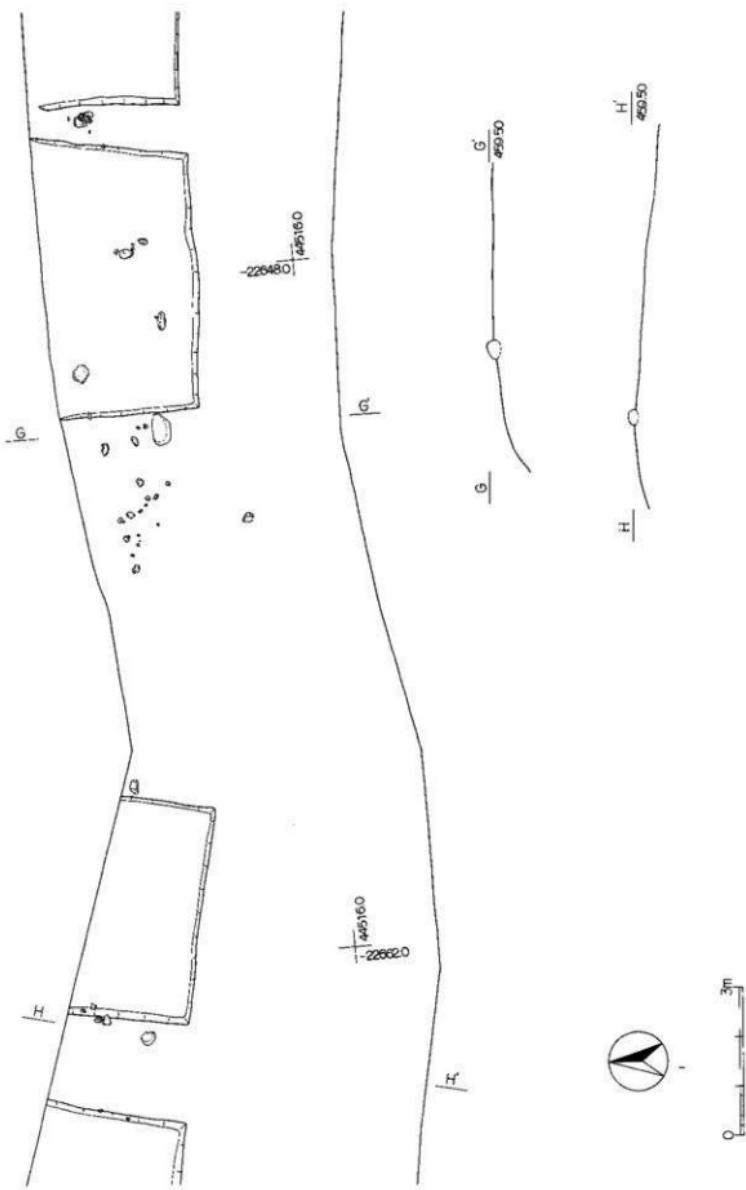
第14図 本丸北邊土壘実測図（1）



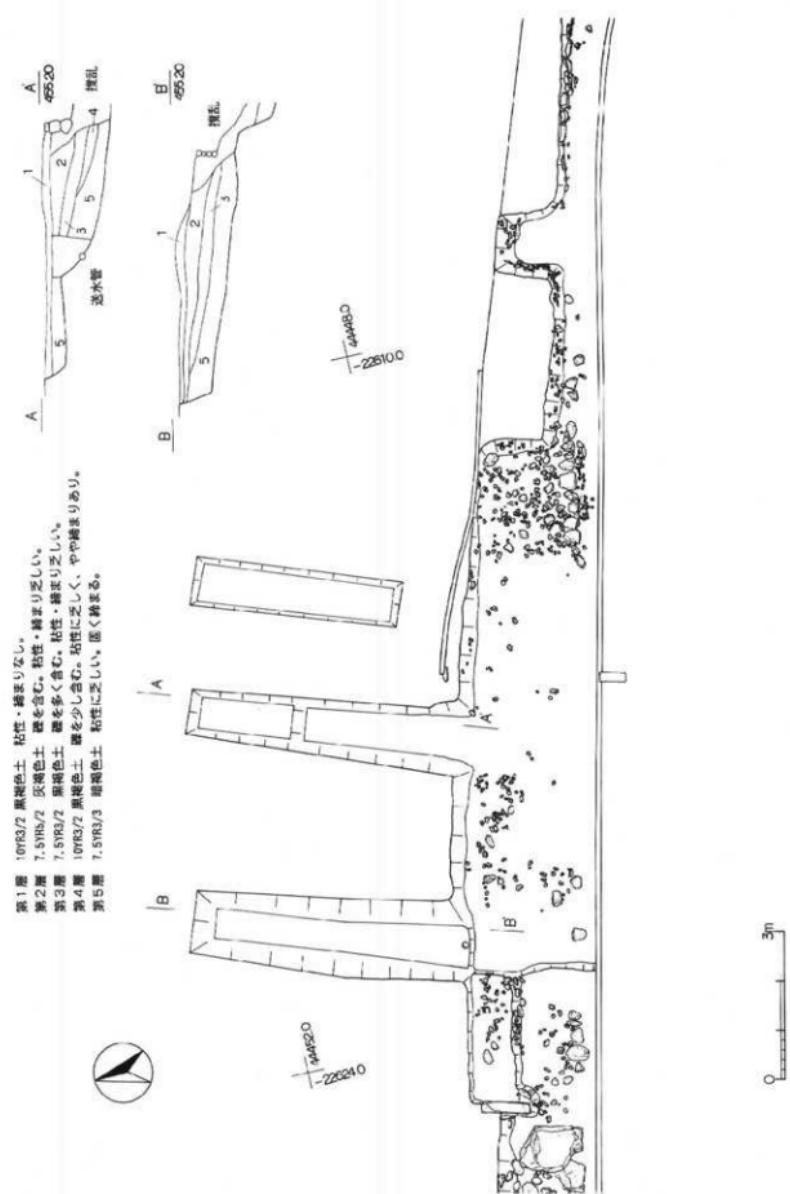


第15図 本丸北辺土壌実測図 (2)

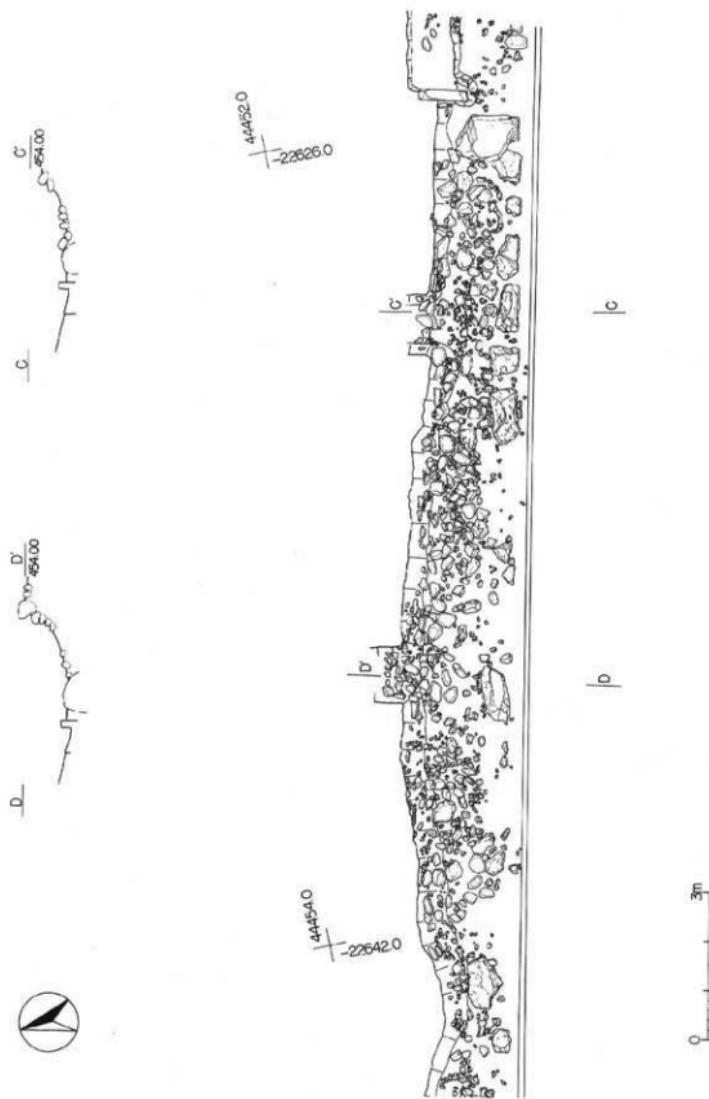
第16図 本丸北辺土塁実測図 (3)



第17図 石垣跡実測図（1）

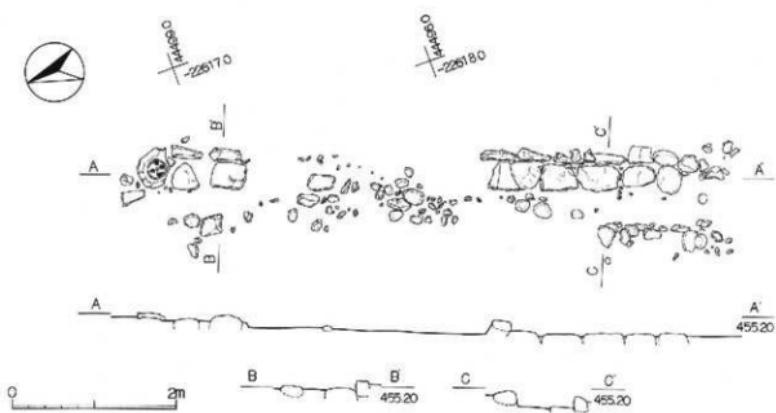


第18図 石垣跡実測図(2)

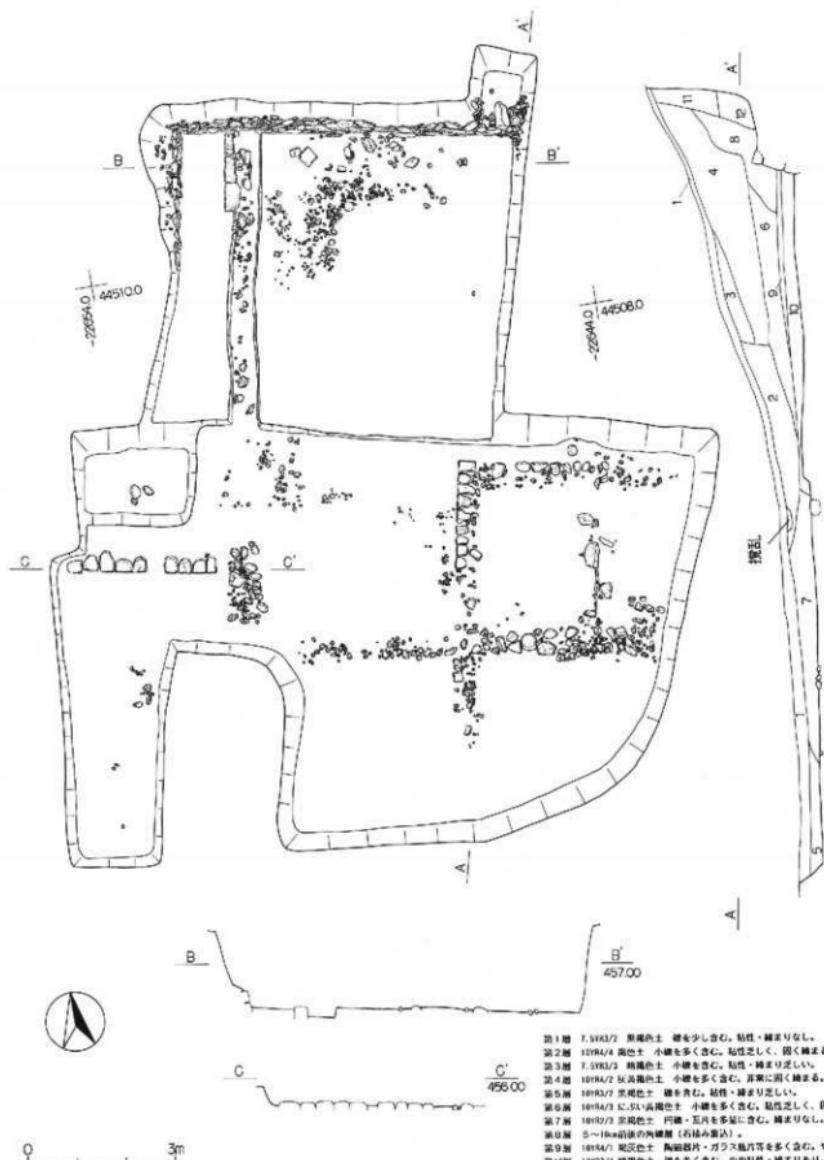




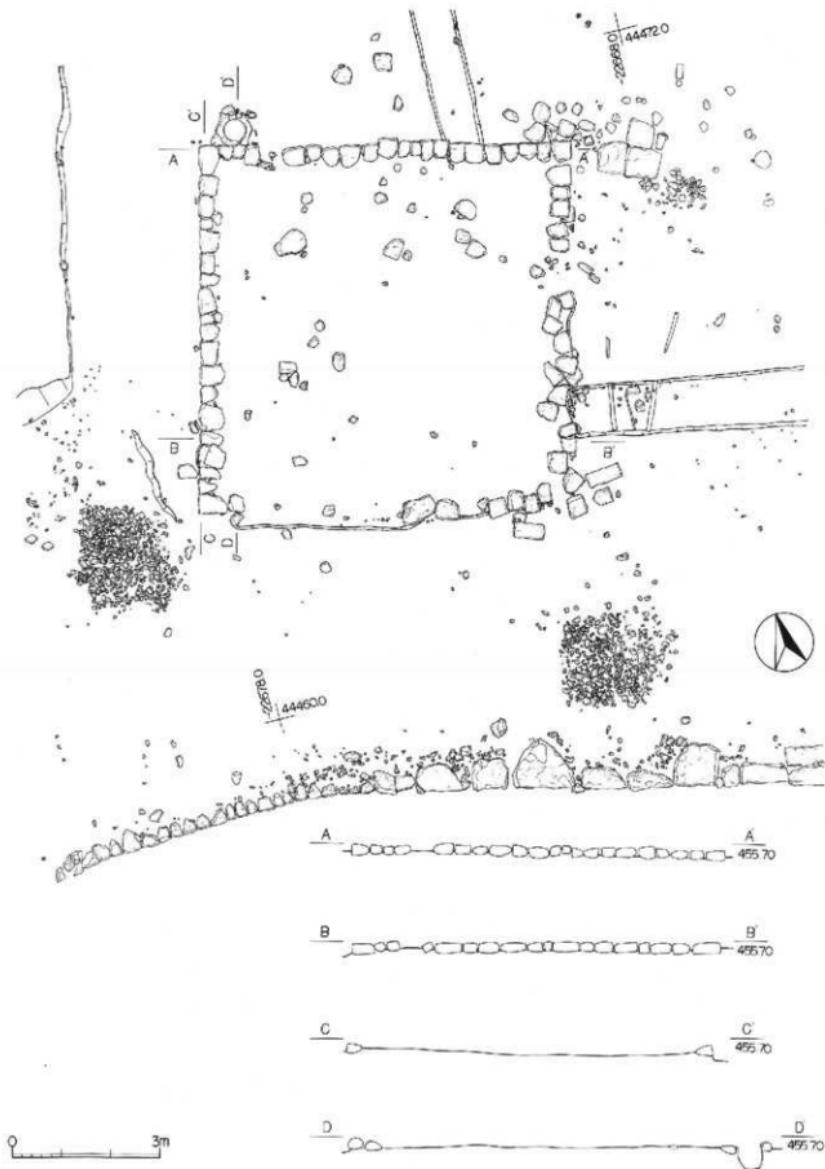
第19図 石垣跡実測図（3）



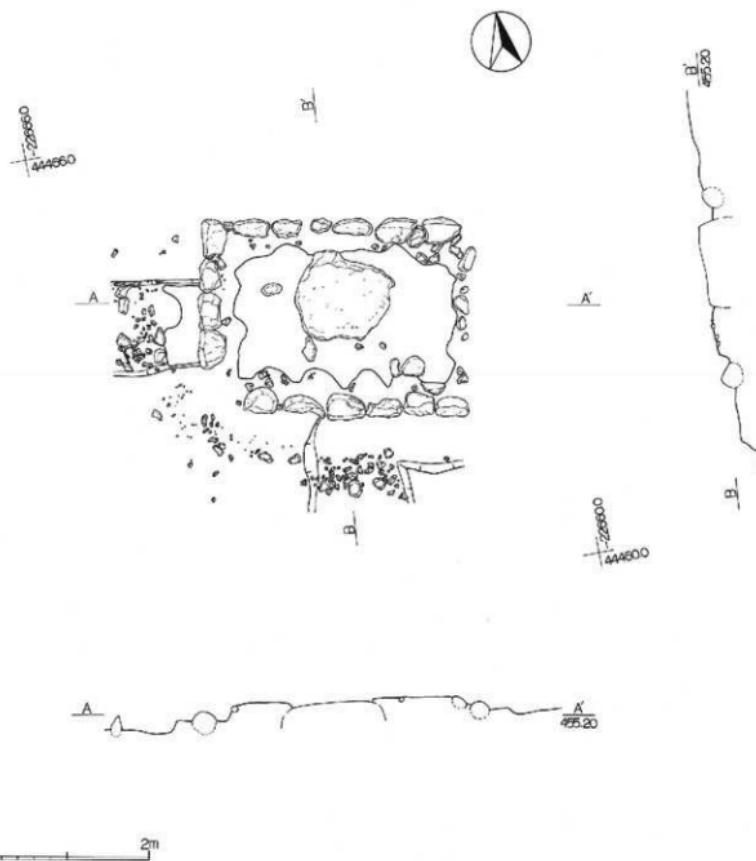
第20図 配石遺構実測図



第21図 招魂社跡実測図



第22図 招魂社社務所跡実測図



第23図 石碑跡実測図



第24図 弓道場建物跡実測図

### 第3節 遺物

上田城本丸には慶長の破却以降、御殿や藩庁等の建造物は建てられず、藩主や一般家臣が出入りすることはほとんどなかったと推定されている。発掘調査により出土した近世の遺物も隅櫓や土塀に使用されていた瓦が大半を占め、日常生活に関する遺物は皆無に近い状態であった。

また、遺構に伴って出土した資料は乏しく、徹底した破却とその後の復興が行われた上田城の歴史と、掘り込みを持たない城郭遺構の性格から、遺構と遺物の共伴性の検証は困難であった。さらに、表土直下の幕末期の遺構面の確認を中心に調査を進めた結果、層序として各時代を捉えるには至らず、層位学的に所産期の推定できる遺物は僅かであった。しかしながら、数か所で検出された一括資料と、従来の発掘調査による資料、伝世資料等により、最小限の共伴性と所産期の位置付けが可能と考えられる。

本節では、前記の理由と利用者の利便性に鑑み、近世の資料を中心種類と形態ごとに分類して報告することとした。瓦類では瓦当紋様部を残す全資料、丸瓦・平瓦については全長・全幅の両方または一方の知れる全資料について示し、その他の資料については特徴あるものを可能な限り示すよう努めた。

#### 1 瓦

##### (1) 軒丸瓦 (第25図1～第33図88・図版12～18・33)

軒丸瓦は瓦当部の紋様を残す全資料88点を示した。本項では瓦当紋様の特徴を中心にして以下のように分類した。

###### I類 三巴紋を有する資料

###### I a類 連珠三巴紋、三巴紋と連珠の間に圓線を持たない資料

I a-1類 (1～2) 三巴紋は右巻き。尾部は細長く伸びて次の巴の尾に接し、全体として環状を呈する。連珠は15個。既出資料によると瓦当径は16cm、平縁周縁の幅は17mm前後である。

I a-2類 三巴紋は左巻き。連珠は12個。今回の発掘調査では出土していないが、昭和2年の野球場建設に際して、二の丸北西土塁より出土した金箔鳥食瓦がある。瓦当径は19.7×17.7cmと大型で、金箔は黒漆を用いて周縁と紋様の凸部に押されている。

I a-3類 (3～5) 三巴紋は左巻き。巴の頭は明瞭で大きく、尾部は非常に細長く伸びて次の巴の尾に接し、全体として環状を呈している。三巴紋の直径は約9cmで最大の大きさを持つ。連珠は16個。3の瓦当径は15.0cm、平縁周縁の幅は17～21mmを測る。

I a-4類 (6～10) 三巴紋は左巻き。尾部は細長く伸びて次の巴の尾に接し、全体として環状を呈する。連珠は17個。瓦当径は15.5cm前後。平縁周縁の幅は17～20mmを測る。6の背面には櫛齒状工具による接合痕が観察される(図版33)。

I a-5類 (11) 三巴紋は左巻き。尾部は細長く伸びて次の巴の尾に接し、全体として環状を呈する。連珠は18個。瓦当径は15.5cm。平縁周縁の幅は18mmを測る。本丸堀底より出土した資料に同范の鳥食瓦がある。

I a-6類 (12～16) 三巴紋は巴が分離した右巻きで、連珠は13個と推定される。瓦当径は15cm前後で、平縁周縁の幅は20～22mmを測る。12の背面には櫛齒状工具による粗い半同心円状の接合痕が観察される。圓線を持たない点を除くと後述する I b-1 に類似するが、接合技法は後

出的である。

#### I b 類 連珠三巴紋、三巴紋と連珠の間に圓線を持つ資料

I b - 1 類 (17~35) 三巴紋は巴が分離した右巻きで、尾部は細長く伸びて圓線に接している。

連珠は13個。三巴紋と連珠は扁平な形状を呈する。瓦当径は15.5cm前後、平縁周縁の幅は18~22mmを測る。丸瓦部との接合部には櫛歯状工具による放射状の刻みが観察される。

I b - 2 類 (36~56) 三巴紋は巴が分離した右巻きで、尾部は細長く伸びて圓線に接している。

連珠は15個。三巴紋と連珠は扁平な形状を呈する。瓦当径は14.0cm前後、平縁周縁の幅は14~18mmを測る。丸瓦部との接合部には櫛歯状工具による放射状の刻みが観察される。42の背面には×状の符号が刻まれている。

I b - 3 類 (57~68) 三巴紋は巴が分離した左巻きで、尾部は比較的短く伸びて圓線に接している。連珠は15個。三巴紋と連珠は大振りな造りである。瓦当径は15.5cm前後で、平縁周縁の幅は20~22mmを測る。接合部には櫛歯状工具による粗い半同心円状の刻みが観察される。焼成が甘く軟質で黄褐色を呈する類と、堅緻で光沢を帯びた青灰色を呈する類がある。

I b - 4 類 (69~77) 三巴紋は巴が分離した左巻きで、尾部は比較的短く伸びて圓線に接している。連珠は16個と推定される。瓦当径は13.4~14.2cm、平縁周縁の幅は13~18mmを測る。色調は光沢を帯びた灰色を呈する。

I b - 5 類 (78) 三巴紋は巴が分離した左巻きで、尾部は I b - 4 類より長く伸びて圓線に接している。連珠は18個と推定される。瓦当径は13.6cm、平縁周縁の幅は16mmを測る。

#### I c 類 (79) 連珠を持たない資料で招魂社跡付近から1点のみ出土した。三巴紋は左巻きで、尾部は細長く伸びて圓線に接している。瓦当径は11.8cm、平縁周縁の幅は16mmを測る。凹面の調整は斜め方向のコビキBの後、縦方向の全面にケズリ調整が行われている。色調は光沢を帯びた灰色である。本資料は瓦当径が著しく小さく、特殊な部位に使用された瓦と推定される。上田城跡からは初出の資料で、出土位置より近代の所産の可能性も考慮される。

#### II 類 菊花紋を有する資料

II a 類 (83~85) 8弁の菊花紋を持つ資料。瓦当径は15.0~15.5cmと推定され、平縁周縁の幅は18~22mmを測る。

II b 類 (80~82) 9弁の菊花紋を持つ資料。80の瓦当径は14.6cm、平縁周縁の幅は17~20mmを測り、周縁部にケズリ痕が観察される。他の資料は瓦当径15.5cm前後、周縁幅18~20mmを測る。

#### III 類 家紋を有する資料

III a 類 (86~87) 仙石氏の家紋である永楽通宝紋を持つ資料。瓦当径は16.0cm前後と推定され、平縁周縁の幅は15~18mmを測る。背面には櫛歯状工具による放射状の刻みが観察される。

III b 類 (88) 松平氏の家紋である五三桐紋を持つ資料で、弓道場跡南側付近より出土した。瓦当径は16.0cmと推定され、平縁周縁は24mmを測る。色調は光沢を帯びた青灰色である。松平神社等の近代建造物に伴う資料である可能性が高いものと推測される。

これらの軒丸瓦のうち、金箔瓦の I a - 2 類と菊花紋の II 類は安土桃山期に特有の資料で、明らかに真田氏時代の所産である。また、I a - 1 類、I a - 3 類~5 類についても本丸堀から大量に出土した資料と同様で真田氏時代の所産と推定される。仙石氏時代の資料としては、同氏の家紋である永楽通宝紋を用いた III a 類があげられるが、既出資料が10数点と少なく、I b - 1 類と I b - 2 類の連珠三巴紋軒丸瓦が併用されていたものと推測される。I b - 1 類と I b - 2 類の胎土、焼成、意匠等には共通点が多く、瓦当径の差により I b - 1 類が隅檣、I b - 2 類が土塀に用いられていたものと

考えられる。III a類は松平氏入封後に廃棄されたが、I b-1類は現存する隅櫓にも多数用いられており、引き続き使用されていたものと思われる。松平氏時代の資料はI b-3類～5類と推定され、I b-3類と4類は胎土、焼成等が類似し、瓦当径の差から隅櫓と土塀に対応するものと思われる。I a-6類については、I b-1類に類似するものの、接合技法は後出的で仙石氏時代もしくは松平氏時代の補足瓦と推定される。また、I c類とIII b類は近代の所産である可能性が高いものと推測される。

### (2) 軒平瓦 (第34図1～第40図75・図版19～23)

軒平瓦は瓦当部の紋様を残す全資料75点を示した。

I類 (1～6) 均正唐草紋。中心飾は上向きの3葉紋で、先端は三叉に分かれしており、点珠はない。脇紋様は2葉の唐草紋で上向き、下向きに伸び内側に巻き込んでいる。瓦当の上弦幅は25cm前後、上下幅は中央部で40mm前後を測る。1・2・4は平成5年度に本丸上段西側に掘削したトレンチの最下層にあたる地表下約2mの部分より出土したもので、1は完存である。また、6は隅軒平瓦である。

II類 (7～10) 均正唐草紋。中心飾は下向きで、先端が剣菱状に尖った太い3葉と、剣菱状の蔓が両脇に配されており、中心に点珠を持つ。脇紋様は2葉で、下向きに伸びて内側へ巻き込む唐草紋が連続して配されている。各紋様は断面が鋭い三角形を呈し、シャープな造形をみせる。瓦当の上弦幅は25cm前後、上下幅は中央部で50mm前後を測る。瓦当上弦部は面取りが施されるものが多い。

III類 均正唐草紋。中心飾は上向きの3葉で、点珠を中心に両脇は外反する。脇紋様は4葉の唐草紋で、3葉は頭を下向きに巻き、最も長い1葉は波状を呈している。

本書では瓦当の上弦幅により、25cm前後のIII a類 (11～45) と、23cm前後のIII b類 (46～75) に分類したが、紋様の微妙な差異、頸部の形状等によりさらに細分することも可能である。瓦当の上下幅は両者ともに40mm前後を測り、上弦部を面取りや横ナデにより斜めに仕上げたものが多い。

各軒平瓦の所産期については、I類、II類は本丸堀より出土した瓦類に同範の資料があり、慶長の破却によって埋没した真田氏時代の所産と推定される。本丸上段西側のトレンチ中より出土した資料の存在は、現在の本丸上段が慶長の破却後に形成された部分であることを示唆しているものと思われる。III a類は現存隅櫓に使用されており、仙石氏以降松平氏時代を通じて一貫して用いられた意匠と推定される。III a類とIII b類の上弦幅の差は、軒丸瓦 I b-1類と2類、I b-3類と4類にみられる瓦当径規格の差に対応しているものと推定され、隅櫓と土塀で規格の異なる瓦が使用されていたものと考えられる。

### (3) 棟瓦 (第41図1～6・図版23)

棟瓦は上段部西側の弓道場、招魂社社務所などの近現代建造物を撤去した跡から大量に出土した。本報告書では瓦当部6点を示した。1～4は連珠三巴紋の軒丸部で同範と推定される。軒丸部のみの出土であるため全体の紋様構成は不明で、出土位置も本丸上段部の様々な場所であるため、どの建造物に使用されたものか特定できない。直径は87mmを測り、紋様は中央に分離した左巻き三巴紋、周囲に12個の連珠と幅12～14mmの平縁周縁が廻る。背面の接合痕は、櫛齒状工具による半同心円状を呈する。5・6は唐草紋を有する近代所産の軒平部で、5は出土位置より第3号隅櫓跡の近代建造物の

ものと推定される。

以上に他に近代以降の所産による菊花紋伏間止瓦、袖瓦、万十軒瓦等が出土している。

#### (4) 菊丸瓦（第42図1～5・図版23）

菊丸瓦は同范と思われる5点が出土した。内区は中心1個+周囲5個の円筒形連子、花弁は素弁の10弁で間弁はない。周縁は幅8mmの平縁で、瓦当径は97mmを測る。後方の丸瓦部は欠損しており詳細は不明であるが、接合痕の残る5には放射状の細かく深い刻みが観察される。出土位置は1・2が招魂社跡、3～5が配石遺構北側付近で、永楽通宝紋鬼瓦や輪違い瓦等と一括して出土した。出土状況と接合技法より所産期は仙石氏時代と推定される。

#### (5) 丸瓦類（第43図1～第60図38・図版24～32）

本稿では便宜的に玉縁の長さと形状を基準に分類したが、胎土の分析、成形技法の差異などにより今後より詳細な分類が可能と思われる。また、瓦当部を欠損した軒丸瓦についても本項で取り扱うこととした。

丸瓦は玉縁式のものと、行基式の2種に大別され、量的には玉縁式が圧倒している。

出土資料における瓦の大きさは、全長30～33cmが一般的であるが、39cm前後の資料（3・36）や、24cm前後の資料（35）も存在する。胴部長は27.5～30.5cm、胴部幅は14.0～16.6cmを測る。玉縁の長さは、43～40mm（1～5）、35mm前後（7～20）、30mm前後（22～29）、25mm前後（30～32）の4種類が存在し、形状は鋭角的に角張る類と緩く内湾する類がそれぞれに存在する。なお、34は胴部幅12.1cm、玉縁長2.1cmと著しく小型で通常の丸瓦とは異なる部位に用いられたものと推定される。

調整は、胴部凸面には縦方向のケズリとナデ調整が施され、玉縁凸面は横方向のナデ調整が行われている。凹面にはコビキ痕、吊紐痕、布袋痕などが観察される。コビキ痕はすべてコビキBに分類されるものである。吊紐痕の残る資料はあまり多くなく、2点（1・6）を示したが、1単位と2単位が存在する。布袋痕は多くの資料に観察されるが、布目の精粗や刺し糸の有無など多様である。胴部側縁や前縁、玉縁端部等には面取り調整が行われ、胴部側縁と凸面の境は鋭角な無調整の類、細い面取りを施す類、ナデ調整により丸く仕上げた類などがある。

釘穴は、軒丸瓦など一部の瓦に設けられ、胴部中央玉縁寄りに凸面から凹面に向けて穿孔されている。凹面はほとんど無調整で釘穴の周囲に粘土が盛り上がって残っている資料が多い。符号を印刻したものとしては、玉縁凸面にL字形の符号を刻んだもの（9・29）と、凹面胴部前縁の面取り部に×状の符号を刻んだもの（11・30）が確認されている。また、胴部側縁に突起を持つ類（5）や、抉りを持つ類（9・30）がある。

以上に他に図示できなかったものの、谷丸瓦2点が出土している。

#### (6) 平瓦類（第61図1～第62図4・図版33）

平瓦は4点を呈示した。全長は1が303mm、2が265mm、4が286mmを測り、狭端幅の知れる3は243mmを測る。調整はケズリの後にナデ調整が施され、凹面が横方向、凸面が縦方向の調整がされている。コビキ痕、布目痕の残る資料は確認されなかった。

なお、軒平瓦第34図1と2は、全形が確認できる資料で、1は全長282mm、広端幅250mm、狭端幅220mm、弧深36mmを測り、2は全長286mm、狭端幅225mmを測る。

#### (7) 輪違い瓦 (第63図1～第71図47・図版34～35)

大棟に使用される輪違い瓦は65点が出土し、本書では47点を呈示した。形態は半円筒形と無段玉縁形(行基式)に大別され、それぞれ大小の規格がある。1～8は無段玉縁形の大型品で全長は14.0～16.8cmを測り、全幅は15cm前後である。9～12は半円筒形の大型品で全長は14.7～19.1cm、全幅は9が14.5cmを測る。13～22は無段玉縁形の小型品で全長は9.8～11.4cm、全幅は9.8～13.2cmを測る。24～47は半円筒形の小型品で全長は6.6～10.9cm、全幅は約10～12.3cmを測る。以上の分類に加え、側縁の形状や凹面前後端の面取りの有無などによりさらに細分も可能と考えられるが、出土状況から大部分は仙石氏の復興の際に葺かれたものが、松平氏の改修により廃棄されたものと推定され、時期的な差は少ないものと推測される。成形、調整技法は丸瓦とほぼ同様で、凸面には縱方向のケズリとナデ調整、凹面にはコビキB痕と布袋痕などが観察される。

#### (8) 鬼瓦 (第72図1～第73図3・図版35～36)

鬼瓦は3点を呈示した。1はM11-C3区の配石造構北端より出土した永楽通宝紋大鬼瓦である。左裾部と周縁の大部分を欠損しているものの、全高は46.5cm、最大幅57cm(推定)、周縁部の厚さ8.5cmを測る。表面の中央部には仙石氏の家紋永楽通宝紋が配され、背面にはX状の符号と冠瓦を納める窪みがある。2は1より僅かに小型の永楽通宝紋大鬼瓦で、上半部はJ10-C2区より出土し、下半部は平成4年度に移転した本丸内店舗に保管されていたものである。3はJ10-C2区より出土した鬼瓦片で、表面に木瓜紋の一部かと思われる紋様と波状の沈線がみられる。上田城の歴代城主で同紋を用いた例は知られていないが、周縁が無く、肩部を斜めに造る形態は、平成3年度に本丸堀より出土した五七桐紋鬼瓦片と共に通する特徴である。

以上のはかに、周縁部の厚さが11cmを測る大鬼片なども出土したが、近世鬼瓦の大部分は非常に細かく破碎されており、紋様が確認できるものは前記3を除くとすべて永楽通宝紋である。出土状況も輪違い瓦等と共に比較的まとめて出土する傾向が看取られ、松平氏が入封後に行った改修により廃棄されたものと推定される。

## 2 石製品

#### (1) 五輪塔 (第74図1～第75図5・図版36)

五輪塔は5点出土した。1・2は地輪で、1は一辺約18.5cm、高さ約9cm、重量5.48kgを測り、水輪を受けるくぼみがある。2は一辺約24cm、高さ約14cm、重量14.3kgを測る。3・4は火輪で、3は四隅が欠損しているものの一辺が約22cmと推定され、高さ約12cm、重量4.06kgを測る。頂部に空風輪を受けるためのぼぞ穴が設けられている。4は比較的大型の火輪片と推定される。5は水輪で直径約25.5cm、高さ約12cm、重量6.94kgを測り、上下面がくぼんでいる。近年まで石積みに転用されていたらしく、左右が欠損しモルタルが付着している。石材はすべて安山岩であるが、4を除く4点は火山泥流により変質し、多孔質で脆い性質である。

#### (2) 石臼 (第75図6・図版36)

石臼は安山岩製の上臼が1点出土している。直径31.3cm、高さ13.7cmを測り、かなり磨り減っている。所産期は近世と推定されるが、旧招魂社社務所付近からの出土であり、近代以降に城内に持ち込まれた可能性が高いと思われる。

### 3 土器・土製品

#### (1) 土器（第76図1～4・図版37）

土器は土師器片と土師質土器片が出土しており、土師質土器の内耳鍋4点を呈示した。いずれも口辺部の小片で口径は約30cm前後と推定される。成形は外面とも横方向のヘラケズリの後、ナデ調整が行われ、口唇部は面取りされている。外面は煤の付着が顕著で黒褐色を呈し、内面はにぶい茶褐色を呈する。所産期は中世から近世初頭と推定される。

土師器は古墳時代後期の所産と推定される瓶の把手部分が出土している。

#### (2) 土製品（第77図・図版37）

土製品としては輪の羽口が出土している。M11-C3区の配石造構付近より直立した状態で出土したが、周囲は近代以降の攪乱が激しく、原位置を留めているとは言い難い。しかしながら保存状態は極めて良く、ほぼ完存している。輪側でやや広がった円筒形を呈し、全長は28.3cm、直径は炉側で64mm、輪側で82mmを測る。中心部にわずかに偏芯して径24mmの孔が貫通し、輪側で大きく開いている。炉側の先端部は高熱により熔融している。胎土は金雲母や白色細粒子を多く含んでおり、外面の成形は縦方向のヘラケズリの後に丁寧にナデ調整が行われている。

### 4 金属製品

#### (1) 鉄製品（第78図1～9・図版37）

鉄製品は9点を示した。1～7は角釘で、1～5は本丸南側土塁演武場跡付近で出土したものである。8は両端を欠損する一辺12mmの角棒状の製品である。9は直径45mm、厚さ9mmを測る戸車状の製品である。

#### (2) 銭貨（第79図1～5・図版37）

銭貨は明治以前の銅銭5点を呈示した。1は永楽通宝（明銭・1408年初鋤）、2～4は寛永通宝（寛永3年・1626年初鋤）、5は文久永宝（文久3年・1863年初鋤）である。

近代以降の銭貨としては、稻一銭銅貨（大正4年）、桐一銭銅貨（大正10年・同13年）、一円黄銅貨（昭和23年）、五十銭黄銅貨（昭和23年）などのほか昭和30年代以降の現行貨幣が出土している。

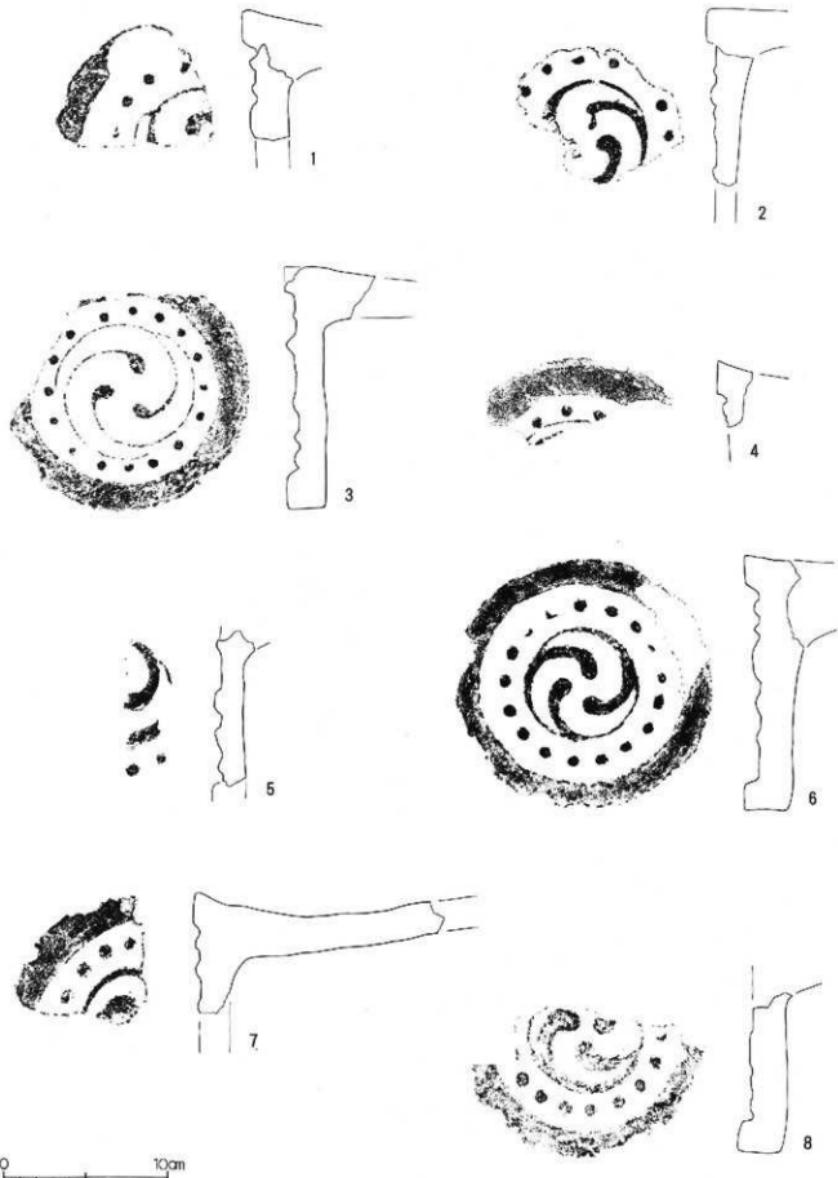
### 5 その他の遺物

前述した以外の出土遺物としては、陶磁器、ガラス類、硯等がある。

陶磁器は、本丸内の近代建造物跡を中心に出土した。器種は皿・鉢・片口鉢・摺り鉢・碗・急須・蓋物・徳利・猪口・香炉・壺・壺蓋・植木鉢・便器・土管等が確認される。これらの資料の大部分は、近年まで飲食業を営んでいた建造物跡と、招魂社付近、弓道場跡から出土した近現代遺物で、器種も飲食、宴席用のものが圧倒的である。また、近代建造物跡以外からの出土遺物は現代の湯呑碗、猪口類が大部分を占め、花見の際に遺棄されたものと推定される。

ガラス類は、インク瓶、清酒瓶、化粧品容器等が出土している。いずれも近代建造物跡からの出土で、近現代の所産である。

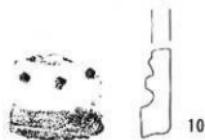
硯は、弓道場跡から泥岩製の大型品2点が、招魂社社務所跡から粘板岩製の小型品1点が出土している。所産期は近代と推定される。



第25図 軒丸瓦実測図（1）



9



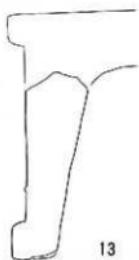
10



11



12



13



14



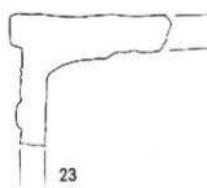
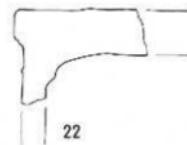
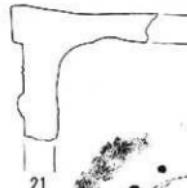
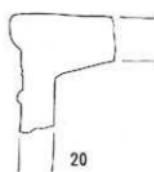
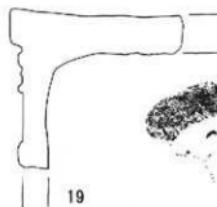
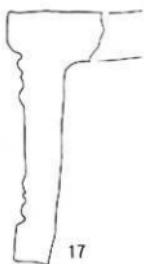
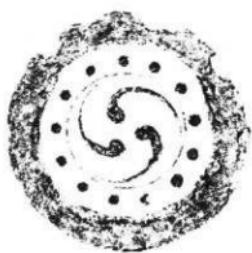
15



16

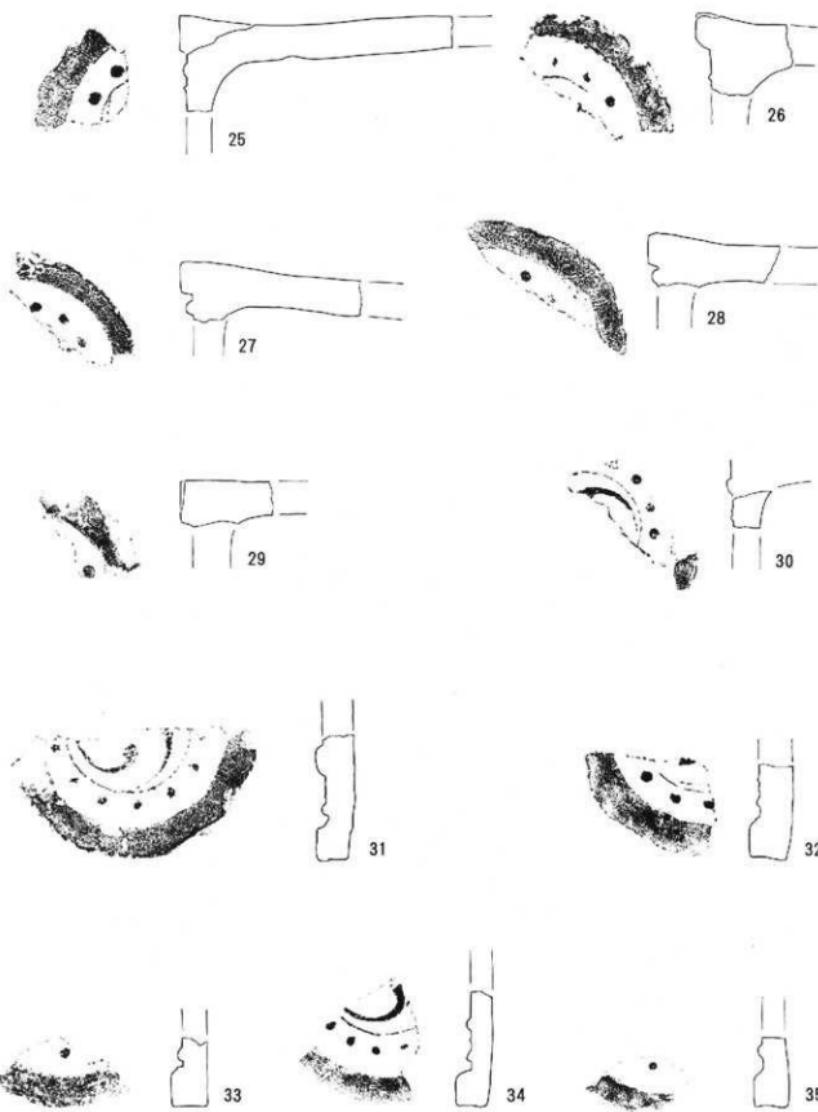
0 10cm

第26図 軒丸瓦実測図(2)



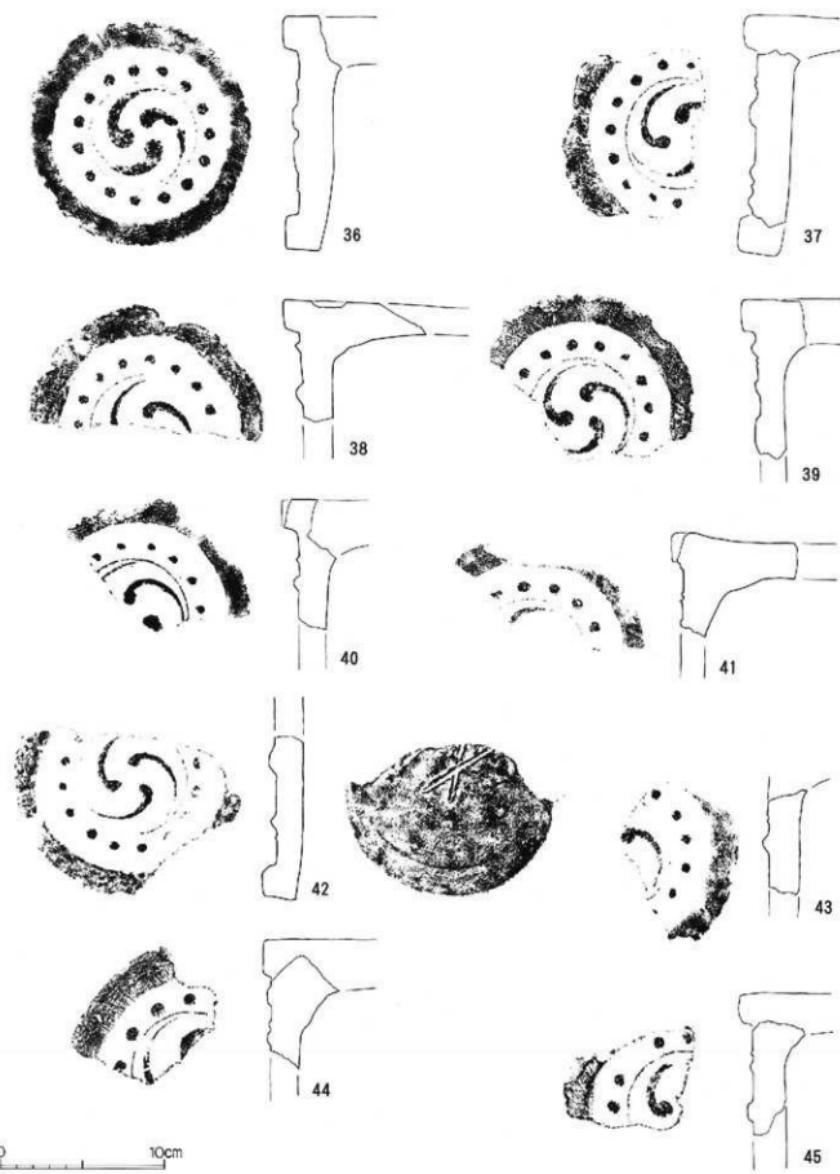
0 10cm

第27図 軒丸瓦実測図（3）



0 10cm

第28図 軒丸瓦実測図 (4)



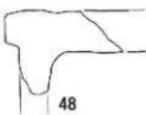
第29図 軒丸瓦実測図 (5)



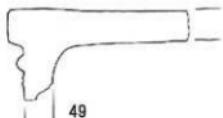
46



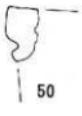
47



48



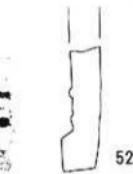
49



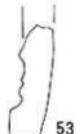
50



51



52



53



54



55



56

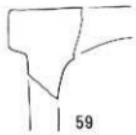
第30図 軒丸瓦実測図(6)



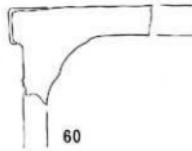
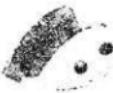
57



58



59



60



61



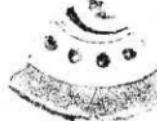
62



63



64



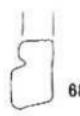
65



66

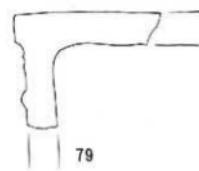
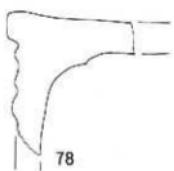
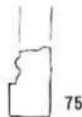
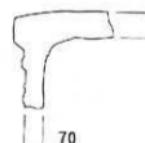
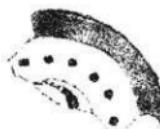


67



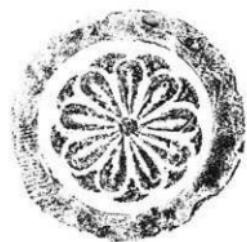
68

第31図 軒丸瓦実測図(7)

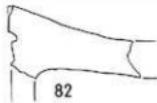


0 10cm

第32図 軒丸瓦実測図 (8)



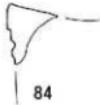
81



82



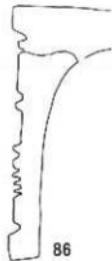
83



84



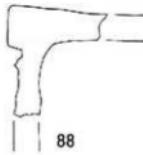
85



86



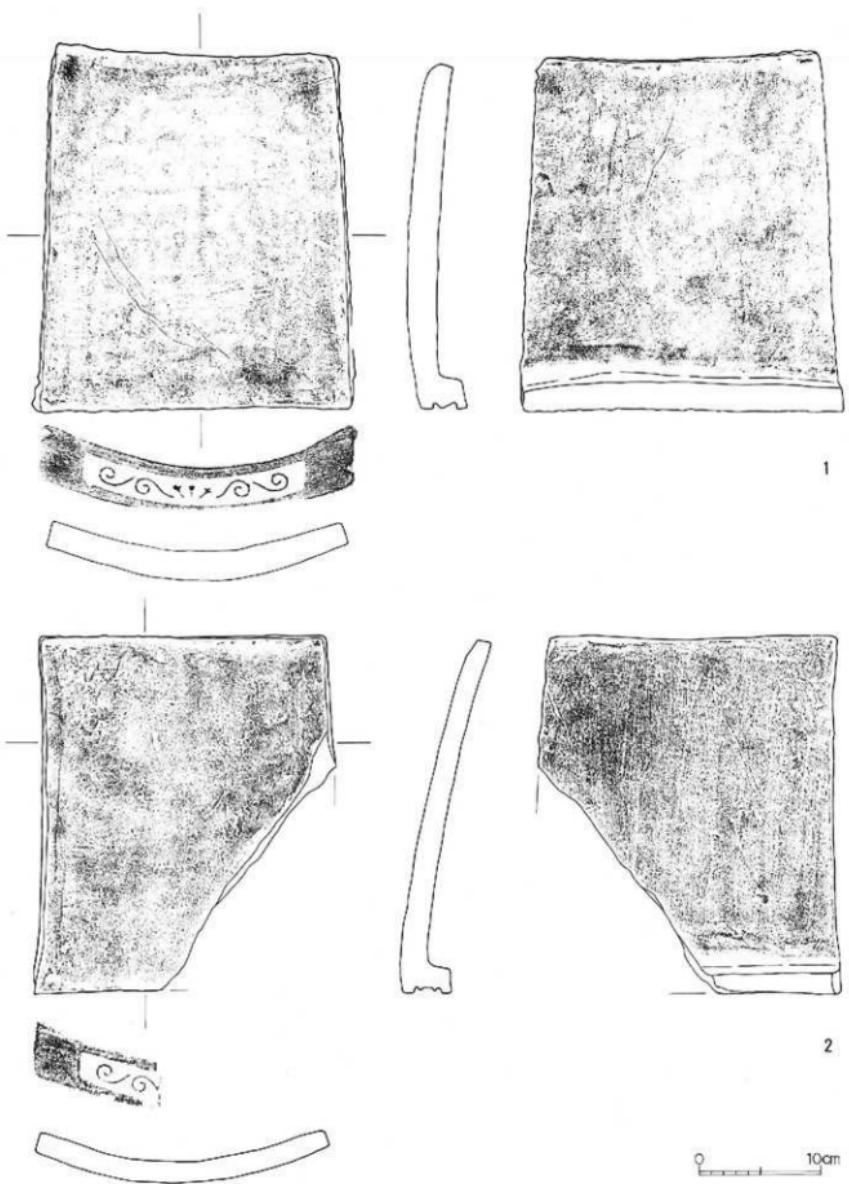
87



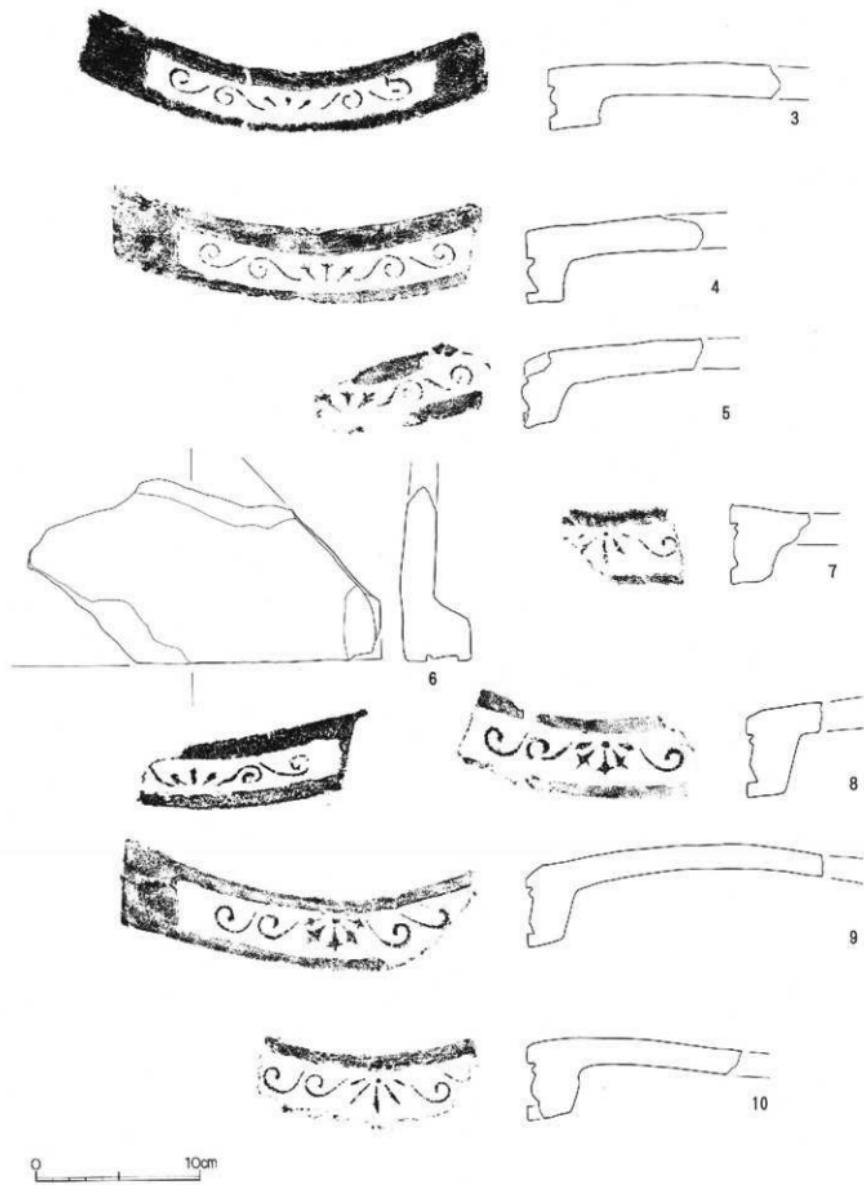
88

A scale bar marked from 0 to 10 cm.

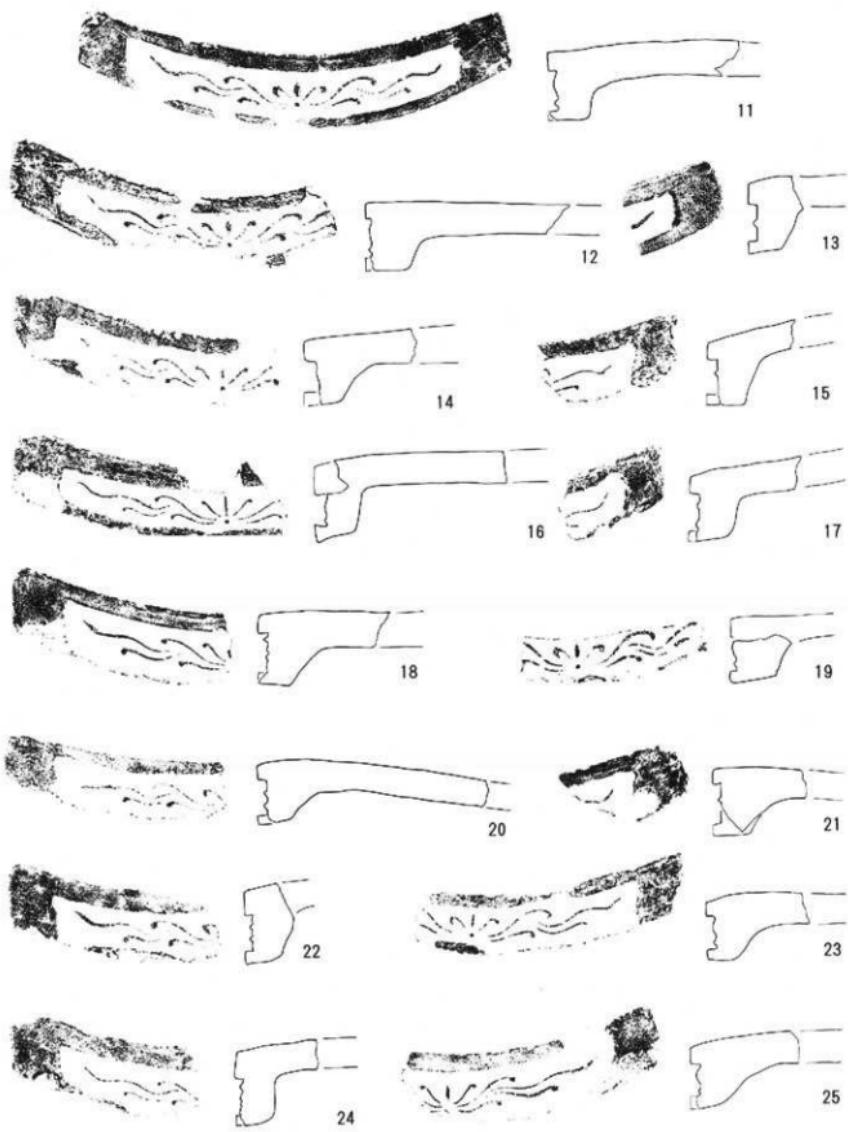
第33図 軒丸瓦実測図(9)



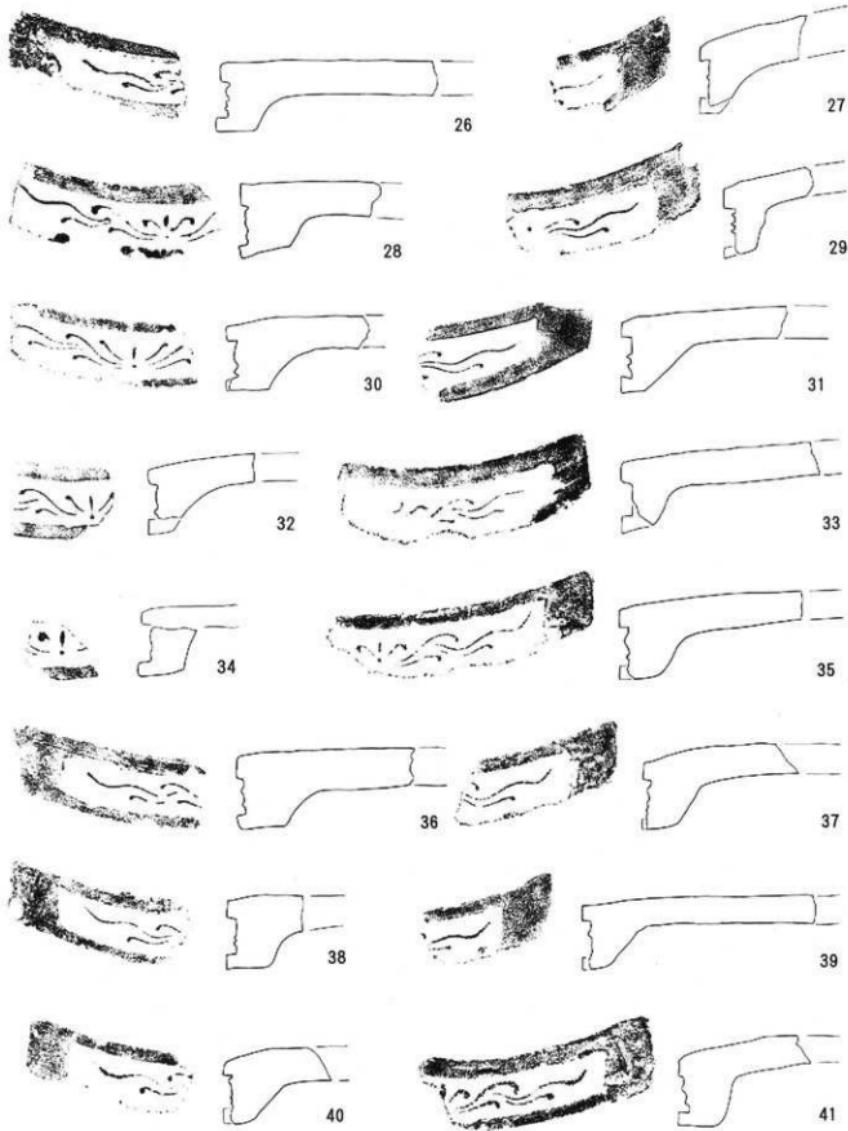
第34図 軒平瓦実測図（1）



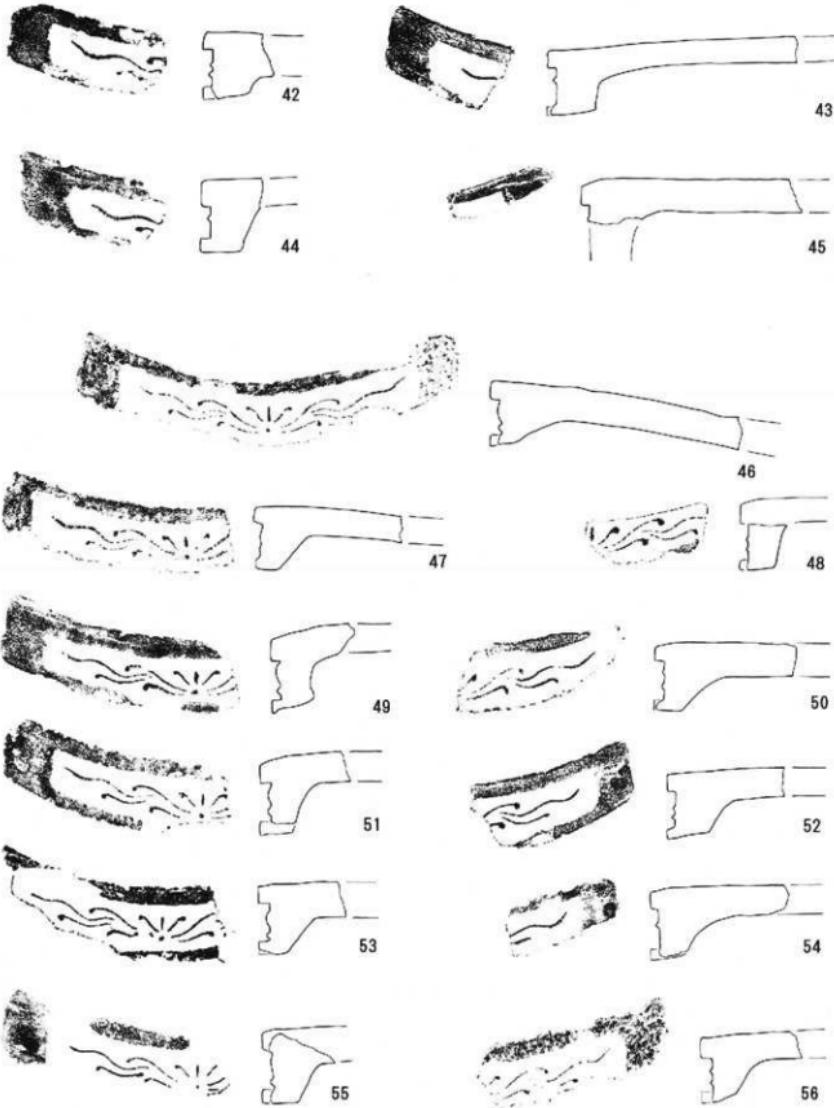
第35図 軒平瓦実測図（2）



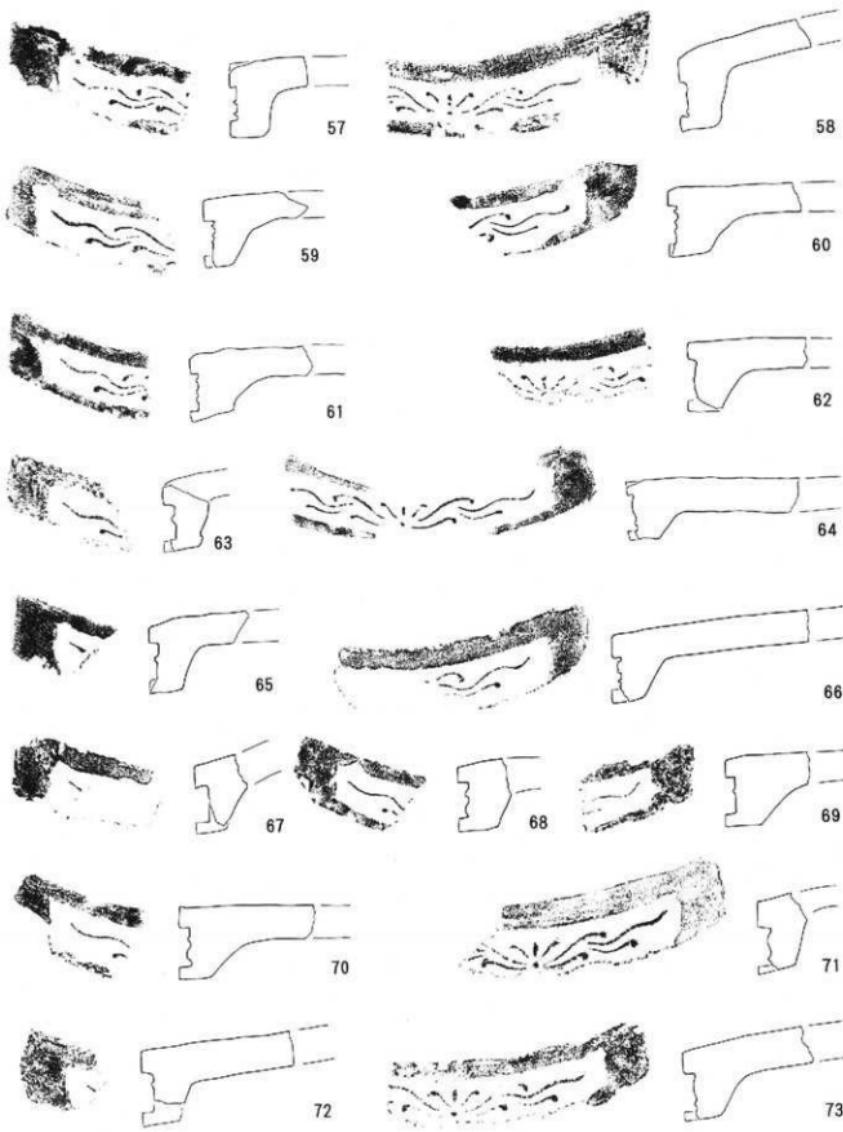
第36図 軒平瓦実測図（3）



第37図 軒平瓦実測図（4）



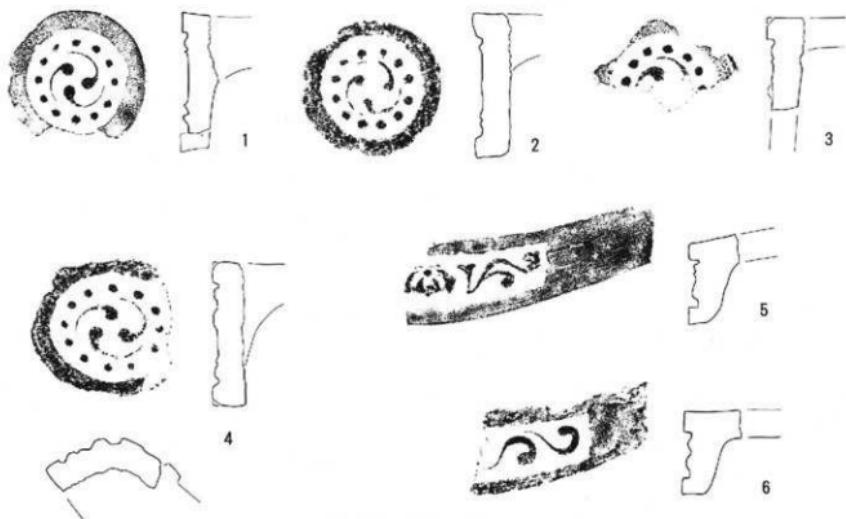
第38図 軒平瓦実測図 (5)



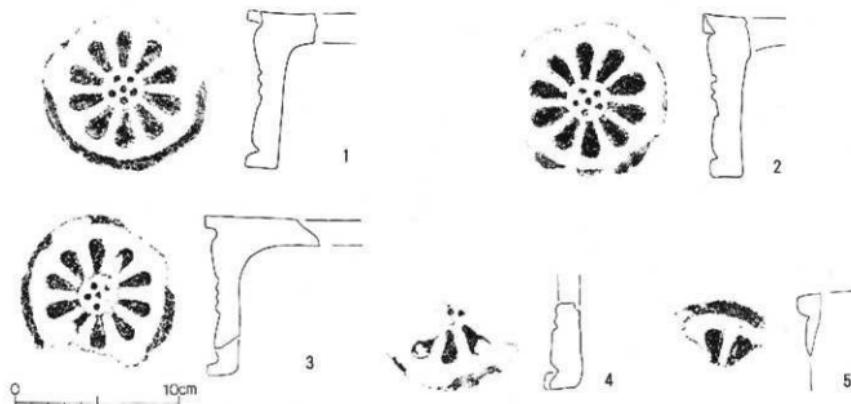
第39図 軒平瓦実測図（6）



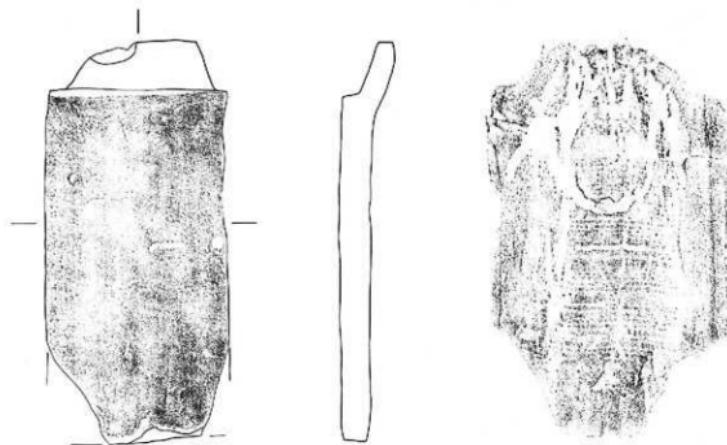
第40図 軒平瓦実測図（7）



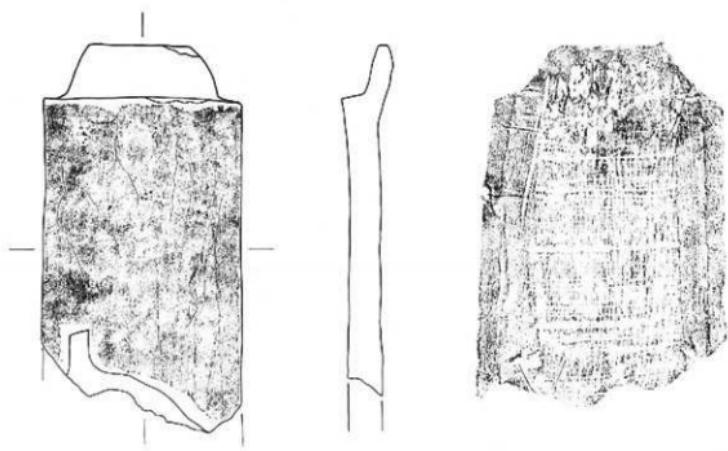
第41図 棟瓦実測図



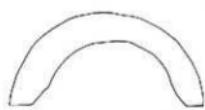
第42図 菊丸瓦実測図



1



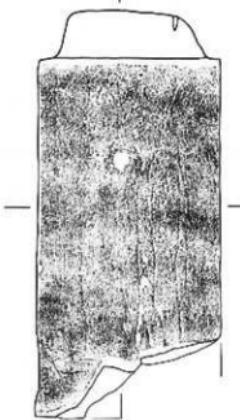
2



第43図 丸瓦実測図（1）



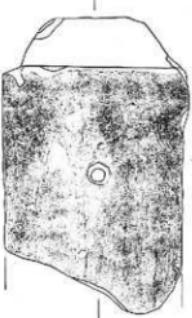
3



4

0 10cm

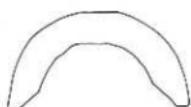
第44図 丸瓦実測図（2）



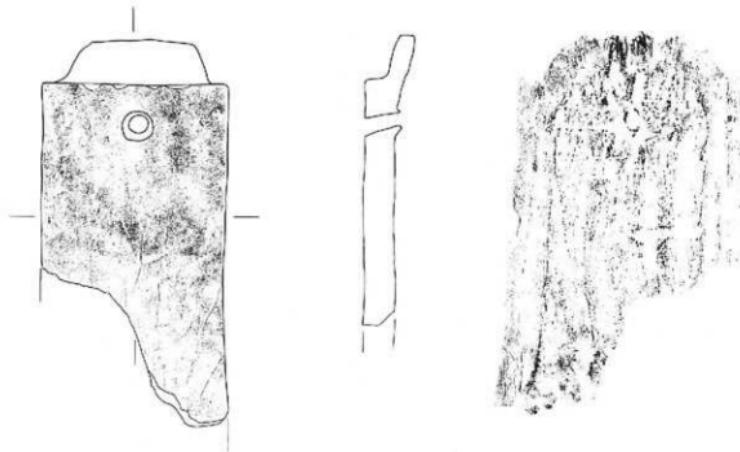
5



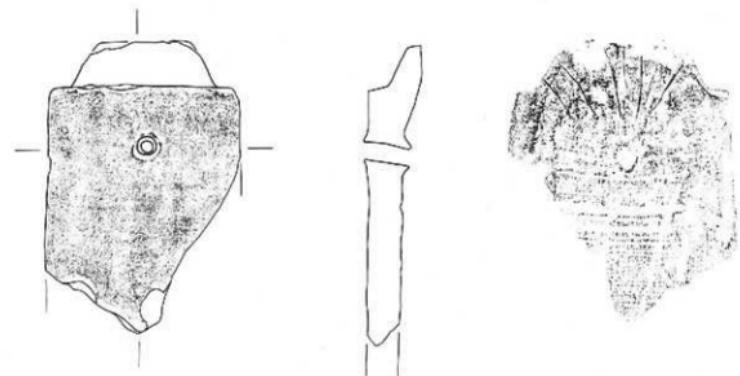
6



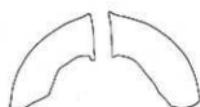
第45図 丸瓦実測図（3）



7

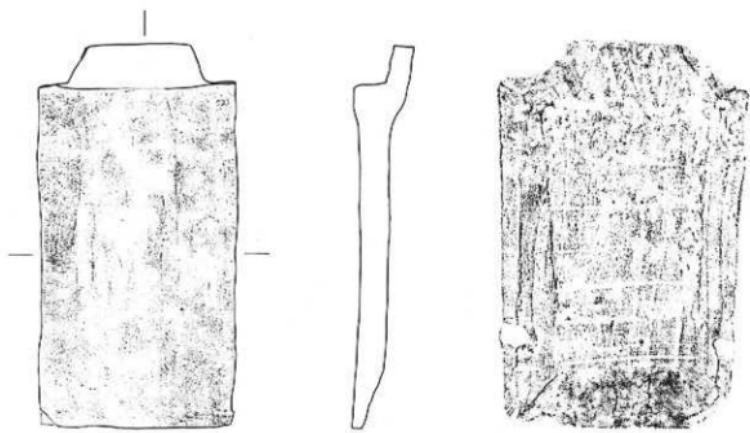


8

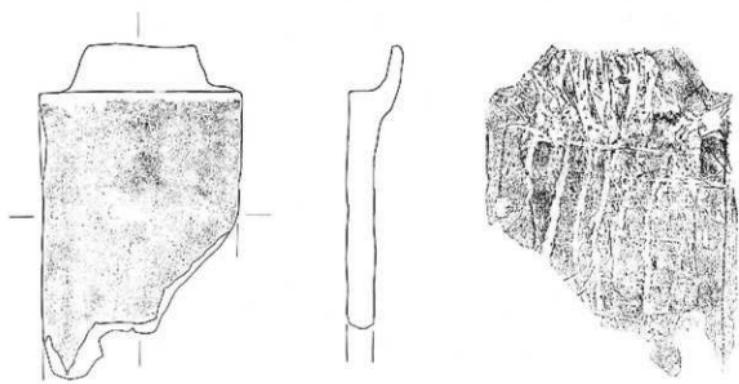


A scale bar at the bottom right of the page, marked with a vertical line and horizontal tick marks, labeled "10cm".

第46図 丸瓦実測図 (4)



9



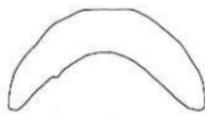
10



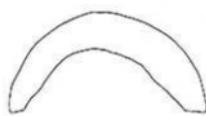
第47図 丸瓦実測図（5）



11



12

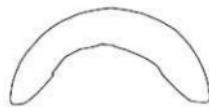


10cm

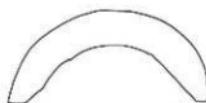
第48図 丸瓦実測図 (6)



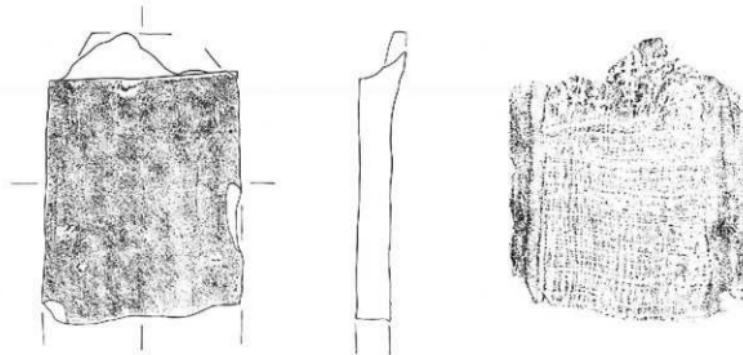
13



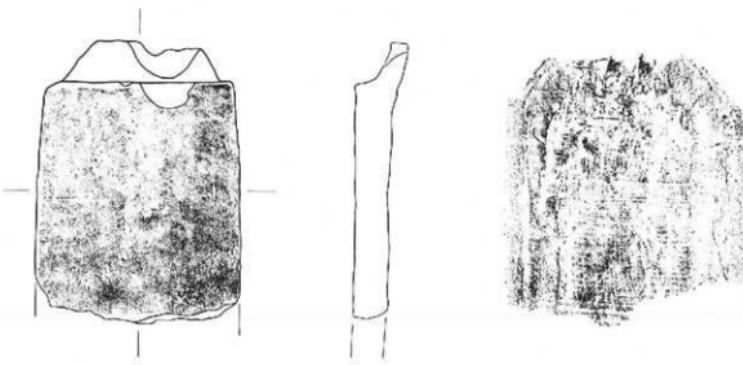
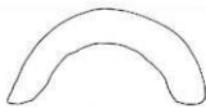
14



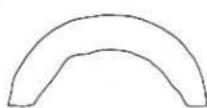
第49図 丸瓦実測図(7)



15

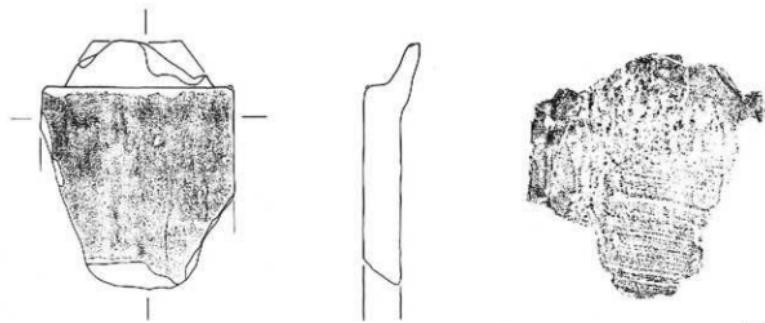


16

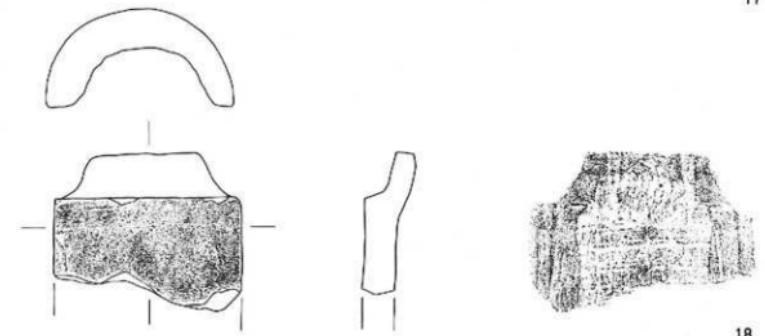


0 10cm

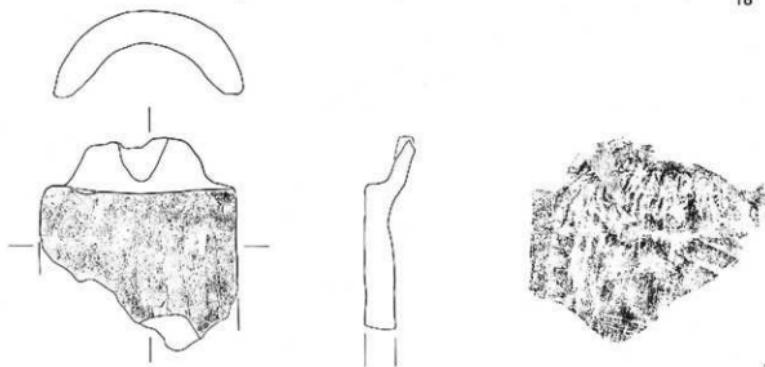
第50図 丸瓦実測図 (8)



17



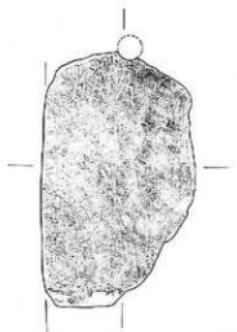
18



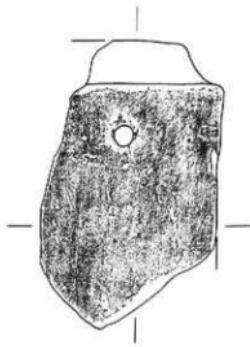
19



第51図 丸瓦実測図（9）



20

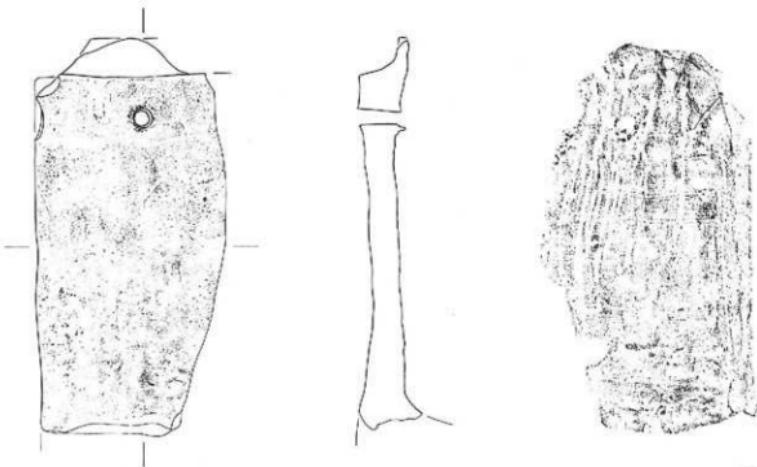


21

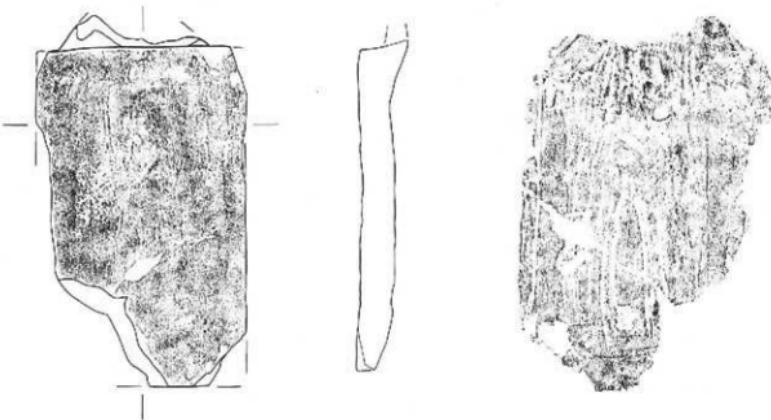


0 10cm

第52図 丸瓦実測図 (10)



22

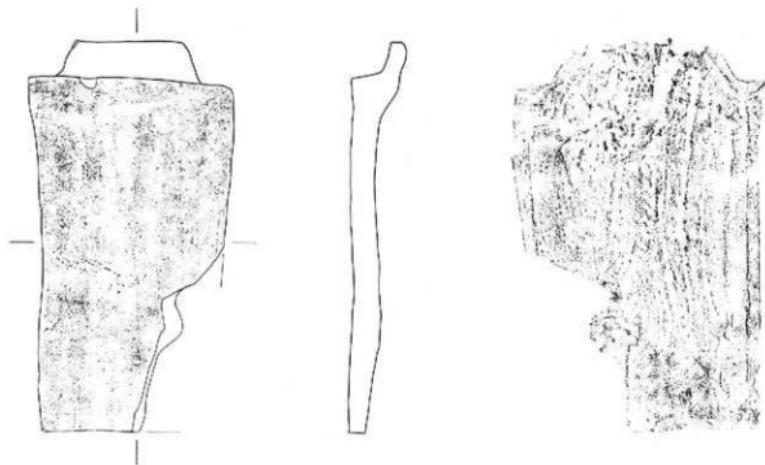


23

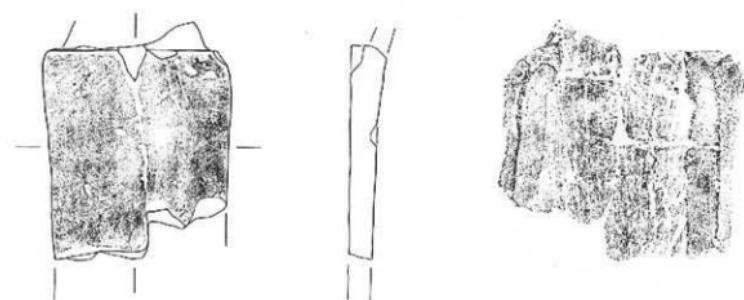


0 10cm

第53図 丸瓦実測図 (11)



24



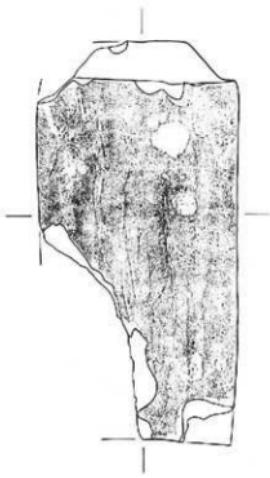
25



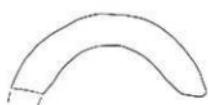
第54図 丸瓦実測図 (12)



26

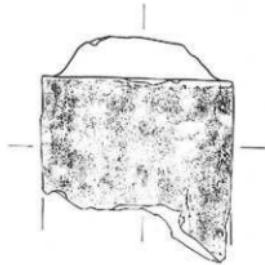


27

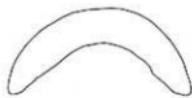


0 10cm

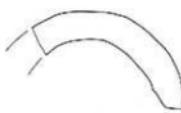
第55図 丸瓦実測図 (13)



28

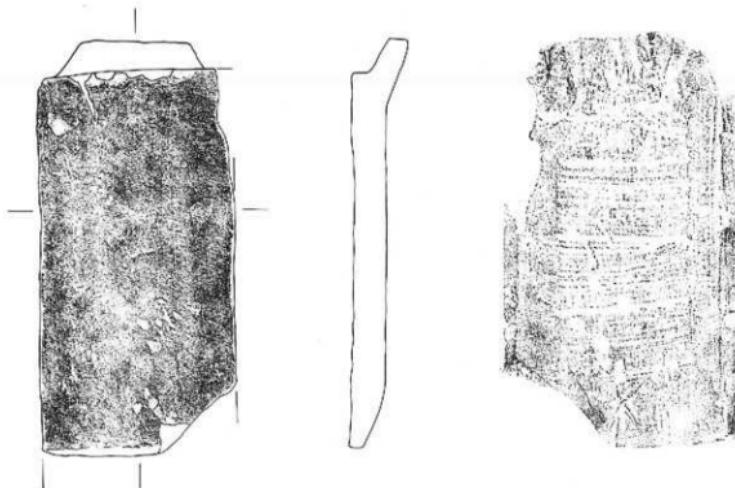


29

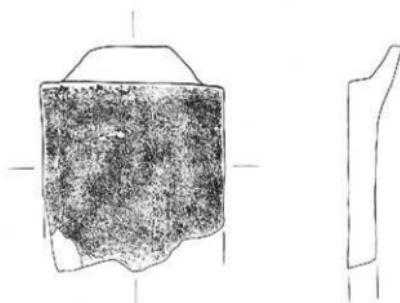
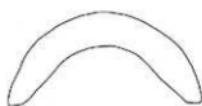


0 10cm

第56図 丸瓦実測図 (14)



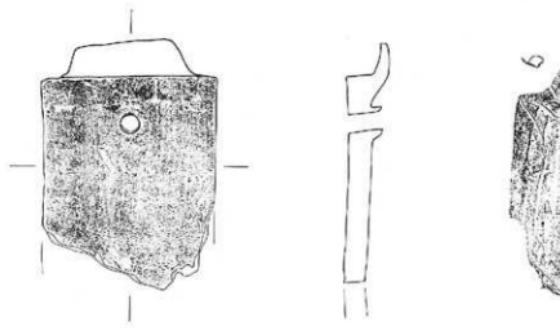
30



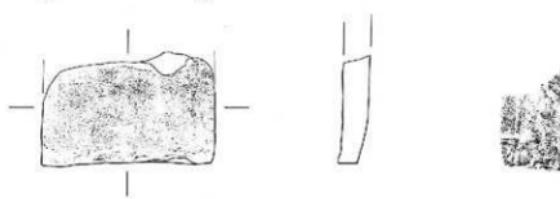
31



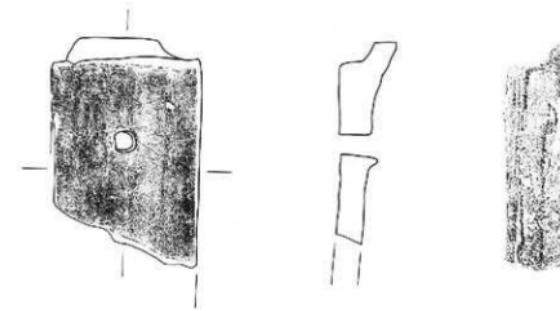
第57図 丸瓦実測図 (15)



32



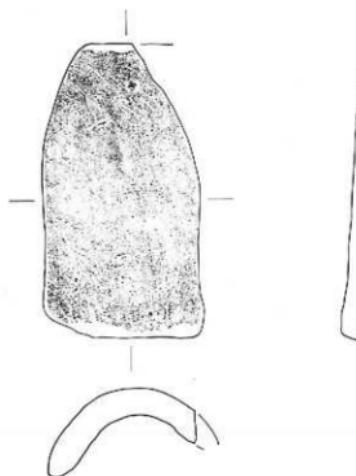
33



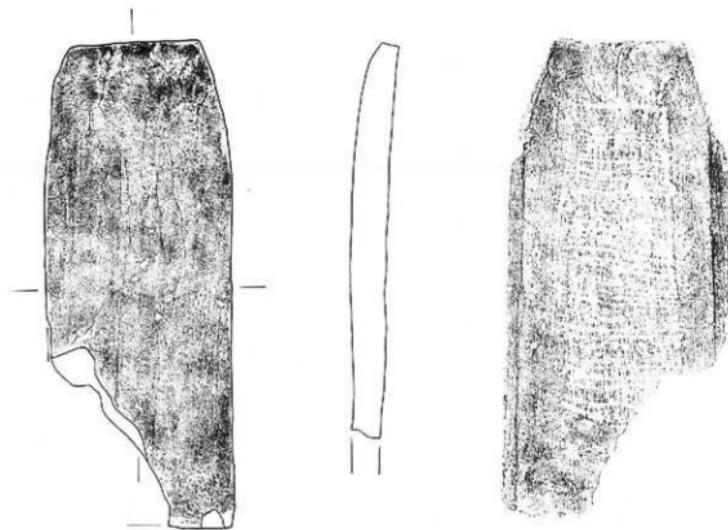
34



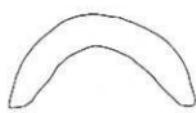
第58図 丸瓦実測図 (16)



35

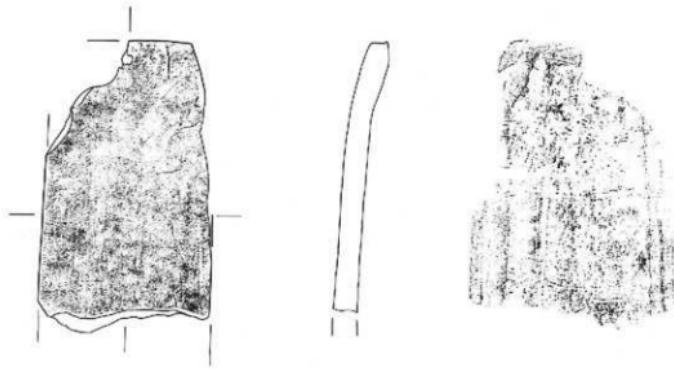


36

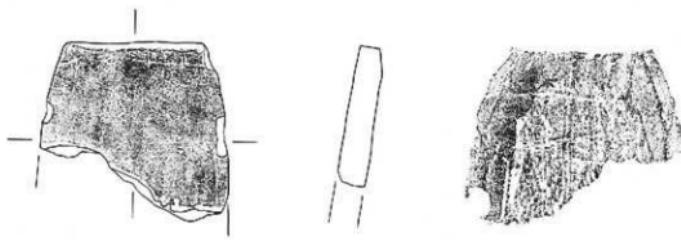


0 10cm

第59図 丸瓦実測図 (17)



37

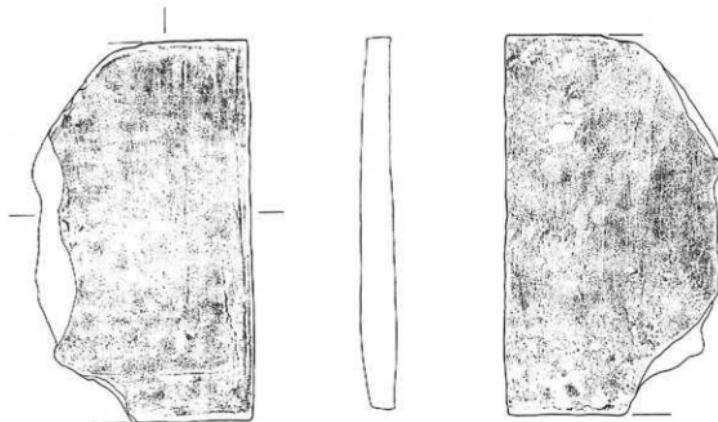


38

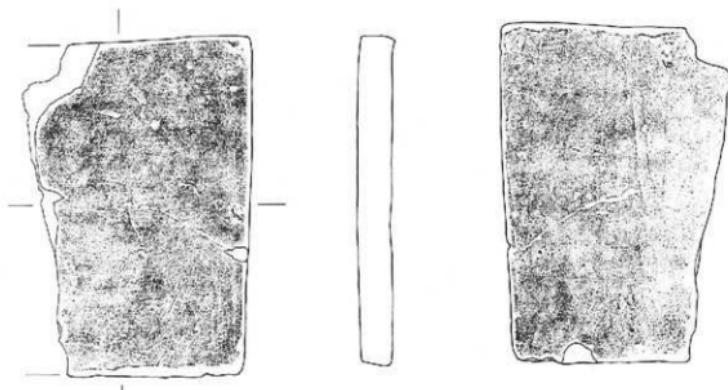


0 10cm

第60図 丸瓦実測図 (18)



1

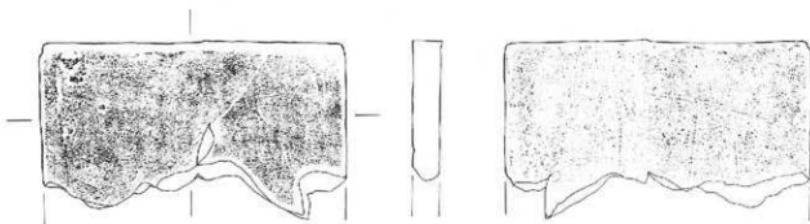


2

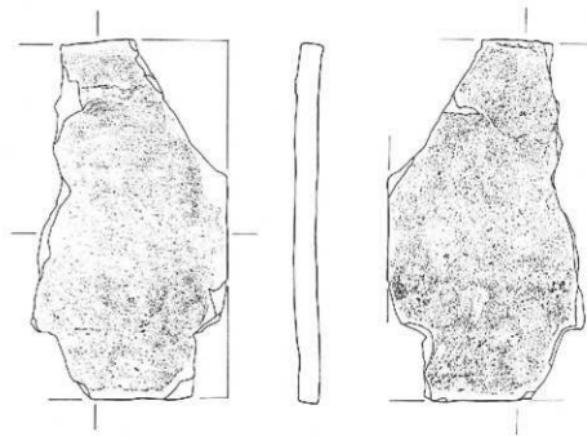


0 10cm

第61図 平瓦実測図(1)



3



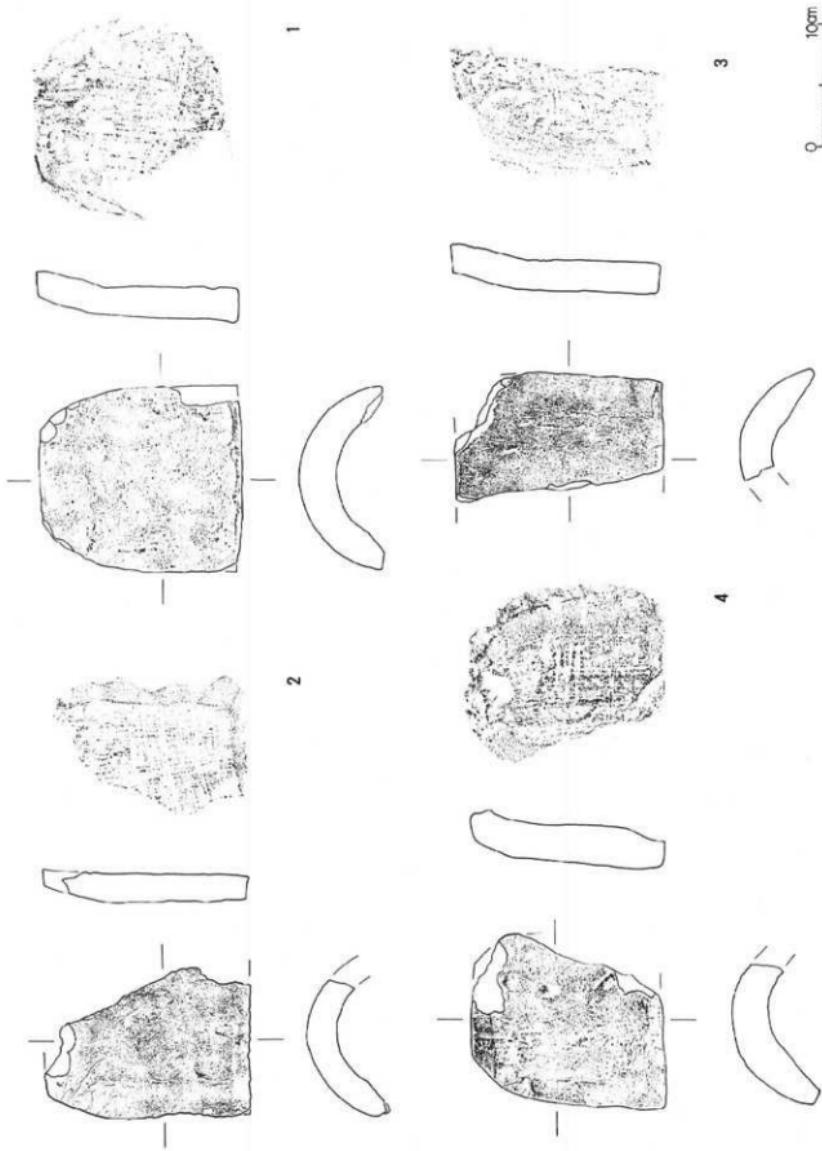
4



0 10cm

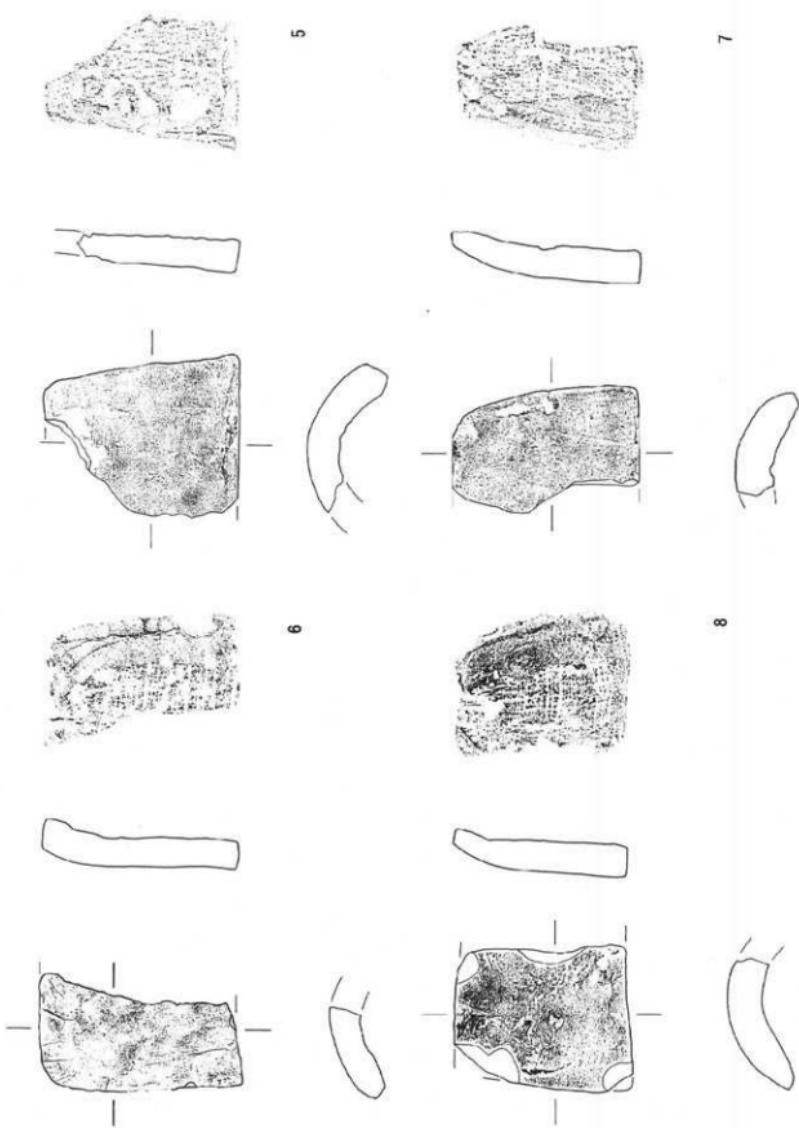
第62図 平瓦実測図（2）

第63図 輪遠い瓦実測図(1)



第64図 輪違い瓦実測図（2）

10cm



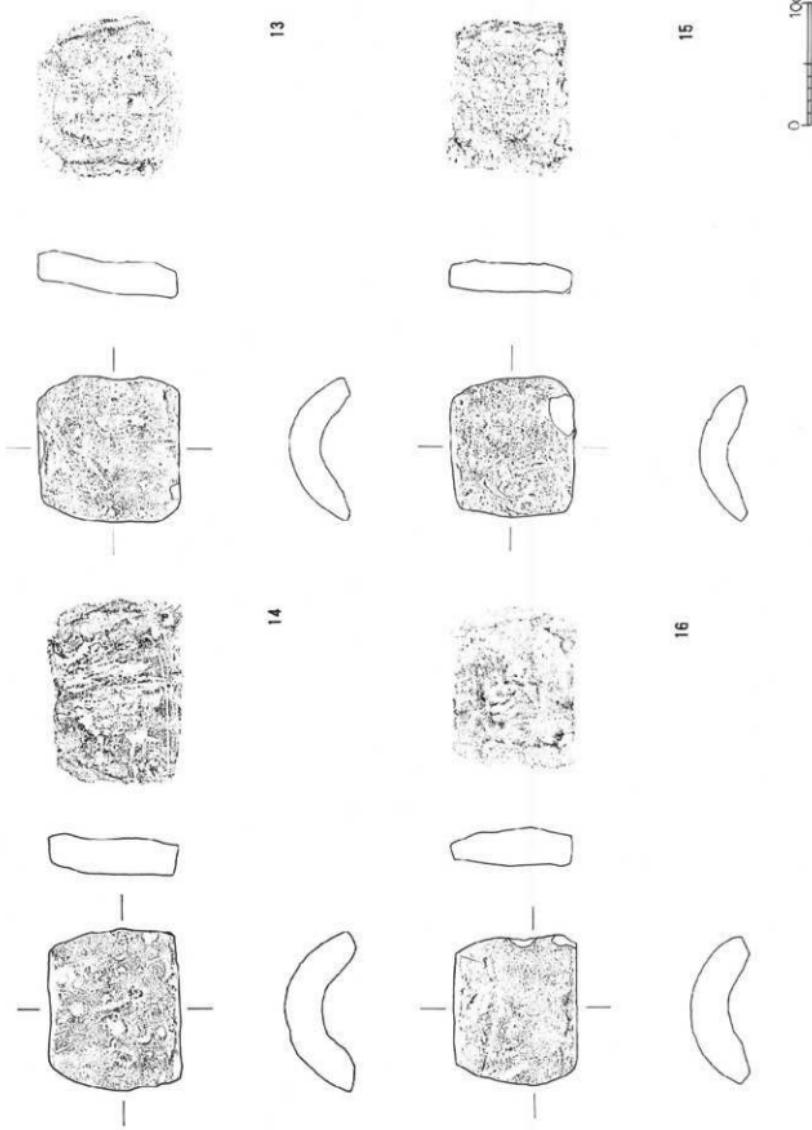
第65図 輪違い瓦実測図（3）

100cm

11

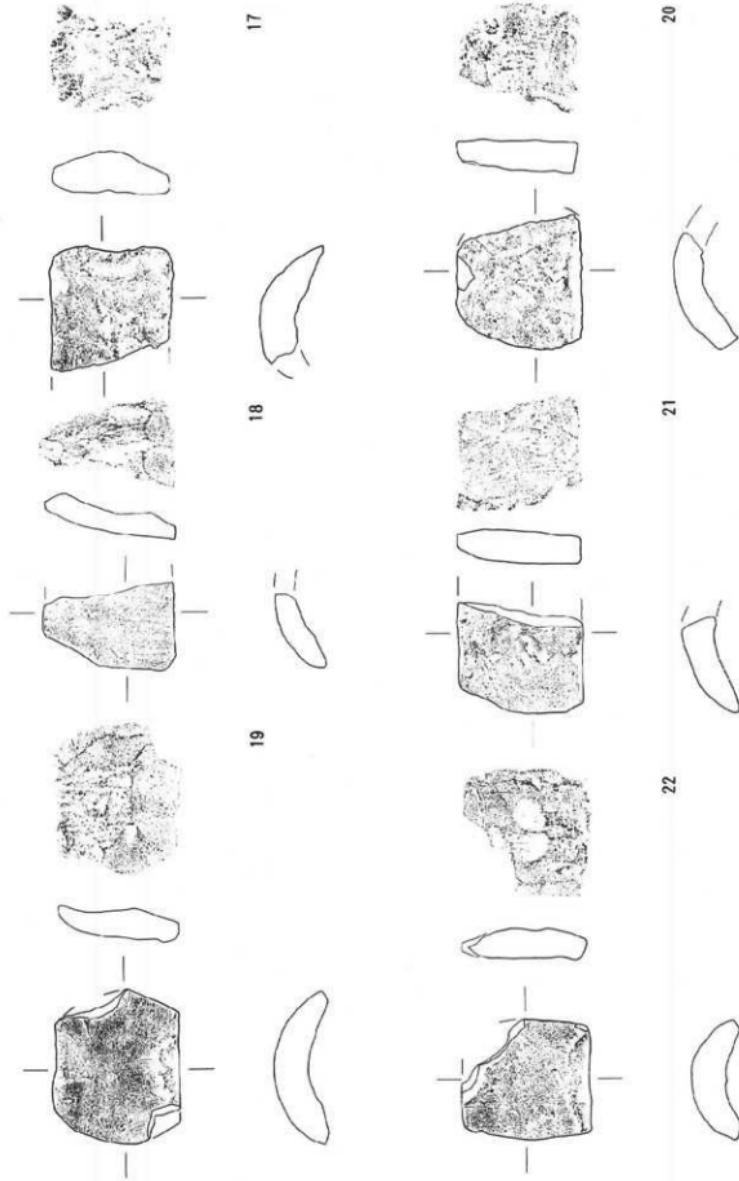
12

第66図 輪違い瓦実測図（4）



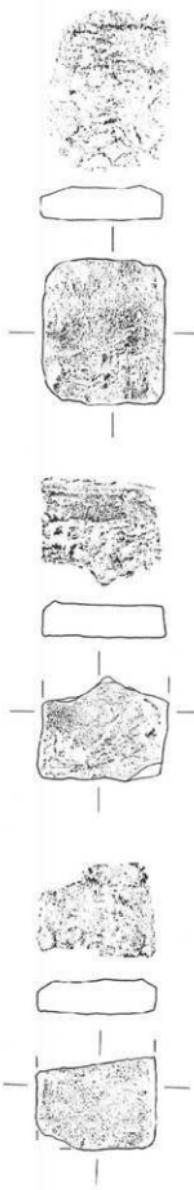
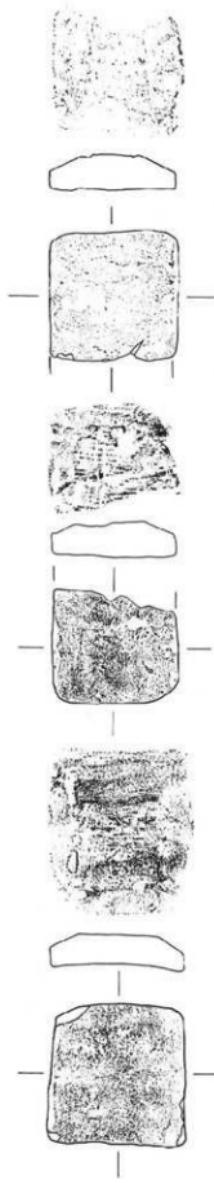
第61図 輪違い瓦実測図（5）

0 10cm



第68図 輪窓い瓦実測図（6）

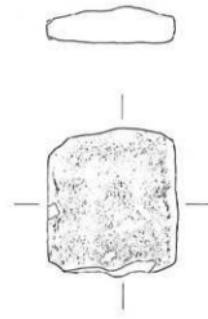
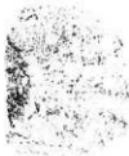
0 10cm



第69図 輪違い瓦実測図(7)

10cm

31



30

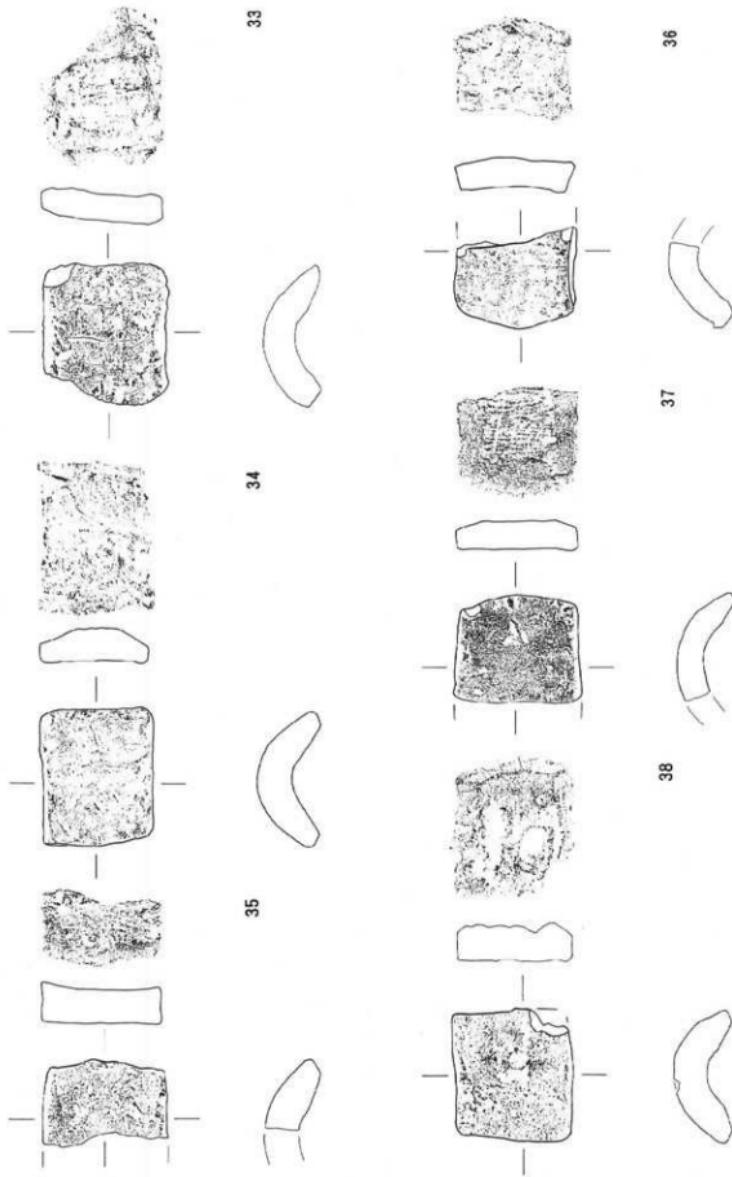


32

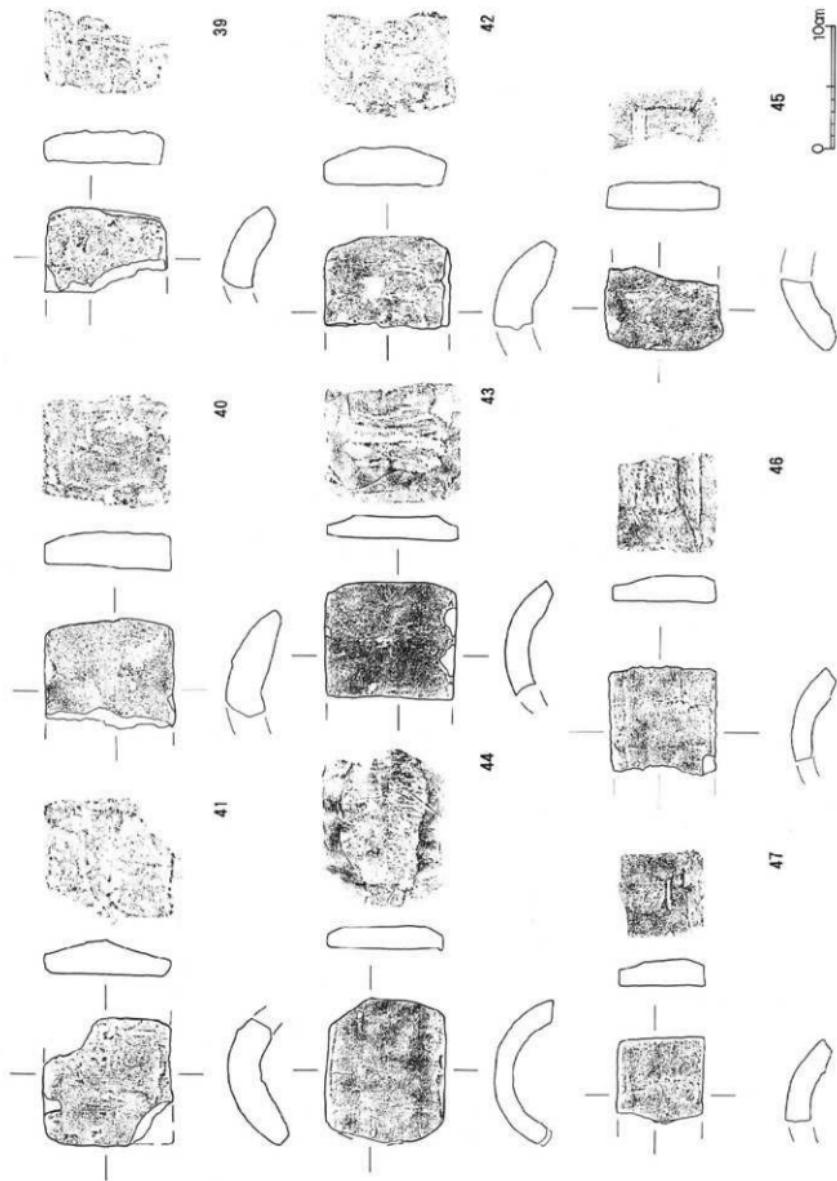


第70図 輪違い瓦実測図(8)

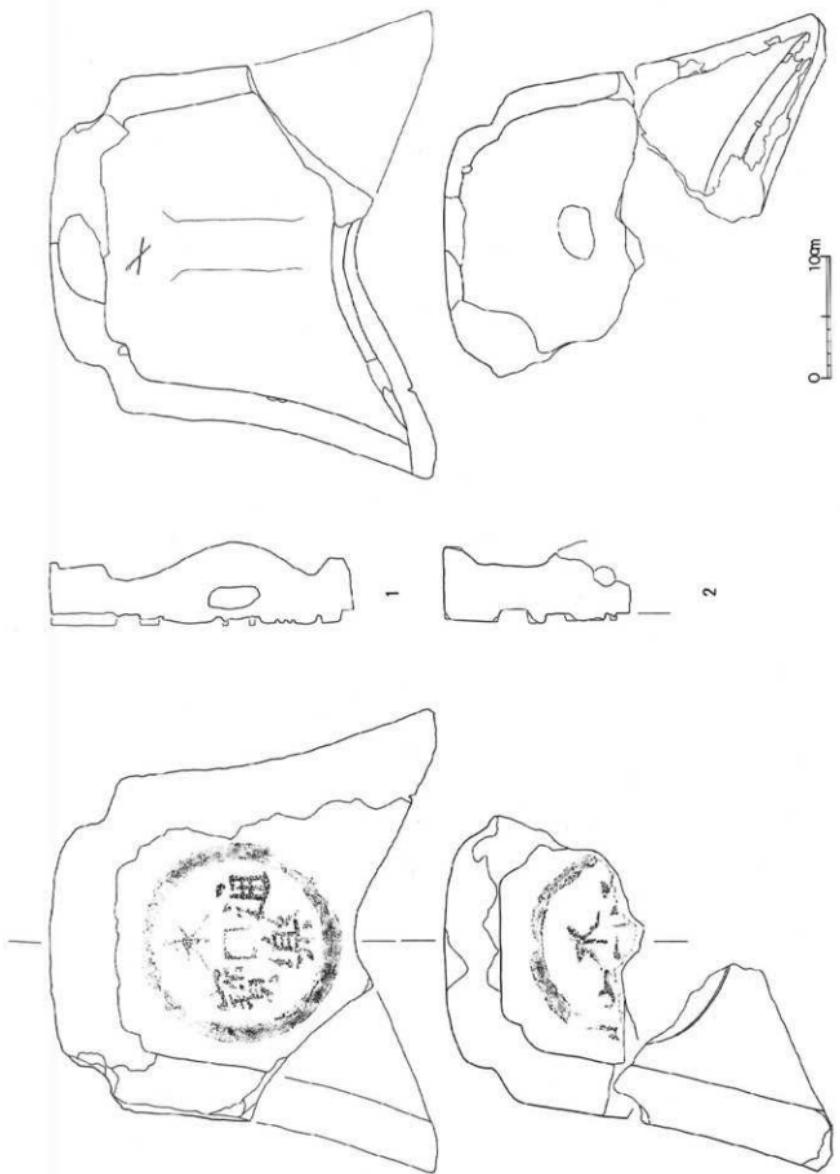
0 10cm

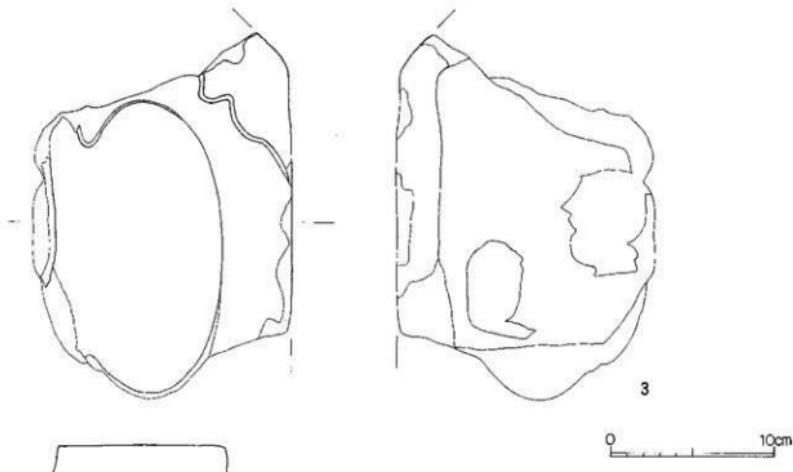


第71図 輪違い瓦実測図（9）

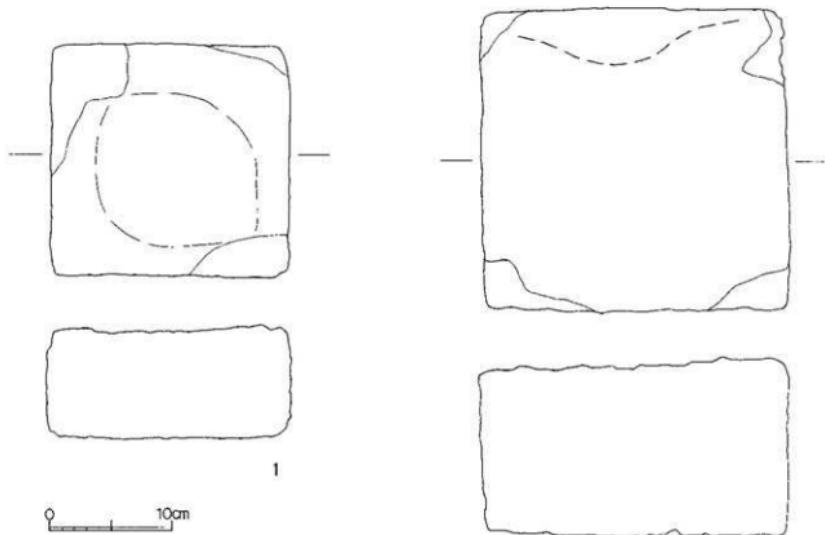


第72圖 鬼瓦實測圖(1)

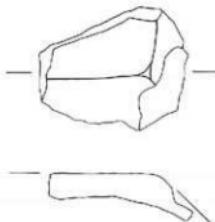
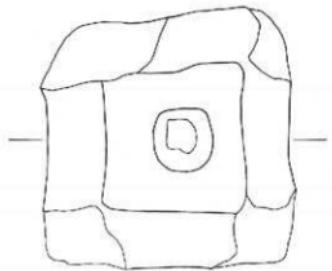




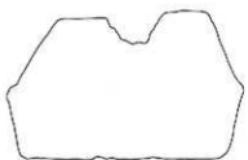
第73図 鬼瓦実測図（2）



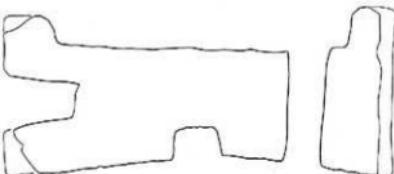
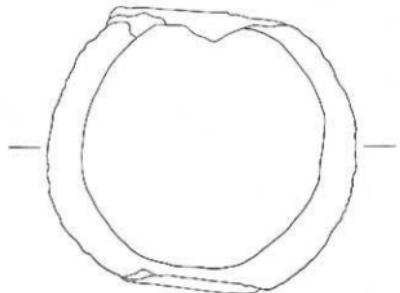
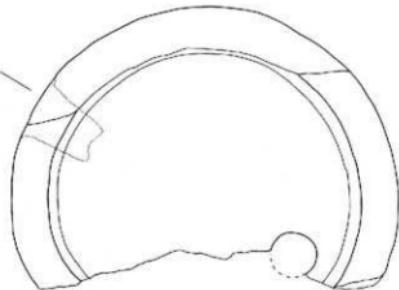
第74図 石製品実測図（1）



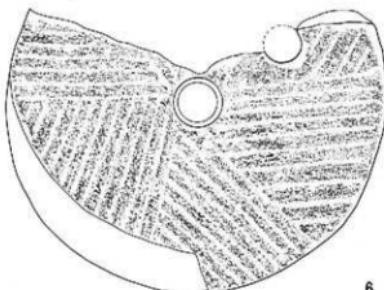
4



3



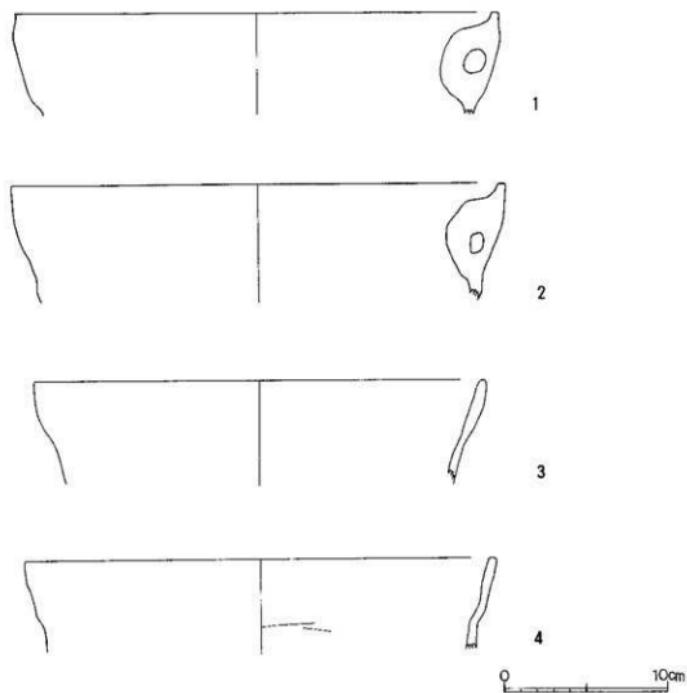
5



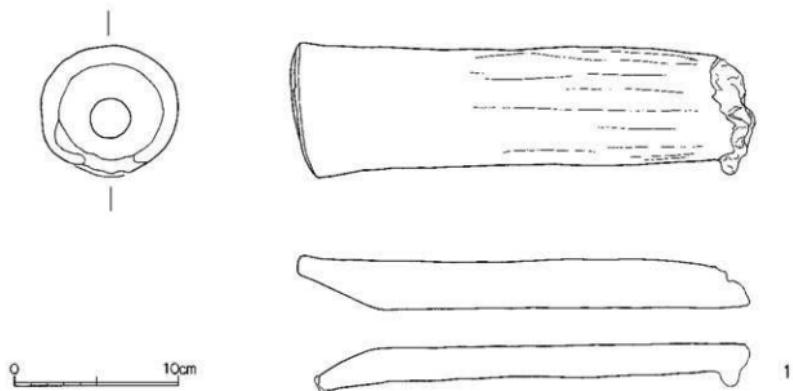
6

0 10cm

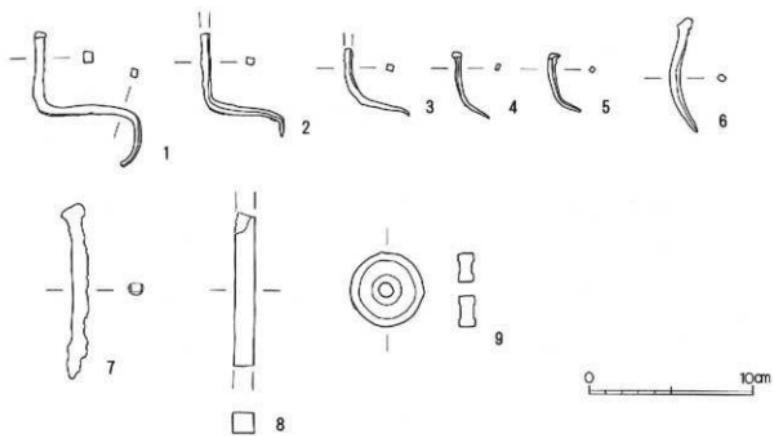
第75図 石製品実測図（2）



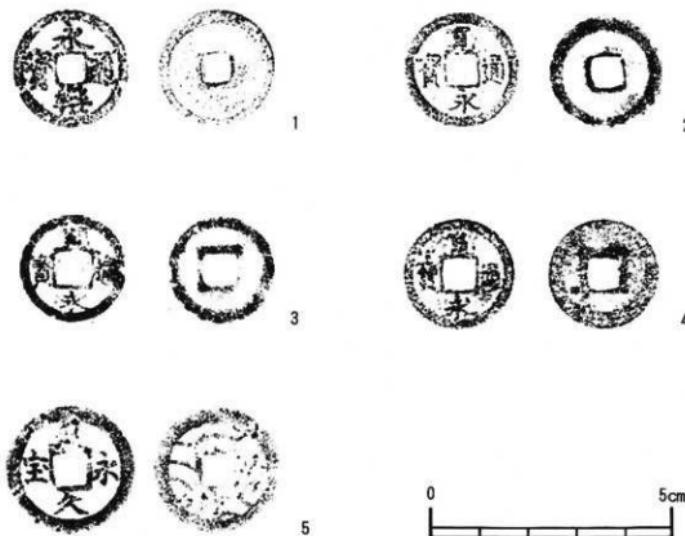
第76図 土師質土器実測図



第77図 羽口実測図



第78図 鉄製品実測図



第79図 錢貨拓影図



# 写 真 図 版





史跡上田城跡全景（新日本航業株式会社撮影）



第1号（北西）隅櫓跡全景  
(南より)



第1号（北西）隅櫓跡  
真柱磁石付近（東より）



第1号（北西）隅櫓跡  
(北東部瓦出土状況 (南より)



第2号（北東）隅櫓跡  
全景（西より）



第2号（北東）隅櫓跡  
全景（南西より）



第2号（北東）隅櫓跡  
(南より)



第3号（北東）隅櫓跡・  
近代建物跡全景（南より）



第3号（北東）隅櫓跡  
(北西より)



第3号（北東）隅櫓跡  
真柱礎石（南より）



本丸東辺土塙跡  
(北東より)



本丸東辺土塙跡  
(北西より)



本丸東辺土塙跡断面  
(北西より)